

弁財船

25号

昭和43年2月29日
発行 厚田村史料室
編集 厚田村史料室

印刷 日章商店

特集 弁財船のこと

北前船往来

越崎宗一 述

弁財船は「北前船ともよばれている。本号は弁財船の特集であるので、この弁財船研究に最初火をつけた。越崎宗一氏の論考を特におゆるしを得て掲載させて頂くことにした。

越崎宗一氏は、小樽商高(小樽商科大学)卒業後(越)越崎商店を経営されるかたわら、今日まで小樽市教育委員長等多くの公職につかれ活躍され「北前船考」その他の著述を出版されている。ここに、氏の御労作を掲載することを快くお許し下さった御厚意に深く感謝申し上げます。なお、本稿は昭和三十八年に発表されたものである。(谷内 鴻)

私の先祖は代々加賀大聖寺藩に軽い土分で仕えていたが、御維新になつて明治二年封土藩籍の奉還となり、翌々年には藩主前田利カは東京へ引揚げてしまった。

そこで私の祖父父物治郎は縁を離れて商人になり屋号を越後屋と称した。元来先祖は河崎姓であったが商売を始めてからは越後屋で何の不自由もなかつたところ後平民も苗字を唱うべきこととなつた

名な船持ちであつた。大家、広海が北前を持ち始めたのは幕末からで、その以前は近廻りの川崎船を持つていたに過ぎなかつた。北前船とは上方と北国地方更に北海道との荷物輸送に従事した一本柱の和船で千石積み或いはそれ以上の大きいものもあつた。

和船の大きさは帆の大きさと云い表された。その単位を枚と称し一枚とは帆木綿幅二尺二寸物を指した。二十七枚形とか二十八枚形とか呼び、これによつてその船の石数をも知り得た。

明治初年小樽へ往来した加賀の木屋八郎右衛門の持船は三十三枚形で日本一と称せられたが、後に佐渡附近で借しいことに難破した。

千石積みの標準の大きさは長さ八十尺、幅二十四尺、深さ八尺八寸内外であつた。北前は航海をすまずと十一月頃大阪の難波辺に引き揚げられ、害虫を防ぐために船底を粗朶で焼いて修繕を施され三月迄冬囲いされる。難波辺は北前の根拠地であり多勢の船大工がいた。ドンヨリ曇り勝ちの北国の冬

が去り春ともなれば、能登、加賀、越中、越前など北国筋の船頭や水夫達は草鞋がけで村を出立し、鯖江、武生を通過して江州まわりで大阪まで歩いて行つた。大阪には夫々泊りつけの船頭宿、船員宿があつて、右近の船頭は、伊勢路、船員はツケフネ宿泉喜三郎へ泊つ

た。北前の全盛時代ともいふべきは徳川中期から明治十四、五年迄、降つても二十年頃までだつた。

自家の船で船頭をするオテセン(亭主船)に比べて雇われ船頭はその倍という割合だつた。一船には船頭以下十五名から二十名乗り込んだ。

北前が春の艦装が出来ると大阪から諸雑貨を始め堺の清酒や沖繩鹿兒島の黒糖を積み込んで出帆し、四国坂出に寄港して三盆白(俗に四国の三白と称した)や綿を船積みし、瀬戸内海では播州の素麺や尾道から酢、畳表等を、三田尻では塩を積み、馬関を廻つて日本海を北上し、敦賀では鯨漁場の縄疋を積んだ。能登の燈明堂では四月から九月迄毎夜松明を焚いて日本海を渡る船の目当とした。

三田尻積みの塩を新潟、酒田で下ろして代りに米、越後酒、白玉、大山酒など積んで北海道へ向つた。和船のこととて帆一枚風次才で動くので、風まわりがよければ郷里から北海道まで十五日か二十日で行かれたが、風まわりが悪ければ二ヶ月もかかつたという。

この様な時には越中の伏木佐渡の相川、両津、赤泊や越後の直江津にも属々入る。風が吹かぬと幾日も沖合に漂つていることもあつた。北海道では福出、江差へ行き、そこで場所をとりこんで室蘭の昆布、小樽、函館の身欠、鯨粕を買い積み込み、日本海を上り多

くは馬関まで通して起り、馬関で値を聞き合して一部は因島、玉島、ユリ島、尾道あたりで売り、更に大阪に持ち還る。春から秋にかけて一航海で、秋には大阪に前述の如く船を囲い、船頭水夫達一行は再び草鞋がけで帰途につき、途中京都で本山詣りして夫々村へ帰つた。冬の間は船頭も若い衆も山代、山中、芦原などの温泉に湯治に行つて身体を休めた。

北国の人々が船に乗つて商売することが何時頃から始まつたかについてはよく判らないが、若狭内浦宇山中の豊年踊りは足利時代頃のものと考えられて居り、いかに北国らしくこの航路が謡われている。

商踊(山中踊)

皆一様にお並びやれ、皆一様にお並びやれ、若狭の浜より船のり、越前岬につかえたり、イヨ商踊りを一踊り。

越前岬も押し出して加賀の港へつかえたり商踊りを一踊り、一踊り、加賀の湊を押し出してじかん(註、能登の寺家泊)の市へつかえたり、商踊りを一踊り、一踊り。

じかんの市も押し出して夷が島へつかえたり、商踊りを一踊り一踊り。夷が島では夷殿と商元では何々と、唐の衣や、唐絲や、じんや(沈香)じやこやや、たかの羽や、商踊りを一踊り、よろつの商仕

廻りて、いざ戻ろよ、我国へ、商踊りは是迄揃う、是迄揃う。即ち越前加賀をへて能登の寺家泊をこえると夷が島とあるから、恐らく佐渡の夷港を指しているのであろう。北陸道の和船が西海を經由して大阪に達する航路を聞いたのは寛永年間以後のことであつた。大阪市史には、

北国と大阪との交通は寛永年間加州藩が二百五十石乃至三百石積みの廻船を以つて米一万石を大阪に廻送し、爾後大抵年々加州米一万石の入津ありしと云う

と記されて居り、近江商人が松前で活躍する様になつた寛永、正保以後これ等船も北陸と松前を往來する様になり蝦夷の産物も若狭の小浜に荷揚されて若狭街道を通つて近江、山城へ流入するに至つたと思われ。

徳川時代松前藩の制度として内地より來往の諸船は蝦夷の三港即ち、福山、江差、箱館の何れかを經由し、沖ノ口番所の検査を受けて納税しなければならなかつたが、御維新になつて明治二年この沖ノ口番所は廢せられて、新たに函館、寿都、幌泉、小樽に海官所が設置せられて船舶は直接これ等四港に自由に出入検査を受け納税し得ることとなつた。

かくて福山等の富商の内店舗を陸統と小樽に移す者が多くなり西蝦夷地オタルナイの勃興は目覚し

いものとなつた。後年小樽財界に重きをなした山田吉兵衛、田中武左衛門、渡辺兵四郎、金子元三郎、藤山要吉、宮越伊兵衛、麻里英三、山本久右衛門、新谷喜作など何れも福山出身者であつた。

私の祖父宗平は郷里の人達が北前で北海道へ往來し、新天地北海道の将来が如何に輝かしいものであるかを聞かされ、雄心抑えがたく大家の船頭の厚意で北前に便乗して明治六年(一八七三)弟畑久平と共に初めて小樽へ渡つた。最初は山の上町で、次いで現在海陽亭の建つて居る崖の下の方に有幌通りに季節的に店舗を借り雜貨その他飲食料品を売り、秋に店を閉じて郷里へ戻つた。弟久平は後寿都へ移つて漁業を営んだ。祖父宗平が書き誌した明治十九年の永代帳には五月八日後志国小樽内、寿都行き出立、十一月二十七日帰宅と記されている。

宗平は明治二十六年小樽郡港町七番地板谷初次郎所有店舗及び石造倉庫を借り受け翌年これを買取、初めて常任営業所を持つに至つた。一省略

祖父が初めて小樽へ來た頃は人口、四、五千程度の一寒村に過ぎなかつたが、幕末から信香町を中心とする勝納川附近は小樽の中心をなし稍市街をなしていた。高島から振島崎にかけて多くの鯨漁場があつたが、勝納町から若竹町、アツトマリ、ポントマリにかけ

て、藤野、福永、山田、堺、田中、渡辺、布施、工藤など著名漁業家の漁倉、倉庫、納家、廊家などが立ち並んでいた。

当時小樽港への出入船舶は和船(当時弁財船又は弁財と呼ばれた)が絶対的に多かつたが、十三、四年頃からアイノコと云われた西洋型船舶や蒸気船が漸次その数を増す様になり、十八年以降に至ると西洋型船の積載量は日本型船のそれを遙かに超過することとなり北前の没落を示すに至つた。これ等の船主も時勢に従つて二十年以降には和船から帆船へ、さらに蒸気船へと移つていつた。大家、広海は三十年頃それぞれ小樽へ支店を設け移入商品の販売業を営み、倉庫業も開始した。右近も倉庫業を営み、これ等船主は後年まで小樽経済界に寄与した。

海官所は明治二年十二月手官に設けられたが、翌々年信香へ移り、信香の開拓使小樽山張所のすぐ前の海岸に高さ二十六尺の硝子張りの常燈台が設けられ夜間船舶の目標とされた。また山上町三本木坂の中腹には有名な赤ダモノ木が三本あつて、これが和船の出入最盛時に昼間の船乗り衆の好目標となつた。三本木に仙台出身の老婆が餅屋を営み羽二重餅を売つていたが、坂の上り下りに船夫達が休憩して帰国後も三本木が喧伝され、餅まで有名になつたという。常燈台は七年五月に焼失して約

十年間放置されたが、十六年札幌県は小樽港出入の船に対してその港外たることを標示すると共にその針路を定むる上に最も重要な地点、即ちその正北凡そ二海里半、高島郡祝津町日和山山頭に燈台を築造し十月十五日に始めて点火した。海面より燈火迄の高さ百六十余尺、日没より日出迄の祝津燈台の燭光は如何に船夫達に便宜を与えたことであろうか

幕府時代から小樽は西蝦夷地唯一の鯨の中場所漁場であつて勝納川口沖には多数の和船が來集し、従つてこの川を中心として市街が形成されていたので賤娼の入り込む数も到底他所の比ではなかつた。

当時の魔窟はコンタン町界隈であらゆる醜業悪事の魂胆をなすから役人等は、これを改善せんとして「金曇町」と改めたが、依然コンタン町と呼ばれた。明治元年頃は娼家割烹店など十五、六戸あつたが、四年には新地町と共に遊廓地に指定せられ、六、七年頃は全盛時代であつた。中場所の小樽では二月から三月にかけてヤン衆が入り、彼岸の頃に網卸が行なわれ、四月頃には北陸方面から米増雜貨を満載せる北前船の氷割を才一船として爾後陸統と入港して港内には櫓は林立し、商売は頓に活気を呈し、問屋は船頭を酒樓に招じし大盤振舞をなし、商品の売買は問屋を仲介として猷酬の間に行な

われた。また船夫や漁夫は着船する港々に於いて糞底を叩いて紅燈緑酒に浸つたから遊里の繁昌は素破らしいものであつた。

当時の遊女屋には丸辰、南部屋、小林、丸七、山千、角屋、丸越などがあつたが、最も有名だつたのは丸辰楼と南部屋で、丸辰の名妓勝子、稲子、仲子など才色優れ、開拓使の頭官が始終出入りして紫の幔幕を文関に張り巡らし「御用」の高張提燈を立てさせたといふから軍部華かなりし頃の豪勢に似たものと云えよう。

さて話を北前に戻そう。北前には船頭以下オモテ、カタオモテ、チク、オヤヂ、ワカインユ、カシキ(炊事役)茶汲みの少年など十五、六名の男が乗り込んでいる。船頭の室には黒光りの頑丈な金具張りの船簞笥がデンと据えられ、その前に船頭が座つている。港に入ると行きつけの船問屋の主は遠眼鏡で沖を見守り、自分の抜船であることが判ると、早速ツノ樽に酒を詰めて出迎え勞々届け、長い航海からの無事入港を祝う。船頭はモチリの着物に盲地のサシユを着ているが、縞の羽織をきてテンマ(小舟)に乗り込み、返礼の米一俵と染紋の紺地の「ゆたん」をかけ、時には更に外箱に納めた船簞笥を積み込み緋縮緬の禪一本の威勢のよい若い衆の八丁櫓の掛け声も勇ましく上陸する。

船頭は商品売買の一切の権限を

持つて居り、船問屋は北前の商いの世話を口銭を貰うのであるから船頭の宿をして、一番立派な座敷へ案内し、滞在中は下にも置かずサービスする。船頭は船籠筒を出帆の時まで滞在中預けておく。船籠筒の製作地は裏日本地方で主要な産地は越前の三国、佐渡の小木、羽前の酒田であった。用材は主に樺で上等な玉李が愛され李目が透いて見える溜塗りに仕上げられ、前面には透彫、陰刻、平、凸等の分厚な金具が取り付けられ荒海の長航行に耐える様頑丈に製作せられていた。しかし内部にある抽斗、小箱、金庫の類は桐で造られていたものもあつた。船籠筒には重要証文、航海日誌、商売用の現金、手廻りの貴重品等が入られ、その形にも大小種々あつて片開き、両開き、けんどん、抽斗、引戸型などがあつた。就中片開きは幅一尺三、四寸、丈一尺四、五寸、奥行一尺五、六寸の小型ではあるが、最も頑丈に造られ船籠筒と云わんよりは寧ろ船金庫と呼ぶ方が適している程である。

表金具に定紋や屋号が入れられたものもあり、これ等らは特別注文品であつた。これに船頭が重要書類や貴重品を入れ幾重にも錠がかけられ、航海中は船頭の室に据え、上陸中は泊り付けの船問屋に預けた。民芸研究家の柳宗悦氏は船籠筒を日本工芸品の内特筆すべきものと絶讃された。佐上元北海

道長官は在任中その蒐集に努力され、その優秀なコレクションは現在駒場の日本民芸館に出陳せられている。船頭の威勢は大したものであつた。船問屋も船頭の機嫌を損ねぬ様一家総出で努めた。

陸上した荷物—アラコ(菓子の種類)、黒砂糖、酢、清酒(堺の千歳は上等)、次は大山酒越後酒の順であつた)、焼酎、素麺、白玉、中白、米、その他雑貨類が船問屋の土間に一様に積み上げられ、見本を市内の商店へ廻わして荷物の引き取り割当てを決めてしまう。これ等の品は市内で消費されたことは勿論であるが、近くの石狩、古平、浜益などからも川崎船がやつて来て運んでいった。

チクは事務長格、オモテは運転手格、オヤジは仕事の段取り若い衆の取締格で、これを三役と称した。船頭以外の者は泊りつけの宿(入船宿又はつけ船宿)に泊つた。北前の船員が船主から渡されたものは米、味噌、沢庵丈だけだったが、つけ船宿への宿賃として置いてゆくのもこの渡された米だつた。船宿と船員の間は至極親密だつた。この船宿で入船や出船の祝いだと云つて酒盛りが行なわれた。明治十四年の信香の大火後入舟町方面に小樽の中心が移り、従つて廻船問屋、つけ船宿なども有幌町、港町、堺町辺に多くなつていった。

帰り荷物は北海道産の身欠、数ノ子、鯉粕、昆布などの海産物が主であつた。二十日以後になるとダンダン海化になつてくるので、この頃までに大方は出帆してしまうのであつた。夜出帆する場合は多かつたが、コンタン町華かなりし頃、勝納、信香の浜には見送人が手に手は提灯を持つて群り海面を照らし来年までの別れを告げ航海の無事を祈つたのであつた。若い船夫達酒場女とのロマンチックな別れも多かつたことである。北前は数カ月間あちこちで商売して航海し、秋深く地元へ戻

つてくるのであるが、船頭(船主)から船員に対する給料とういものは定まつて居らず、秋に一航海の純益の幾分かが船員間に歩割で分配されるか、または米の如き枴目物、胴鯉の如き目方物を船員達に定められたキリダン分が給料として分配された。食費は一切親方(船主)持ちだつた。

雇われ船頭は村で最も信用ある人物でなければ頼まれなかつたが、その取り前はホマチと云つて親方が千石積んで商せよという船に千二百石積んで北前をする。その余分の儲けが自分の給料になつ

た。このホマチの金策は自分がやることは勿論であつた。チクも若干ホマチをやり、また船員が小遣に不足した場合金を貸すこともあつた。この場合利息は三割位が普通だつたといふことであるが、その代り海難があつたりすると取れなくなるので危険率も多かつた訳である。チク以外はホマチは余りやらなかつたといふ。

一本の檣に帆を張り風を頼りに海難の危険を冒し遠く瀬戸内海、北陸地方と本道との間日本海の荒波を航海し本道初期開拓時代に物資の交流に資し、本道開拓に一役をつとめた北前船の名は道民の記憶にとめられてよいと思う。

弁財は大抵五月頃入つてきた。それによつて村人は日用品、漁具船具の補給をするだけでなく海産物の売買をした。

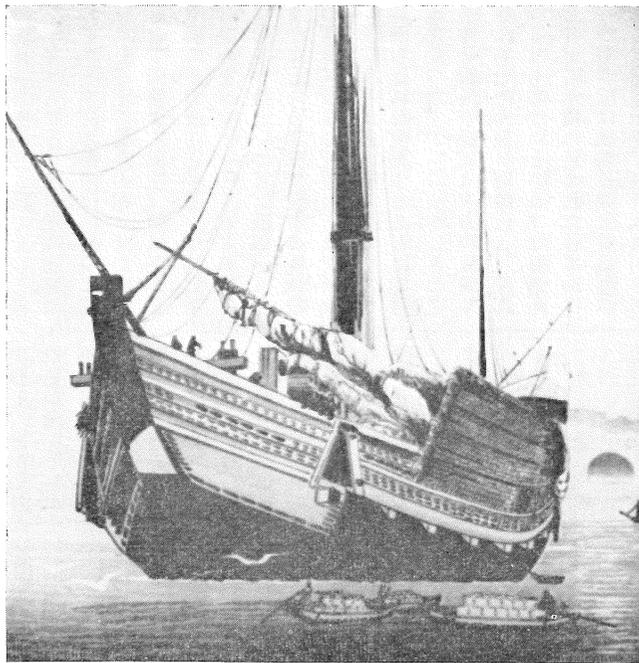
そして又、何よりも暮末、明治の村民にとつて、遠く離れてきた「ふるさと」を結ぶ唯一の「きずな」でもあつた。

人々はたゞ一枚の白帆を上げて進むこの弁財船をどれ程待ちわびたことだろう。

—弁財船の機能—はしがきから一、弁財船というもの

弁財船(べんざいせん)というのは、一般にあまり知られていないことばであるが、はじめこのことについて若干ふれておきたい。

即ち、弁財船というのは特別な構造をもつた船ではなく、春から秋にかけて大阪—瀬戸内海の各港—裏日本各港を経て松前に入り、



べんざいせん (I) 谷内 鴻

北海道各地との間を往復した和船（後には洋式帆船との折ちゆう型もできる）をいうのである。

瀬戸内地方ではこうした船を北前船（きたまえせん）と呼んでいる。弁財船が日本海をさかんに往復したいわゆる全盛期は、徳川中期頃から明治中期頃だといわれているが、北海道西海岸には明治末〜大正初期頃まで来航していたようである。北海道は蝦夷地と呼ばれていた時期から、移住者達は弁財船によって日用品を手に入れ、そして生産物を本州の市場へ送り込み、生活を支えていたのである。従って弁財船によって輸送された貨物の総量は膨大なものであった。弁財船はまた、よく千石船（せんごくぶね）などと呼ばれているが、これは千石積みということである。だがこのことは、しかし実際に千石の物資を積めるといふわけではなかった。例えば八五〇石でも千石船であった。弁財船はとにかく日本列島の日本海側を往復した買積船であるから、この船の船頭は、そうした買積の際の事務や、売る場合の事務などすべてを担当し、大きな責任―船の運航なども含めて―を背負っていた。

以上のことから、弁財船の経営者はとにかく一人で、数隻の船をもつていのが普通であったから、莫大な資本をもつ者でなければ到底経営は不可能であった。

蝦夷地―北海道へ移入したものは味噌、米、醤油、塩、酒、麴、茶、烟草、呉服太物（反物）綿、紙、蠟燭、石油（明治中期以後）金属器、漆器、ムシロ、ナワ、ロープ漁網などであった。これらの生活及び生産の必需品を積んだ船が入港するのを、開拓地の人々は「たから船」が入ってくるように待ちのぞんだことであろう。

厚田村古潭の古老によると、押琴湾は深いので弁財船がともづけし、子供達は喜んではしやぎ廻つたということである。又弁財船の船頭というのは大したえらい人のようにみえた。水夫達に船だんす、手箱等をつがせ、大名行列のように羽織袴をつけ正装した船頭を先頭に、赤ふんどしにぞうりの水夫達が一列になつて上陸し、船宿に入った。水夫達から海水で炊いたにぎり飯をもらつた子供達は、おまつりのようなはしやぎようであったという。

このように海岸線で船が着くのに条件のととのつていところは船尾をできるだけ陸に近づけて板を渡し直接上陸したが（ともづけ）条件の悪いところでは、橋舟を下ろすか、又は、陸の船宿から、伝馬船（てんません）を迎えに差向けるという方法で上陸したのである。こうして、弁財船は入港した日に、儀礼的に漁場の親方（経営者）或は問屋、船問屋に樽酒その他のみやげをとどける。そして、親方はその返礼として帳場（会計兼副経営者）を使って遠路の航海の苦勞をねぎらい、無事に入港したことを祝つて同じくつの樽をとどけさせる。四、五時間位たつてから親方、問屋は帳場等二三人を従えて船頭の宿へでかけ、そこで売買する品物、値段などをきめる。きまると船頭、親方は手のひらをポンポン叩く。これは「てをうつ」といつて、商談がましまつたという意味で、この後値段の変更、量目の変更などはできないし、又男が一旦約束したのであるからこれを変更することは絶対になかつた。

て、親方はその返礼として帳場（会計兼副経営者）を使って遠路の航海の苦勞をねぎらい、無事に入港したことを祝つて同じくつ

て、親方はその返礼として帳場（会計兼副経営者）を使って遠路の航海の苦勞をねぎらい、無事に入港したことを祝つて同じくつ

えていたようである。」
（丸 佐藤松太郎は、その財力で加賀江沼郡橋立村の寺谷家と共同出資し、弁財船長栄丸をもつて弁財船経営をした。その際船頭を雇つたが、これは西野兵助という人であった。西野家は代々優秀な船頭を出しながら橋立村で弁財船経営をしていた。次はこの西野家の文書である。

借用申候金子之事
一、金子七拾兩
右之金子槩に借用申所実正ニ御座候 何とぞ明年明後年ニ急度御返済可仕候
為其依而如件
橋立 西野兵助
安政四年
未壬十二月廿三日
丸屋半助殿
御虫拜借金子之事
一、金三拾兩者文字小判也
右之金子者当年造り船仕候ニ付御願申上候処無利足ニ御取替被下千万奈儘ニ借用仕候処実正ニ御座候
則来西年秋中無相違急度返済可仕候
為役日之借用証文如件
加州橋立 西野兵助
天明八年
申十二月
薩摩 八幡山御組中様

丸屋半助殿
後の例によると、天明八年に西野兵助は、新しく船を作つたがその支払代金を丸屋半助より借用したのである。牧野氏によれば「橋立の古い船主が、敦賀の商人丸屋半助に融資を乞うていることがわかる。

この外にも塩屋の西野長左衛門の百兩、橋立の田中伊兵衛の百九兩、小餅屋彦助、同治郎兵衛の四十五兩、越後屋の五十兩、小餅屋治三郎の二十五兩（十年年賦）寺屋源治郎の七十二兩等々おびただしい借用証文が認められる。

もちろんその多くは、造り船のような設備資金にあてられたようである。おそらく敦賀商人丸屋半助は加賀の北前船主のもたらす、鯨、鰯、鮭等を抵当に、近江商人の船頭から独立した勃興期の彼らに、援助を与えてくれたのであろう。

さらに、丸屋半助については、寛政八年（一七九六）の船道定法にも、次のような記述がある。

水主の取逃、欠落等の禁止の彼に、右此条々来買積並運賃積の船中殊の外不埒不如法之義有之候ニ付当年敦賀表参会之筋江州客方より彼地丸屋半助殿を以不吟味之義有之由及差図段々相調処候……

これによれば、丸屋は近江商人の

卯ニ申三辰午

航海碇泊控

長保丸 和吉

石川県加賀国江沼郡

橋立村字橋立

式百九十七番地

寺谷源七

石川県加賀国江沼塩屋村

岩田七松

小林利兵衛様

余白

× × × × × ×

小林利兵衛は、瀬戸内海の尾道

港の船問屋経営者であり、寺谷家

持船、長永丸の重要な取引先でも

あった。しかし一般的に廻船と取

引する問屋は固定していたし、又

船宿とも固定した関係から、船主、

そして船問屋と、船宿とが結びつ

いていくことは当然であったと云

に買入れる必要もあつたらうし、
(価格、品質の面に於て又、船腹
が増加することによる競争も惹起
していつたのである。こうした競
争の中でなおかつ有利な取引きを
するための、手段があらゆる面で
こうじられていた。鯨漁場に於て
は、漁場経営のために必要な仕込
資本は膨大なものであり、当然そ
うした面に、弁財経営者の手は伸
ばされていつたわけである。

次に、弁財船経営の面で注目し
なければならぬのは「ぶもち」
歩持」という形態である。
弁財経営の場合、船を所有して
いる者が自ら乗船し商品を買積し
ていく方式が古くか行なわれてい
たものである。「廻船に商品を買
積して、所どころに航行して交易
を行う船持を古くからの呼称であ
る擧取に代えて、南北朝ごろから
船頭と呼ぶようになった。

数の出資者が必要になる場合もあ
つた。これが「ぶもち」である。
出資率によつて三步、半方持など
といわれる。
例えば前掲長栄丸差引勘定帳
(明治廿七年)には次の記録があ
る。

- 船玉買入 大高
- 金 壹金百七拾四圓拾九銭
- 右四ツ割
- 金 貳百九拾參圓五拾四銭八厘
- 四ツ割正味徳用
- 金 壹百拾九圓四拾八銭六厘

その意味を含まないのは「ぶもち」
歩持」という形態である。
弁財経営の場合、船を所有して
いる者が自ら乗船し商品を買積し
ていく方式が古くか行なわれてい
たものである。「廻船に商品を買
積して、所どころに航行して交易
を行う船持を古くからの呼称であ
る擧取に代えて、南北朝ごろから
船頭と呼ぶようになった。

このことから明らかのように、丸
長栄丸を運航して壹金百七拾四圓
拾九銭の利益を上げ、更に諸経費
を差引いた分の四分の一の金額を
寺谷家で、純益として、壹百拾九圓
四拾八銭六厘を得たわけである。
寺谷家では少くとも明治二十三
年から明治二十五年の間に父子で
弁財経営をし、直乗りをしなが
ら、沖船頭も雇い、五艘の船を運
航していたのであるが、明治二十
三年十月十二日息子の寺谷和吉が
死亡、更に同二十五年五月十四日、
父の源七が相ついで死亡した。

その意味を含まないのは「ぶもち」
歩持」という形態である。
弁財経営の場合、船を所有して
いる者が自ら乗船し商品を買積し
ていく方式が古くか行なわれてい
たものである。「廻船に商品を買
積して、所どころに航行して交易
を行う船持を古くからの呼称であ
る擧取に代えて、南北朝ごろから
船頭と呼ぶようになった。

所謂、「男手」がなくなつたと
いう事情があり、北海道厚田村で
かねてからの得意先であつた丸
佐藤松太郎と共同出資で弁財経営
に着手したのである。
従つて船名は丸佐藤持船、長

柴丸であり沖船頭は、西野兵助であつた。前掲史料はこの西野兵助が、寺谷家に提出した「差引勘定帳」である。
更に次のような例もみとめられる。

明治十三年 橋立丸半方持

一、四千四百六拾九円六拾三銭三厘

才一番酒田上下

才式番馬関上下

青森与小樽

酒田与小樽

増毛与酒田

酒田与小樽

利息の高

右の内

千三百廿三円八銭六厘

船諸入費の高

式百〇三円三十銭

石狩にて難船入費

六拾七円三十七銭五厘

マンケ角施秀蔵へ

鯨達約金償金

百円 船長へ手当

三十壹円 船諸給料

差引式千七百四十八円

八十九銭式厘

内 式ツ割

千三百七拾式円四十四銭

六厘

明治十三年橋立内田左衛門

歩持

一、三千九百拾六円八十銭七厘
諸方航海利益の高

一、千八百七十五円五十六銭八厘

本船諸入費

一、五拾円 船長手当金

一、八円〇五銭 仙台与下り石灰

式百俵損

〆千九百三十三円五十一銭八厘

差引金千九百八十三円式十八銭

式ツ割 九厘利

金九百九拾壹円六十四銭

四厘五毛

こうした、「ぶもち」に依る弁財経営は、史料が不充ちであつてもそれはもはや、技術的に荒波を航海する船頭の行つて来た「航海技術者の商内」でないことは明らかである。

商業資本家が投資をし、それに依つて収益を上げ、船乗り達には雇用者としての賃金を支払う、という形態である。

近代商業資本形成過程の一面をここに見出すのである。

右の例で寺谷家とへ丸長柴丸の「ぶもち」の場合は「男手の不足」に依る事情が、そうした形態の投資を生み出したのであるが、後の二例は、そうした事情があつたかどうか明らかではない。

しかし、弁財経営の発達過程で、こうした「ぶもち」制度が発達す

る積極的な理由があつたのであるうか。

瀬戸内海の大坂港木津川口―瀬戸内海―赤馬関―日本海岸―北海道西海岸を往復する弁財船には絶えず遭難の危険が伴う。

遭難は買積船の場合、中小弁財船主の資本そのものをゆさぶる程度のものであつた。普通の運航の場合では凡そ左のような海損が常に見込まれ、経営者、乗組員荷主の中で認められていたのである。

鼠喰は、鼠害であるが、船中の積荷が被害をうけた場合、その被害額に無関係に、荷主と船頭が二人で負担する即ち共同海損とす

る。又船が遭難したために、船体を軽くする必要があれば、荷物をなげる「打荷」この場合は最寄の港の浦役人に届け、浦証文を入手すると共同海損になるが、ない場合は船員が、その荷物分を補償する。大体積荷については、船頭と荷主の補償であつたが、難船したときは、船主は大きな打撃を受けたのは勿論である。元来弁財船には自ら資本金をもつて船を運航し、買積みし、それを問屋に渡すという性格のものであつたから、運賃積の船に比較してその経営に依る収益は比較にならぬ程大きかつた。

しかし半面、一旦海難にあつた場合の被害は又比較にならぬ程大きかつたのである。普通の経営者

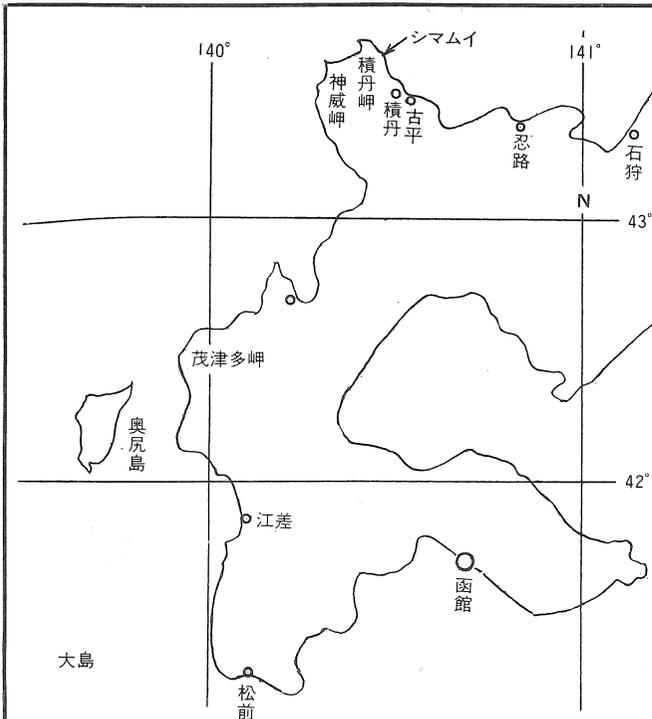
はこうした危険を絶えず警戒していたのであるう。このことから「船玉様」の信仰が大きな比重を占めることになるのである。
次に少し長くなるが、弁財船が日本海を北上し帰つて来る迄の道程を物語る「航海碇泊控」(明治廿三年、長保丸和吉)を掲げておこう。

明(明治)二(中)三辰年
航海碇泊控
長保丸 和吉

明治廿三年辰三月改メ
大阪府三月廿一日手仕舞イタン同後三時ニ船乗イタン木津川(8)三月廿二日出帆仕廿三日小豆嶋東沖ニ碇泊イタン同所廿五日午後五時ニ碇巻揚航海イタン三月廿七日栗嶋港入港仕同港四月二日出帆イタン同二日午後三時ニ糸崎港入港イタン同港四月四日午後六時ニ出帆イタン田ノ浦、四月七日午後二時ニ入港仕同港四時ニ出帆イタン同四時四十五分ニ下ノ関港江入港仕候
同港九日午後三時ニ出帆イタン同四時ニ小福浦入港仕同港四月十九日昼十二時ニ出帆イタン後八時ニツノシマカハリ廿日朝四時ニ雲嶋カハリ隠岐国七八里斗リニテ雨併テ子風ニ吹櫓落船廿二日サギ港入港仕同港廿三日午前七時ニ嵐風ニテ出帆イタン午前八時ヨリ申



「明治23年 航海碇泊控
長保丸和吉」中にみられる
シマゴエという地名は現在はない
シマムイのことだろう。(本文注参照)



風ニ吹 午後二時ニ関ハナ無雨併
テ同風吹四時頃ヨリ西風ニ吹後二
時ニ種ケ崎発廿四日昼十二時ニ敦
賀港江入港仕候

当港五月十七日後二時ニ出帆イタ
ニ吹風ニテ航海イタシ
シ十九日午後三時ニ堀切沖ニ碇泊
イタシ同所廿日午前四時ニ碇巻揚
テ航海イタシ同所午後五時ニ出帆
浦ニ碇泊致シ同所午後五時ニ出帆
イタシ高風ニテ後十二時頃ヨリ平
風ニ順廿一日風同所十二時ヨリ雨
併テ廿二日朝雨晴テ申風ニ吹廿三
日風同所後十二時ニ大船発廿四日
朝六時ニ奥尻発廿五日朝三時ニ三
十粉ヲカモイカハリ午後三時ニ忍

路港入港仕候
後志国忍路港八月五日午後八時
ニ沖出シイタシ八月五日午前九時
三十粉ニ碇巻揚風石狩物ニテ航海
イタシ午後六時三十粉ニシマゴ
エナラビ同六時五十五粉ニシマゴ
エニ碇泊イタシ九日十一時四拾粉
ニ同所碇巻揚航海イタシ風嵐風
ニテ午後四時三十粉ニ積古丹沖ナ
ラビ風不定四方江マケリ

十日朝ヲカモエ上沖七八里斗り
沖ニマケリ風同所十一日朝七時ニ
積丹ダイキシ沖ニ碇泊イタシ同十
二時五粉ニ同所碇巻揚風中西物ニ
テ航海イタシ午後三時ニシコマイ

前ニ記載之処ヨリ二拾丁斗り下ニ
碇泊イタシ直ニ雨晴十二日風同所
十三日同所十四日午前九時四拾粉
ニ碇巻揚四時斗りモ航海イタシ
ニ風ヲモハシナクヤモイズ同所
ニ碇泊イタシ十五日風同所十六日
風同所同所十七日午前八時五十五
粉ニ揚巻航海イタシ積丹沖ニ碇泊
イタシ十八日朝雨晴同所十二時同所
碇巻揚航海イタシ風卯辰物ニ
順同午後六時ニ同所戻リ碇泊タシ
十九日風下り物午後七時三十粉ニ
同所碇巻揚風嵐ニテ航海イタシ
廿日朝風寅物ニ吹廿一日朝モツ
タ沖嵐風辰巳風ニ吹廿二日朝中
風景ニテ同所沖ニ居同午後十一
時ヨリ雨併テ申西物ニ吹ク吹無
掬戻リ美国上沖ニ碇泊イタシ廿
三日午後九時ニ日風高西吹廿四
日風同所廿五日午前八時ニ同所
碇巻揚直線航海イタシ風嵐ニテ
午後一時ヨリ寅風ニ吹同三時五
十粉ニヲカモイナラビ八時ヨリ
雨附テ卯風吹風馳ク夜十一時ヨ
リ辰風夜一時迄吹二時ヨリ寅風
ニ吹馳ク大波帆案じ持廿六日大
風大波同午前七時ヨリ帆フタマ
エニ持午前九時ヨリ風ニ吹廿
七日朝大嶋ナラビ風和カニナリ
帆アタリマエニモチ午前十一時
ヨ(リ)風寅物吹廿八日風丑寅
物ニ吹廿九日寅ノ物ニ吹三十日

寅ノ物ニ吹午前十一時ニヒクラ沖
並午後三時ニ七ツ島老里沖ニ並午
後九時ヨリ雨併テ辰巳物ニ吹三十
一日風雨同所午後八時二雨晴丑
ニ吹九月一日朝越前ラシマ沖並
更ヨリ風和同十時ニ常ニ碇泊イ
シ二日午前十時ニ同所碇巻揚直線
航海イタシ同午後一時ニ越前敦賀
港入港仕同港九月十四日午後七時
船乗イタシ十五日午前五時同港出
港イタシ風ツルカモノニテ田ノ浦
沖ニ碇泊十六日午前一時ヨリ雨附
テ同四時三十粉ニ大風西ニカハ尊
同六時ニナギ直線雨晴十七日碇
泊十八日同所午前七時五十粉ニ碇
巻揚航海イタシ同所午後五時三
十粉ニ戻リ直線碇泊イタシ十九日
風同廿日同風廿一日午前六時三十
粉ニ碇巻揚直線航海イタシ風高
形廿二日同風廿三日午前六時ニ
雨附テ入風吹ニ同所戻リ三十日午
前二時同所風嵐ニテ出帆イタシ十
月一日巳午風ニ吹午後七時ヨリ雨
附テ卯辰風吹二日午前七時二雨晴
テ寅風ニ吹三日午前四時三十粉ニ
雨風同所午後二時ヨリ大波同九時
ナギ風寅風ニ吹四日同所同午後一
時ニ見嶋ナラビ五日午前一時ヨリ
西風成アチキトマケリ
五日午後四時ニ萩十丁計リ沖ニ碇
泊タシ六日午前七時ニ同所出帆イ

タシ午後一時ニ同所一里計リ沖ニ
碇泊イタシ同所午後九時ニ碇巻揚
航海イタシ風ア里船八日朝角ノ島
カハリ同午後五時ニ小福浦浦ニ碇
泊イタシ九日朝潮二下ノ関港入港
イタシ十三日朝汐ニ出港イタシ午
前十時ニ田ノ浦ニ碇泊イタシ同所
十八日午後十一時ニ出帆イタシ

右の「航海碇泊控」は、明治廿
三年三月二十一日大阪木津川を出
帆し、同九月十八日瀬戸内海の田
ノ浦港を出帆したところまでの部
分が記載されている。この史料は
「控」であるから航海日誌とは異
り詳細な点については不明な箇所
が多い。

しかし、この「控」から我々は日
本海の往復には、想像以上の危険
が伴うことを知るのである。特に
帰路忍路港を出てから「八月日五
午後八時」大嶋に達するまで(八
月二十七日)実に二十二日間海上
を行きつもどりの難航を続けて
いる。往路に於ては、この間を凡
そ二日で航行している距離であ
る。(大嶋五月二十三日十二時
— 忍路港入港五月二十五日午後三
時)

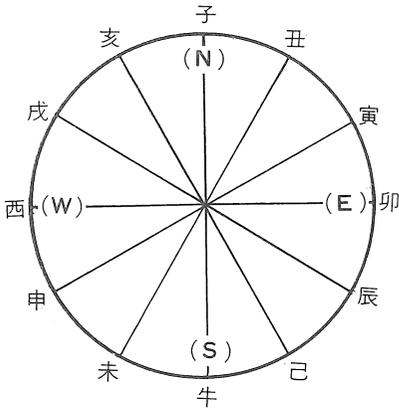
北海道西海岸は、春から夏にか
けては比較的波が静かであり、航
海しやすい時期とされている。し
かし帆船では風向が何よりも一
番重要であつて、風向如何で船の行

動は右の「控」のような事態にそ
う遇するわけである。
通常おそくて三週間程度の航海
で北海道の目的地に到着すること
ができる程度の航路であつても、
しかし自然条件を変えることはで
きず、万一の場合は、経営者は大
損害をうけ、沖船頭以下水主達は
その生命をかけることになつたわ
けである。(以下本紙26才号所収
の予定である)

註

1. 牧野隆信著「北前船」
昭40、23P—24P
2. 寺谷家文書、石川県加賀市橋
立町、寺谷文二家所蔵、主と
して明治以後の弁財船関係史
料が多い。
3. 金指正三、日本海慣習史
昭42、
4. 拙稿 北海道西海岸に於ける
鯨漁場(II) 昭41、49P—52P
5. 牧野隆信氏の御教示による。
6. 前掲寺谷家文書

註7の説明図



本文中に「申酉もの」などと
あるとき「もの」は風の方向を
示している。以下読むために便
利なように方位を示しておく。
8. 木津川、大阪の。船にはフナ
クイムンがつく。この虫の寿命
は約六ヶ月でありこの間に雄に
なつたり雌になつたりする。ま
た数千万という産卵をする。冬
期一〇度以下になると冬眠状態
に入り翌年四月ごろ再び活動を
開始して、しばらくすると変態
した産卵する。又日本産の木
材は喰われやすく、三か月〜六
か月位で蜂の巣のように穴をあ
けられる。このフナクイムンを
退治するのに、普通は船を陸に
上げて、底をかややしびで燻焼
しこれを「たでる」という。又
河水が入る港又は河の中に船
をつなぐ方法もあつた。これは
海水の塩分の比重が普通千分の
二五であるが、この虫は千分の
二・八以下になる
と死滅するからであ
る。大阪の安治川や
木津川が特にフナク
イムンを駆除する効
があるとき、船囲
に利用されたのはこ
の理由からである。
弁財船の航海は季節
は春の彼岸から秋の
彼岸までとされ、冬
はこの両河につない

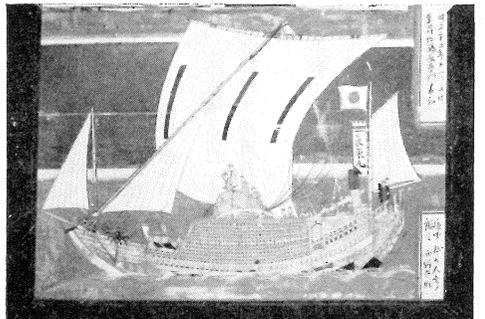
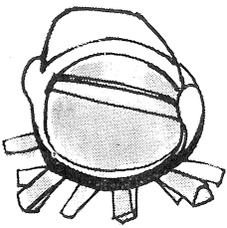
7. 本文中に「申酉もの」などと
あるとき「もの」は風の方向を
示している。以下読むために便
利なように方位を示しておく。

でおくのが普通であつた。更に
この木津川には、大阪府入津料
取立所があり入港税を徴集して
いた。
9. ツノシマ角島 (山口県)
10. 隠岐国 島根県隠岐
11. 船岐 ふなあし
12. 橋立の船は「下り」のとき大
阪を出てから買積みをつづけ橋
立浦に必ず碇泊した。これを親
方前といつて、半日の間沖がか
りして橋舟で上陸し、親方に出
発のあいさつをし、家族と別れ
た。明治以前では、こゝから更
に日本沿岸の各港に寄港したよ
うであるが、明治以後の史料で
は殆んどこゝから北海道へ直航
している。普通一週間〜十日位
で大体目的地に到着したようで
あるが、風向きによつては三週
間位を要したこともあつた。寿
都、忍路、小樽などについて、
問屋と商内についての連絡をと
り取引をするが、鯨漁場製品
は大体六月十五日頃にならなけ
ればでき上らないので、待つこ
とになつた。この時間を利用し
て更に奥地へ入り商内をする場
合もあつた。(利尻、礼文など)
12. 奥尻島「菅江真澄遊覧記2」
145P
には次のようにも書かれて
いる。
寛政元年の記録である。「島の
めぐりは二里あまりである。島
のかげには仮り住まいの家がと

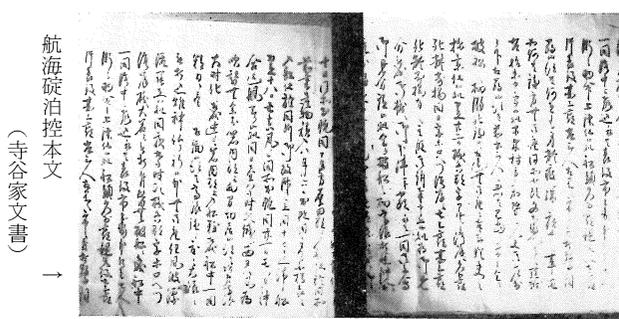
ころどころにあり、沖を行く船
がしげにあつたときなど、この
島に避難する用意に、米、鍋、
火打箱までおさめておいてあ
る。強風で漂流したり、潮風に
ながされたものが、この島に船
をよせ、いかりをおろし、よい
日和を待つ間、命をつないでい
くが、もし米を積んでいる船な
らばもとのように米を貯蔵して
おいて去るといふ。(東洋文庫
68)

13. 本文写真版、地図参照、シマ
ゴエはシマムイの変化した呼び
名か、誤り聞いたものであろう。
この原文の毛筆による挿図から
推定すると、現在の積丹半島の
幌武意と入舸との間にあつた地
名で今日ではそのようによばれ
ていない。現積丹町。音は多分
次のような変化をしたのだら
う。
Shuma-nu) Shima-noi)
Shima-moe) Shima-goe

14. 積丹ダイキシ ダイキシとい
うところはない。ライキシ(来
岸)であらう。
(以下特集べんさいせんIIにつ
づく)



丸 長栄丸絵馬
石川県大聖寺橋立の
出水神社にある。



航海碇泊控本文
(寺谷家文書)

舟財船

No. 26

昭和46年4月10日
発行 史料室
編集 厚田村史編
印刷 中西印刷

聚富の団体部落の経歴と沿革

藤村久和

序にかえて

ここに紹介する一文は、当村聚富における団体入植の顛末に関する聴書である。阿部氏は昭和38年5月病のため故人となった。彼の晩年、開墾に一生を捧げた古老が次々と没するのを目のあたりにみ、また、後継者が二代目・三代目に変わりつつある現情をみて、入植当時の状況が失われることを憂い、これを記録にとどめようと決意した。そして、当時の状況の一字一句暗記していた笠井銀太郎老人を訪ね、それを文章化したものである。阿部氏は昭和30年頃より構想を練り、計画は老大なものであった。すなわち、個々の部落より資料を聴集し、各部落から聚富全体の歴史を編纂する予定で広く協力を求めていたという。彼は病床につくまで書きものを続けていたそうだが、これ以外に阿部氏の記録は見つかっておらず、多分、この一文がその計画の第一歩ではなかったかと思われる。聴書はB5版のノートを使い、余白5枚に「当時の居住民名簿・水田反別・

畑耕作地」等が記載されている。なお、昭和40年発行の厚田村郷土読本（中学校編）の第四章に、この聴書の一部を載せて学習の教材に供していることを附記しておく。

団体部落の経歴と沿革

阿部 実

当部落の開祖は明治27年、淡路島の兵庫県団体に依り始まる。兵庫県団体凡そ20数戸を一団とするもので、团长江本勘吉・友成〇〇にて引卒。英艦ポイント右に乗船、北海道に渡道。石狩河口右岸の地今の中央部落の阿部勝正氏所有の地に当る所に畝を降したるが初元なり、開拓の第一号をふみ出し、専念開墾に従いたるも耕土浅薄に



阿部 実氏 故

して、尚、砂土なるため農地として適せずにより、もう一步奥地に踏入りて現在の地、団体の開拓を志し、雲つくと大樹林立して昼猶暗き深山にて、山沢谷峽の識別も不可なる原始の新天地の掘下げを受け、若き農魂の壮丁は夏季は蚊・アブ・ブヨ等の害虫とたたかい、熊笹茂る荒地を耕し、冬は袖夫となりてひたすら寒気と深雪を冒して大樹を伐採し、用材・薪材・其他を伐出して生計を立てたれ共、気候は内地と異り不順なる天候も幾度も続きて畑作物の収穫は全く冷細にて、生活の先途を見切者相次ぎ、団員の大半は年次に四散して長沼方面その他へ移住して残る者は僅に三名を残すのみ。踏み止りて農事に活躍する者に島田恒蔵・江本源太郎・阿部岩吉を残すのみと成りたるも、三氏よく未開の地の礎石たらん事を決意表示して、笹小屋に起居して、粗衣をまとい、粟・麦・豆を常食として、あるいは猛獣熊の恐威におびやかされ、あるいは病魔に見舞われたるも屈せず、同時に尾張団体の一部・阿波・庄内・淡路より若者年次入地し来り、辛苦を共にして切開きたるに依り、村内はようやく活気付き発展の彰光を見出した。然して、茲において出生地の三原郡北阿万村の亀岡八幡宮より御鏡をお迎へして今の長江八百吉氏の畑地へ神殿を設け鎮座なし、毎秋祭事を行い、余興としては直線コースの馬場を開き、競馬及び素人芝居・花火・その他を催して娯楽の道を講ずると共に、子弟の

教育も考へる様になりたり。はじめ本通りの永井八平氏の出口に当る所に寺小屋らしき小学校を開設、文化に主力をおきたるも、村内は年次村戸の拡張を来したるため、村内の中央部に移転するよう村民の要望に応へ、公職者との意見統合して、大正6年の秋、現在の地へ移転なし、中学校も増築して所屬するに至る。これと併行して、農村運営の機関となる農業信用購買販売組合も大正7年4月、石狩町来札に創設、米・麦・雑穀・その他肥料・資材の集散、金融の便宜等を与へたり。また、村道も国道に昇格、整備

厚田村の地名調べ (11)

望来・嶺泊地区について

厚田村の地名調らべは前回（舟財船8・9・10号）聚富を取扱ったが今回は望来、嶺泊地区について紹介したい。

◎正利冠川沿い
①まさりかっぱ
「北海道蝦夷語地名解」以下①とする）に「モライ川筋、マサラカオフブ」とあって、まさるーかおまーぶ（MASAR-KA-ONMA-P）まさるーの上をー通っているーもので正利冠川を意味する。まさるは海岸の波打ちぎわに寄った砂丘より山手につながって草などが生え、海岸より一段小高くなっている場所に対する言葉である。この正利冠川の流域は望来川よりも一段と高く、その差の境は

され、厚田市街を終点とする中央バスも運行するなど交通も暫く整いたり。

これに従い、河川治水・農道等の変更、あるいは改修され、諸車の運転スピードを出し得る道路と成りぬ。

ようやく、田畑・酪農の多角経営部落となり、昭和20年、灌漑用として電力を入れたるを機会に各戸に点灯、動力を農事に利用、更に延長して村内全戸に及ぶ。先途に洋々の明るい村落に成り現在に至る。

昭和32年1月
阿部実、笠井老人より聴聞したるまま記入。

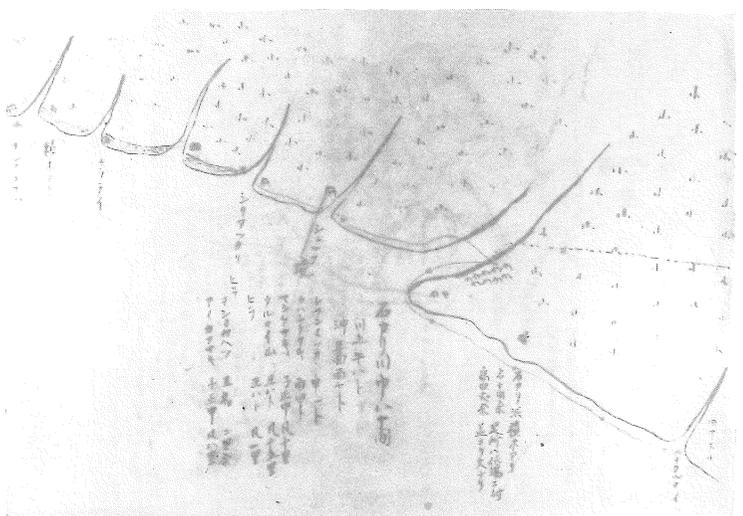
望来中学校グラウンド付近で、そこから正利冠の沢口を見ればはつきりしている。だから正利冠川は①の「モライ川筋云々」ではなく別の川であると訂正したい。

②しのずかのさわ
川口から見て右手のはじめの沢をい、沢口に篠塚さんの家があるからである。

③むえんのかさか（かわうちのかさか）
無煙（無縁）の坂は旧道の一部からムエンの浜に下りる坂をい、この坂下に川内さんの家があった（昭和36年まで）のでこの名がついた。

④きょうわ
共和は川口附近の地区名である

⑤いずみのさわ



近藤重蔵等「西蝦夷地分間」より複写
 左より2ツ目に「積木アリ」と記してある。(うえんしり)
 右より3ツ目に「石カリ浜積木アリ、高四丈余」(ふんべごえ)

沢に泉さんの家があるからである。弁財船№4の「望来の大熊のはなし」に出てくる泉の沢がこの沢である。

⑥こうせい
 更生は共和より上にある実行組合の名である。

⑦きょうれい
 共励は更生より上にある実行組合の名である。

⑧こざわ (おんせんのさわ)
 小沢はこれより奥へつながっている沢の名で大沢に対して付けられた名である。別名温泉の沢ともいい、バス停にある日景温泉はこ

の沢にある。湯元は白井さんの家で戦前(昭和15・16年ごろ)よく繁昌し附近の人達によく訪れた。その頃は女中さんが二人もいたという。

⑨おおさわ
 正利冠川の本流の流れ出る沢を大沢という。

⑩えちござわ
 越後沢は正利冠の左手にある大きな沢をいい、実行組合にもなっているが、本当の越後沢はこの沢の右手にある沢だそうである。その名のように最初に入植した人たちが越後の人(新潟県の人

ヤナダ・サトウなど、三軒)だったからだという。

⑪じろうのさわ
 次郎の沢と書くのであるが、越後沢の口の右手にちよつとしたへっこみがありそこを言うのだそう。弁財船№4の「望来の大熊のはなし」に出てくるアイヌのジロ日本名では次郎が住んでいたからである。

⑫ちだのさわ
 千田の沢は越後沢の右手で千田さんの水田があるからである。

⑬ちゆうおう
 中央は実行組合名で正利冠の沢の中間より少し下手にある地区で入植当時はここから奥には人家もなく、このあたりが一番人気もあり中央でもあったからだという。

⑭みなみ
 南は中央から奥の実行組合名で中央部落より南にあるからである

⑮いみんのとち
 移民(異民)の土地とはもとの正利冠小学校あたりから上の方一带をいう(一部は加賀の沢附近まで広がっている)。移民とは樺太アイヌのことで、樺太から本道に移住した人達が払い下げを受けたもので面積は一定している。それは地図上だけで、ある人は崖を、ある人は川をといった工合であった。その後入植した人達はその小作となって開墾した。毎年定期的に樺太から地主の代表がやってきて地代金をとり立てた。その地代金のとり立てがあまりきびしかったのでむしろ旗を立てて値下げ運動をしたこともあるが、戦後の農

地開放でようやく自分たちの土地になった。

⑯ふたまた
 二股はもとの正利冠小学校の上手で、沢が二つにわかれている所の名で、右の沢を二股右、左の沢を二股左という。

⑰ほうがっこうのやま
 法学校(?)の山は二股の右手につながる高台をいう。法学校については地名調べ(1)の34を読んでいただきたい。

⑱とうしん
 東進は二股右の沢一帯の実行組合名で、この地区を通りぬけると春別(俊別)に出る。

⑲ひがし
 東は二股左の沢一帯の実行組合名である。

⑳かずかわのさわ
 二股左の沢をのぼりつめた所にまた枝沢がある。その右沢を数川の沢という。そこに数川さんが住んでいたからである。

㉑まつざわのさわ
 松沢の沢は数川の沢の左手にある沢で、そこに松沢さんが住んでいるからである。

㉒望来川沿い
 ㉓もうらい
 ①にはモライ、西蝦夷日誌(松浦武四郎著以下②とする)にはモウライまたはムライ。同氏の再航蝦夷日誌にムムライとある。もーらいーべつ(MO-RAY-PET)静總で「死んでいる(ような川)の下部が省略されて地名になったようである。事実この川の流ればほとんどない。アイヌの感覚では川

も人間と同じように生きていると考えている。夏に水量が低下すれば夏やせにかかっているかと思われ、流れが遅ければ寝りについたと考える。ねることをもこる(MO-KOR)＝安静を「持つ」という。この安静もがもうらいのもであり、もうらいの地名も川名もここから出たものである。

㉔かわむかい
 川向いとは望来川をはさんで対岸のことで、川向いに行くなどと使われている地域は川口の人家の集まっている範囲に限られている。

㉕しんこう
 新興は望来川口附近の実行組合名である。

㉖きょうりつ
 共立は新興より上手の実行組合名である。

㉗だいち
 第一は共立より上手の実行組合名である。

㉘にし
 西は中央実行組合より西にあるのでこの名をつけた。

㉙ちゆうおう
 中央は望来の中央という意味で望来一番地もこの地域にあり、最も古い入植地域になっている。入植時期は明治の初め頃で、南部が津軽の人達5・6戸だった。そして明治三十年代には水田を作り米をとっていたということである。この最初の入植者5・6戸は土族で明治元年戊辰の役(1868)で戦功があり、明治天皇より金何円だかをいただいていたの地に入植したという。倉山亘(倉山和多理)、



「おきたのうら」附近から桂の沢方面をのぞむ
左手前の沢が「まきばのさわ」、右側には「かがのさわ」も見える

五千嵐〇〇という人もいたとい
う。最近、倉山豆の入植当時の日
記のあることがわかった。

こんな経緯で地名を付ける頃、
望来の中心地であったからである

本沢は望来の西地区ぐらいまで
の沢全体につけられた名である。

②ほんさわ

古川はかつて望来川の一部であ
ったがある年大洪水のために川の
流れが変わり残されてしまったと
いう。今では水蓮や菱の花影を水
面に写しているだけである。

③ふるかわ

望来の西地区ぐらいまで
の沢全体につけられた名である。

④きゆうけのはし

望来の西地区ぐらいまで
の沢全体につけられた名である。

旧家の橋とはここにかかる橋の
名で、明治三十年代この附近一帯
の名称として使われていた。旧家
とは先にのべたう、6戸の入植者
をさしている。

⑤おきたのうら

沖田の裏はバス停留所「望来大
橋」に沖田さんの家があり、この
家の裏山から墓地附近をふくめて
この名がある。

⑥まきばのさわ

牧場の沢は望来川で一番はじめ
に出あう左手にある沢の名であ
る。この沢の上に牧場があったか
らだという。この牧場は日清戦争
後、当別の千葉さんが払い下げを
うけ牧場を経営することになった
が、広大な草地に棚を立てるのが
大変だったので土を高く盛って棚
の代用としたが五年の期間中には
成功できなかつた。千葉さんが引
き揚げたあと望来村共有の牧場
となったとのことである。

⑦かがのさわ (かがざわ)

加賀の沢は望来大橋の上の右手
にある沢の名であるが加賀の人達
が入植したと記憶する人はいない。
加賀の人達は桂の沢に入植し
たという。そして加賀の沢には明
治28年伊予の人達14、15戸入植し
その人達の名は菊池・河野・影内・
古櫛・永井・坂口・古持などであ
るといふ。

⑧さつぼろやま

札幌山とは加賀の沢の上手の高
台一帯をいう。札幌にいた照井竹
次郎という人がこの辺の土地約二
千坪を持っていたからだとい
い、実行組合名になったこともあ

った。

⑨るくしな

①にルクシュナイという地名が
ある。るくしなない (RUKUSU
-ANYS) 道の一通っている一沢
という意味である。どこかにぬけ
る沢のことである。現在この名は
ない。十勝日誌 (安政5年1888・
松浦武四郎筆) に「是より(石狩)
トック (徳富) の間、冬分はモウ
ライ川筋より上り、アソイワの西
南を越、トウベツの上を渡り、カ
バトの南の麓を出て、ウランナイ
(浦臼) に出る。」と記してある。
モウライ川筋からアソイワの西南
にぬける沢がるくしなないである。

この話を桂の沢の人達に聞かす
と「それなら加賀の沢から札幌山
にぬけ、山のつねずたいに弁華別
にぬけられ、そこから下れば当別
にぬけられる。」という。地図を開
いてみると正しくそのとおりで、
アソイワの西南を曲って、この
道は火防線がつくられていて、
いつも下草が刈られていて歩き易
くなっている。ルクシュナイは加賀
の沢の古い名であることがわかっ
た。

⑩ふもとのさわ

麓の沢は入口に麓十三郎氏が住
んでいたのである。

⑪きようしん

共進は加賀の沢より上の実行組
合名であったが今は別の名に変わ
った。

⑫あさひ

旭は札幌山と共進が人口減少の
ために合併して付けられた名であ
る。

⑬かつらのさわ

桂の沢は麓の沢より上右手の沢
の名で、実行組合名でもある。こ
こはその名の通り桂の木が多く、
良材を出していた。また桂の木も
沢山あった。昭和42年8月3日に
熊が出たといつて大さわぎしたこ
ともあった。

⑭しもかつらざわ

下桂沢は古い土地台帳にみられ
るが今は使用されていない。桂の
沢の下にある沢とすれば加賀の沢
全体か、あるいは同沢の上の沢を
いうのかはっきりしない。とにか
く加賀の沢に含まれる地名である

⑮ざつこざわ

札子沢は桂の沢の上右手の沢で
雑魚 (うぐい・やまべ) が春にな
ると湧いたように沢に満ちるので
この名が付いた。

⑯ぼんたきのさわ

ボン滝の沢は札子沢の上右手の
沢の名で入口に高さ10層ほどの細
い滝があり、滝の沢の小さいもの
というこでボン滝の沢とつけた

⑰たきのさわ

滝の沢はボン滝の沢の上右手に
ある沢の名で、この沢には高さ60
層ほどの滝がある。水源は瓢箪形
をしていて、その尻が滝口になっ
ている。秋の紅葉の景色はちよ
うと養老の滝のようだという。

⑱つみのさわ

堤の沢は滝の沢の上左手の沢で
入口に堤が築かれてあったからで
ある。現在でもその一部は残って
いる。むかし周辺の山から伐り出
した木材をここに集め、堤を築い
て水を溜め、雪どけ時期の満水を

利用してせきをはずし、一時に大
量の木材を下流に運送したもので
あると。

⑲やぎのさわ

矢木の沢は滝の沢の上右手にあ
る沢の名で、矢木とは木材を伐倒
する際、木挽鋸がしぶくならない
ために打ち込むくさびのこと、
この沢に入ってそれを作ったもの
だといふ。

⑳かわおく

川奥は桂の沢より上流地区全体
の実行組合名である。

㉑なんぶのさわ

南部の沢は矢木の沢の上右手の
沢の名で、この沢からも木材が多
く搬出された。木挽の多くは雇
いで、出身地は南部の人が多か
ったといふ。

㉒ばんのさわ

盤の沢は南部の沢より更に上の
沢で、入口の川底に岩盤がありそ
の上を水が走っている。

㉓かまのさわ

窯の沢は盤の沢より上左手の沢
名で、古潭の伊藤久市さんがこ
こで木炭を作っていた。その木炭窯
があるからこの名がついた。

㉔みなとのさわ

湊の沢は窯の沢の上右手の沢名
で、湊という人が住んでいたから
だといふ。

㉕しものさわ

湊の沢より上に大きな沢が三つ
ある。その中の一番下にあるから
下の沢という。

㉖なかのさわ

中の沢は下の沢の上手にある。

㉗かみのさわ

中の沢は下の沢の上手にある。

のは30疋ほどのいがい(ひる貝、
たり貝)が群生している。普通
の人ではなかなかもぐれない。明
治の頃、艀で木挽をする石田千松
という人が見つけたのでこの名が
付いたのだそうだ。

◎嶺泊から古潭までの海岸

㉔ たきのさわ(しんぼのさわ)

滝の沢は別名新場の沢ともい
う。この沢の水が海に落ちる所30
〜50疋ほどの滝になっている。雪
解け時期や大雨の後など滝の形は
最もよくなる。この沢口に漁場を
営んでいた人をタキの爺さんと呼
んでいた。寄る年波にこの爺さん
もこの漁場を田附に売って自分は
生国に引き揚げてしまった。買
った田附はここに新しく建網場
所を設けた。それで新場の沢とい
う名が付いた。

②に「ビイ(平磯)名義、沖の
岩上に立て秋味の来るのをみて、
括鎗(モリ)を突て捕る故号くと
も、ビイは突事也。」とある。ビイ
はびいびい(アイヌ語には濁音の
つく言葉はなく、半濁音か清音で
ある。)で(Pi)は小石、小球、種
子を意味する。厚田の浜の多くは
石浜であるから、特別にこの名が
ついたのはこのびが特殊なのであ
るに違いない。先のうえんしりの
附近には直径1・2疋の粘球が海
面にも点在していた。これがびな
のである。この名は松浦武四郎が
この群生している小球岩のことを
問いたしたので「あれはびで
」。先の説明を地名とかんちが
いして書いたように思われる。す
なわち文中の「沖の岩上……」の
岩がびなのである。

㉕ ままきのさわ(おくしりのさわ)

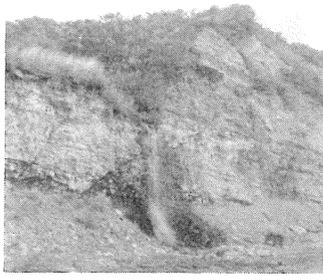
木巻ぎと書くのであろうか。こ
の地名は古い記録に出てくる。松
前東西地理(寛政9年1197)に
「ウエンシリ、此所若小崎(IIう

㉖ うえんしり

ウエンシリはボン滝の沢の北に
ある。①にウエンシンド②にウエ
ンシント、松前東西地理(寛政9
年1197)にウエンシリとある。う
えんしり(WEN-SIR、悪ヶ岬、
しれどしりーえと(SIR-ETU)
土地・鼻・岬の意味である。この
岬下には多くの岩礁が点在してい
て磯辺を漕く舟の障害になったか
らであろう。岩礁のうちには2、
3疋の球形をした粘板岩もいくつ
か見られた。

㉗ びい

②に「ピイ(平磯)名義、沖の
岩上に立て秋味の来るのをみて、
括鎗(モリ)を突て捕る故号くと
も、ビイは突事也。」とある。ビイ
はびいびい(アイヌ語には濁音の
つく言葉はなく、半濁音か清音で
ある。)で(Pi)は小石、小球、種
子を意味する。厚田の浜の多くは
石浜であるから、特別にこの名が
ついたのはこのびが特殊なのであ
るに違いない。先のうえんしりの
附近には直径1・2疋の粘球が海
面にも点在していた。これがびな
のである。この名は松浦武四郎が
この群生している小球岩のことを
問いたしたので「あれはびで
」。先の説明を地名とかんちが
いして書いたように思われる。す
なわち文中の「沖の岩上……」の
岩がびなのである。



嶺泊のたきのさわの滝口



望む口も見える
方面のさわ
益きのさわ
浜ま
厚田の「うえんしり」
から「たきのさわ」
附近の岬が
のさわの
ききの
たきの
右側



「うえんしり」をみる。
「うえんしり」が
古潭側から
「び」が点在

移住してきた伊藤市太郎
という人が守っていた。
それで奥尻の沢といっ
た。

㉘ ぼんきまきのさわ

きまきの沢と一対にな
る小沢で古潭に行く左浜手にある
凹みがぼんきまきの沢である。

㉙ にしやまのさわ

古潭と嶺との界になっている沢
で、現在、西山さんの水田がある
からである。

㉚ てんぐやま

古潭・嶺泊・望来村の境界線が
集る所にある山で、その高さは
83.3疋、天狗の鼻のように突き出
ていて四方を眺めるのに大変都合
がよい場所なのだそうだ。

おわりに

この地名を調べるにあたり多く
の村人のご協力を得た。正利冠で
は館林さん、本沢では堀岡のおば
あさん・杉本先生。桂の沢では私
達が訪問することを聞いて、わざ
わざ何きも上の南さんも杖をつき

ながら沢を下って来
てくれた。それに宮
下さん・寺内さん・
名尾さん・清水さ
ん・サランベツの小
谷さん、嶺泊では木
村さん、この家には
何回もおじやまし
た。夏の忙しい時期
でも仕事を止めて応
待してくれたり、
冬、地吹雪に会って
ひどく困難したこと
があった。昼間は元
気を出して歩いているうちに保温
でとけ、夕方寒気が激しくなっ
てきたのでそのまま凍りついた。こ
んな恰好のままころがり込んだこ
ともあった。それに宮川さん・今
さんら、たくさんの人達のご協力
で正利冠・望来・桂の沢・嶺泊地
区の地名調べを完成することがで
きました。有難うございました。
厚くお礼申し上げます。
(文責) 藤村 久和

文献に現われた厚田村 Ⅷ

秋田藩士松本吉兵衛蝦夷地旅行日記 一八五九(安政六年)

解説

今回は数多い旅日記の中から松本吉兵衛の「蝦夷地旅行日記」を掲載することとした。

旧蔵者は小樽市の渡辺得郎氏で、現在は今年度開館予定の北海道開拓記念館の資料として、同氏より寄贈され、保存されている。

日記の内容は、安政六年松本吉兵衛盛親が、カラフトのクシュンコタンにある陣屋に半年勤務することとなって、四月六日に秋田県久保田を出発し、同年六月十九日クシュンコタンに着陣するまでの道中記である。この記録は四巻からなっていて、うち三巻が日記で、三巻目の末紙と四巻目は文を補う絵図及び写生図である。

巻名は次のようになってい

- 一、松の巻 記事の序、四月六日の出発から五月十四日ドイツの逗留まで
- 二、竹の巻 五月十日から同月二十九日フレベツ番屋泊りまで
- 三、梅の巻 六月一日から同月十九日クシュンコタンの着陣まで。マシケ陣屋箱館遊女街図、噴火湾行程図など。

四、松前より宗谷まで絵図

松前から宗谷までの行程図、箱館山の図、アイヌ風俗、箱

館在住の米人男女図など。

このような装束となった理由は松の巻の序文に、吉兵衛の日記の所在を扇徳と名の老人が借りうけ文久三年(一八六三)中冬に写し、表装上、分巻したためである。原本となった日記の所在は今なお不明で対比することは出来ないが、おおかたは写しとったようである。ただ、一部に略文・略図がみられ文章にも若干の手直しがあるらしい。例えば「其微やかなる実」に「其理有ければ其志を顕はさん為取直し書加へ侍りぬ。」などである。

さて、本村は五月二十二日(二十四日の項に記録されているが、運上屋の内部・アツタのアイヌ風俗・労働状況・厚田市街のようすなど他の記事には見られないものを多く含んでいる。

本文

同(五月)二十二日ヲシヨロコッ、本名アツタへ三里十三町、海岸ともに同じみちのりなり。朝五時半時(午前九時)出帆。順風にて孕帆にて走る。やかた船きれいに造り、舟中たたみを敷、新たなり。右の海岸は大木の寄木、浜に

満てはなはだし。当所は年中の新炭ともこの寄木をたき続くよし。いかなる普請もこれを用ゆ(一)という。これより波も静にて、氣(持)よく遊び、舟も同じ。水主は皆アエノなり。メノコも四人交りて打かきをつかう。ふなびようし(は)声をそろへて唄う。四時半時(午前十一時)アツタへ着陸(行)の人々は少し遅し。アツタは運上屋一軒座敷はひろし。板藏浜なりに長さ四十間に建(て)其外、漁小屋多く、運上屋より二百軒ばかり隔(て)町屋(敷)二町もあり、諸商人住なり。遊女町もあり。運上屋前に諸国の廻船数十艘かかれり。西を真向の海上にして、後は東にて軒端より山なり。此所昼休なり。昼後浜マシケへ出帆せしに風かわりて西風はげしく、汐あらく通行ならず。船を引返して、もとのアツタへ着。逗留となりて、座敷・座敷見物せしに、間敷も十ありて、袋戸棚・ふすまなどの画もよくでき(て)いて、住ひも手つごうよくたてたり。えん(がわ)の外は山にて、イタドリまだ若けれども高さ二間半位(に)育(ち)て、太さも四寸程、よもぎも一間位、高くして育ち(の)最中なり、ゆりの花は赤く色づいて開かんとす。牡若(ぼたん?)はいまだつぼみ入るまでなり。当所より半里ばかり行(く)。熱田明神の社あり。遊女町にして諸国の商人入込て繁栄す。この(まま)陸(を)通り、浜マシケへ行によしといへども、山多くして里数十三里半という。春は鮭、

秋は鮭漁ありて、よき場所なり。気候も綿入に、あわせてよきほどなり。畑(の)ものも大体かわる事なし。また、アエノも多く居て運上屋にてつかふ。風呂をたき、ならびに外の仕事は多くは女の子(メノコ)なり。蝦夷家へ行て見しに、うすべり様のものをしき、別にかわることなし。アエ(ノ)の宝を見せると言しに、箱の中より古びたる刀三本、長刀一振、陣羽織を見せ、また、ホカエを出し、中より金時絵の腕(など)色々出したたり。是は代々伝へし宝と言。もつとも蝦夷のかしらなり。衣類も多く木綿の類にして、皆アツンごしらえに同じ。また、夕べに風呂(湯)を運ぶは十六・七の女の子(メノコ)二人して持運ぶ。その姿を絵に書てつかせしに、女の子(メノコ)七人寄そろふて互につくづく見居しが、色々はなしあうも一向かわららず、笑ひ合て、番人にささやき、今一枚ほしきよし番人のいいければ、二枚書てつかはしける。また、つくづくと皆々見終り、中の若き女の子(メノコ)アツンのふところへ入てよろこんで行。またまた用もなきに、たびたび来りて、番人とささやき笑ひ合(う)ゆへ、番人を呼(び)、何を女の子(メノコ)の言しやと問ふに、またまた絵をもらいたく来りしと言(う)にまかせ、二、三枚書てつかわし、笑いぬ。

同(五月)二十三日、入梅空にて、しふしふ雨ふり、風すじよろしからず、終に逗留となる。

① 普請 建築・土木工事・造営または修理すること。

② 水主 「カコ」と読み、船頭・船乗り

③ アイノ アイヌ語のオはウに近い音であるため、アイノと聞えることが多い。アイヌは神に対して人間、女に対して男、妻に対して夫。男性の総称として用いられている言葉。

④ メノコ 日本語の女の子(メノコ)の転音である。

⑤ アツタ

現在の押琴湾一帯をさしてい
る。

⑥ 熱田明神の社

厚田市街にあったが現在のど
の位置か不明である。

⑦ うすべりよもの

蒲で編んだごさをさしてい
らしく、アイヌ語でトマとい
う。日本語の苔の転音。

⑧ ホカエ

アイヌ語でシントコとい
漆器類を入れて保存する用途
があった。

⑨ 耳輪

アイヌ語でニ・ン・カリとい
日本語の耳金(みみかね)の
転音、子供または耳輪がない
場合は一般に赤布をつける。

⑩ のど輪

アイヌ語でレ・ク・ド・ン・ベ
い、(REKUT-JUM-PE)の
どにあるもの、木綿製ののど
輪をさす。

⑪ 袋にしてしめるもの

アイヌ語でモウルといい、肌
着をさす。

⑫ 手に彫物

女子の入墨をさしている。

⑬ 伊達

「だて」と読み、何事もはで
にふるもうこと。

⑭ 鮎天窓

意味は不明だが、ほおかむり
の後姿のこと。蛸坊主の頭を
いうのであろう。

附記

○ 筆者松本吉兵衛盛親は、かな
り重要な役を務めていたにも拘
らず、その系譜および彼のこと

について一切知ることができ
ず、目下、秋田県立図書館、秋
田県史編纂委員会で調査中であ
る。

○ 吉兵衛は前年の安政五年(一
八五八)にも来道しており、竹
の巻のシホヤ(塩谷)の記事に
「シホヤと云間に入、番屋に上
り召連し下人の去年通ふり宿有
て、此ものに尋問しに昨年も能
き天気にて通行せしに云々」、
また、梅の巻の噴火湾の絵図に
は赤線で、スツッーオンヤマン
べーワシノ木の方へ行路が示さ
れているところから、安政六年
の帰路の一部を書きしるしたも
のと見うけられる。

○ 吉兵衛の日記を写した扇徳は
点心居または文香舎と名のつて
いるが、この人物についても不
明である。ただ、文久三年に六
十三翁とあるところから、一八
〇一(享和元年)生まれであ
る。

○ 梅の巻末に、同藩でマシケ詰
となっていた石井弥五右エ門に
吉兵衛の日記を見せ、和歌を一
首与せられていたところをみる
と扇徳なる人物は藩人とのつき
合いもあり、写しの自序からみ
て、かなりの有識者のように思
えるし、吉兵衛よりは年輩では
なかったかと考えられる。

盛親が写されしえぞが千島の
図を見待りてさきにおのれも
見し処なればかくなん。
同藩石井弥五右エ門忠行、
たち返りふたたびたどる

こころし
目もあかなくに
えぞのうつけ絵

○ 文末となったが、松本吉兵衛
絵巻を当機開紙に掲載すること
を快く許された開拓記念館開設
準備事務所に対し、深く謝意を
表します。

引用文献
秋田藩士松本吉兵衛蝦夷地旅行
日記
(藤村久和記)

女の子の手紙

鈴木 藤吉

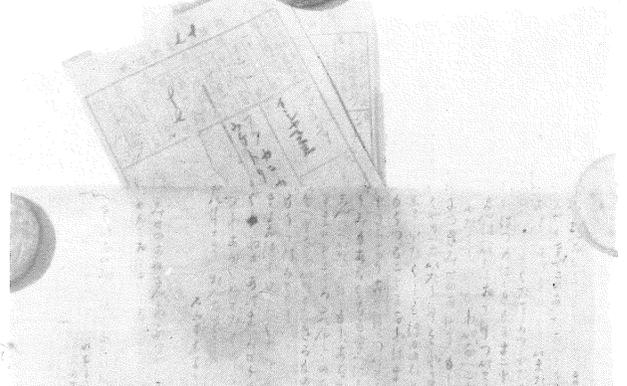
コタンの佐々木善太郎氏の祖父
は運上屋の番屋の管理をしていた
という。その佐々木氏から貰って
きた襖(ふすま)四枚の下張りか
ら二百枚余の墨書の公文書が発見
された。商店あたりから出てくる
襖には売掛けの大福帳用紙が下張
りに使われていることが多い。寺
あたりから出てくる襖には寺院関
係の私信が多い。

たまたま、コタンの竜沢寺の物
置にあった襖から女の子の手紙が出
てきた。昔の女の子の手紙など珍
しい。大和仮名混りの平仮名で、浜言葉
そのまま墨書されている。七月
に書いたものと八月に書いたもの
との二通が見つかった。第一信の
手紙の返事がおそいで待ちきれ
ず、第二信を八月に出している。
ことに珍しいのは第二信の末尾に
書き添えてあった自作の歌であ
る。

「さけおのみ／＼
ほらふきづらし
それでへんじは
おそいのか

年配の女房が馴れない手つきで
筆をとり、歌で亭主をきめつけて
いるあたり、当人にとっては真げ
んそのものであったろうが、今読
むとなんともほほえましい感じ
がある。

- はやくあなたのそばにゆきたい
● へんじをぐたさらぬは、どうい
うわけか。
● おかね四円おくつてぐたされ。
● もしおくつてくださらねば、一
枚着物(一番上等のもの)でも
売りはらつてまいりたい。
● 八月もすぎると海も荒くなる。
● ははさまもしんばいしています



紙送達電報の影 松から男の第2信と8月の手紙から女房

とおどしたり、すかしたりいろ
いろな方法で、切々と訴えている
女の心情。男は妻と母を残してひ
と日本海沿岸を北上して奥地に
入りこみ、一日も早く呼びよせた
いと一生懸命に働いているうち
に、この手紙を受けとった。酒は
のみたし、お金はたまらない。
返事の出しようもないやりにきれ
ない気持になったことだろう。

また、明治17年の電報送達紙が
見つかった。発信月日は10月6日
発信地はワタルイナホマチ、発信
人はシライシ、宛先は福山のユド
ノサワマチ、宛名はイシヤマ
エ。この「イシヤマエ」と手紙
の主「石山すゑ」が一致する。最
初の手紙の返事を一カ月も待てな
くて、第二回目の手紙を出したく
らいだから、二カ月
後の10月にこの電報
を受けとった時はど
んなに嬉しかったこ
とか知れない。男も
数カ月間せつせと働
き、ようやくいくら
かの金がたまつたの
で十月に送金し、そ
れを電報で知らせ、
ほっと一息ついて肩
の荷を下したことだ
ろう。

この電報送達紙で
前の二通の手紙だけ
でははっきりしな
かつた年代や場所が明
確になった。年代は
明治17年、場所は松
前の福山と小樽の稲

穂町との通信である。
○この頃、手紙はどうして運ばれたか。
明治5年(1872)6月、函館に郵便役所がおかれ、全道の郵便事務が開始されたのだから手紙を運ぶのは現在の制度と大差はない。
○電話はどうだったのだろうか。
明治7年(1874)、札幌〜小樽間に電信線が架設された。それから10年後の明治17年のことだから松前〜小樽間の電信も可能であつたにちがいない。

○交通は
明治13年(1880)、函館〜小樽間に定期航路が開かれ、日露戦争の明治37年、函館〜小樽間に鉄道が開通した。そこで、明治17年に福山から小樽に行くとしたら、自分の足で歩くか、さもなければ海路の定期航路を利用するしか方法がなかった。手紙の返事がおそくて一カ月も待てない女のことだから、多くの日数をかけて目的地の小樽にまで行かせる筈がない。多分この男は福山に妻や母を残して、定期航路を利用したにちがいない。

○不審に思われること、
男は「シライシ」、女は「石山すえ」だから同姓ではない。それでいて、手紙の内容は愛情こまやかで、母も認める立派な夫婦である。現在でいう内縁の妻だったのだろうか。

○男の職業は、
ひょっとしたら、竜沢寺の役僧(アルバイト僧侶)だったかも知れない。古潭村の曹洞宗三面山竜

沢寺の住職は文久元年(1862)の創立以来はつきりしている。初代萩原泰能・二代萩野拙堂・三代丹羽月深・四代広瀬義寛・五代笠井禪童・現代笠井正逸。この初代の萩原泰能氏は明治20年に神官に転向している。3年前の明治17年だから萩原泰能と何等かの関係があつたものと思われる。
○男の年齢は、
明治17年に、妻帯しながら奥地にまで進出して行く男だから、30歳ぐらいと考えて間違いないからう明治17年に30歳としたら明治以前に生まれたことになる。戸籍の方

◎物件寄贈者御芳名

(敬称略)

- 厚田 鈴木健次郎 酒買い樽
- 厚田 山中鉄三郎 天保銭外
- 別狩 高橋 要 鏝外
- 牧佐内 外崎金之助 もち切り板
- 厚田 若佐 一郎 箱枕外
- 嶺泊 虎林 タヨ 硯箱外
- 古潭 山中 道信 土器
- 別狩 古山三太郎 酢がめ外
- 厚田 古川三太郎 桂時計
- 別狩 池田 保 柱時計
- 厚田 八島 政雄 みの外
- 厚田 谷本 勇 ラップ
- 厚田 品田 清一 花ござ外
- 厚田 和泉 留吉 わらじかけ
- 厚田 寺崎 光春 簾垂れごま
- 厚田 志村 慶作 土蔵の鍵
- 嶺泊 宮川金之助 荷馬車
- 厚田 妹尾 孝 番屋提書外
- 厚田 鈴木 藤吉 二重マント
- 厚田 阿部 勇作 弓張提灯
- 厚田 西田 和美 ろがき

は当時の人別帳から正式の戸籍法に改正されたのが明治5年。その頃に結婚したものと考えられる。その頃のことだから戸籍のことなどさほど重要に考えていなかったかも知れないし、禪宗の僧侶だから入籍できなかったかも知れない。
○おわりに
とにかく、この電報送達紙と手紙が同じ襖から出てきたことから、この家族は無事に再会できて、ともに手をたずさえて小樽からアツタにまで進出して来たものと思われる。
まずは、めでたし、めでたし。

- 厚田 小倉 正志 屏風外
- 厚田 池垣 二郎 さはち外
- 厚田 福士 武雄 わらじ
- 厚田 小笠原 敏 山鋸
- 厚田 阿部 勇作 提灯
- 厚田 吉岡 留治 モッコ外
- 別狩 深野仁三太郎 煙草入れ外
- 厚田 阿部 勇作 下駄外
- 厚田 清水 忠臣 船だんす
- 厚田 平泉 清美 大だも外
- 厚田 鈴木勇次郎 ロウソク箱外
- 厚田 松井 勇 パチンコ
- 厚田 鈴木日出男 ケセル外

機関紙「弁財船」も

No. 26号で最終回

昭和40年から隔月に村内各戸にお配りしていた「弁財船」も25号をかぞえました。厚田村史が出来上りましたので、機関紙とし

ての役割も終り、今回のNo. 26号をもって最終回となりました。
皆さんに親しまれたこの名前は、明治よりもまだ昔から厚田の浜にやって来た船の名です。
米・味噌・醤油などの食糧品、酒・煙草・菓子などの嗜好品、繩・釘・履物・衣類などの生活必需品をこの船に万載して蝦夷地にまでやって来ました。本州から遠くはなれて蝦夷地で働いていた人達はこの船を宝の船としてどれほど待ち望んでいたことでしょう。
本州と北海道を結んだ弁財船の名をとって、村史と村民との間を結ぶ機関紙の名前としたのです。
みなさんからのお話や資料をたくさん積んで26回通ったことになりました。

なお、集められた資料はそれぞれ貴重なものばかりで、いつまでも大切に保存しなければなりません。幸いにも、道庁では開道百年の記念事業として、野幌に記念館を建設し、ここに全道の資料を集め、専門家たちが一品一品ていねいに整理し、湿気にも浸されず、虫にも食われず、日の光にも変色や変質しないという永久完全な保管体制が確立しています。厚田村も一千余点の資料をここに寄託いたしました。寄託とは、寄附ではなく所有権はこちらにあって、いつでも必要な時には持って来る事ができるのです。道庁ではただで丁寧管理して下さるといふのですから結構な話です。現在、こちらには数十点しか残っていませんが厚田福祉センターの資料室に

陳列してあります。どうぞお気軽にお立ち下さい。
次に、厚田村史ですが、お陰様で昭和45年にその初版が出来上りました。真白い大版の表紙で、金色の背文字も上品です。中の紙もしっかりしていて、どっしりとした重量感があります。これが厚田村史かと思わずほほずりしたくなります。

内容は村勢要覧的なものから脱皮したもので、漁村として開けた村だけに漁業が中心になっていてその専門分野も深く、学問的なところが特徴といわれています。
東京の国立図書館からも、米国のコロンビヤ大学からも注文が来ました。北海道の片田舎の過疎に悩む一寒漁村の厚田村も学問の世界では全国的な世界的な存在となったわけですから。大いに胸を張って今後の厚田村発展のために努力しましょう。
また、厚田村はその歴史が比較的古いので資料はたくさんあります。むかしはなしの所などは面白く読んでいただけるものと信じます。
経費の点では印刷費だけで一冊三千二百円もかかりました。希望者には実費でお頒けすることにしました。村民中の希望者には割引きの特典もあります。
とにかく、弁財船の発行はこれで終わりましたが、村史の研究や資料を集めることは今でも続けております。どうぞ今後ともご協力下さいますようお願いいたします。
(鈴木記)

NO.27
昭和47年
10月16日

弁財船

発行 厚田村
編集 企画室
印刷 中西印刷



「弁財船」の発行継続について

厚田村史の機関誌「弁財船」は昭和四十年三月第一号を発行してから同四十六年第二十六号まで続けられました。

これで一たん中止しておりましたが、各方面からの要望もありまして今年から再発行することになりました。村史編纂にたずさわった先生方も各方面に転動され残り少い担当員ですが、細々ながらこの事業を継続していきます。旧に倍してご支援ご協力をお願い申し上げます。

この機関紙を「弁財船」と命名したことについて再びご説明いたします。

往時（江戸時代）本州と北海道とを結ぶ役目をした船は「三十二反の帆を巻き上げて……」の歌の文句の通り大きな一枚帆で、通称北に向って行く船だから北前船、沢山荷物を積むことが出来るから千石船、宝物を積んで来るから弁財船と各々呼ばれていました。べんざいという名は俗間に福德の神として信仰された七福神すなわち蛭子・大黒・毘沙門天・弁才天・布袋・福祿寿・寿老人の中のただ一人の女性弁財天からとられたものでしょう。

弁財船は今でいうと貿易船で、本州各地から日用品や漁具などをたくさん買い求め北海道に渡り、北海道からは鮭・鱈・魚粕・昆布・なまこ等を沢山積んで本州に帰る。未だ文化も進んでいない何事も不便な生活を続けなければならなかった北海道の住民、人口不足でやるせない淋しい生活を過していた道民にとっては、この弁財船の来航を一日千秋の思いで待っていたことでしょう。浜辺に立って沖合はるかに白い帆掛船の姿を見た時の喜びは欣喜雀躍、手の舞い足の踏むところを知らずとったものであったでしょう。

この宝の船にちなんで、各家庭から役場に運んで下さる者の資料、こわれていても、破れていても、ごみがかぶっていても私たちはこれを二度と得ることの出来ない宝船として大切に取扱います。そしてこれらの資料をもとに色々な厚田村の歴史を各家庭にお届けいたします。丁度弁財船が本州と北海道を行き来したと同じように、今昔を結ぶ役目を果たすということで「弁財船」という名を付けました。この船が無事に航海できますよう今後共よろしくご協力下さい。

厚田村長

柳 太一

資料室より

弁財船の発行は一時中止になりましたが資料はその後も絶え間なく集められていました。特に今春は引越しの家や新築の家が多かったためか、一軒で沢山の資料を寄贈していただきました。そのため役場の物置も福祉センターの二階も満員の盛況です。この調子で集められたら資料の置き場に困るのではないかと心配しています。

(一) 公娼の実体!! 梅毒検査証 鈴木藤吉

厚田本村の中番屋通りの旧鈴木勇次郎宅から出た資料のなかに、煙草箱のような木の箱には和紙が何枚も貼ってあってその表面には茶褐色をした渋が塗ってありました。その箱は半ばこわれて和紙も破れていました。筆で書いた字が見えたので、それを全部剥ぎとり割けても半分紙でもいねいに取扱って調べたところ意外にも珍らしい資料が見つかりました。

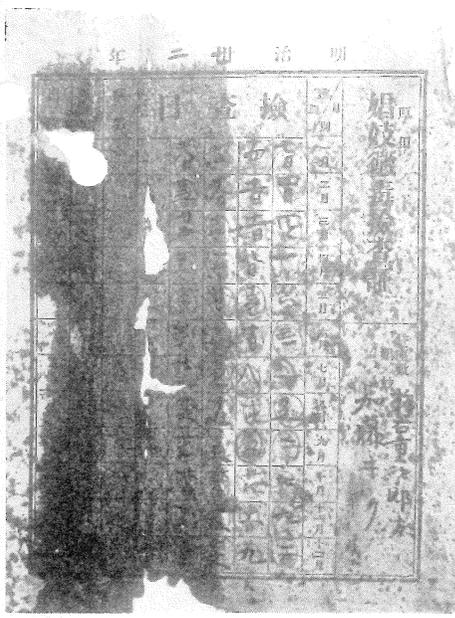
府の発行した官報ともいふべきもので海軍省、陸軍省、文部省、通信省、大蔵省、農商務省などの活字印刷物、その他に筆で書いたものとしては岡山県加茂郡三津村の床屋さんのものが多かった。厚田村とは省接関係の薄いもので、自用煙草作付反別御書だけでも数十枚ありました。

こんな襖が何故厚田村から発見されたか、などたりたどって研究すれば、厚田村と瀬戸内海との連りがわかり面白いと考えますが

フスマの下張りから貴重な資料

……。
いま前記の活字印刷物の中に、中番屋通りの鈴木勇次郎宅から出た貸座敷に働く女性の梅毒検査証と同じものが発見されキョッと驚きました。こちらはただ用紙の大きさもタテ十六・五センチ、ヨコ十二センチで印刷された文字も線も同じです。
一してみるに梅毒検査は全国的に義務付けられていたものと考えられます。
なお、この種の女性たちはどこへ行くにも警察の許可が必要で、明治二十四年のその許可書には「右ハ明治二十四年九月十二日ヨリ往復一週間の見込ヲ以テ石狩郡石狩本町五番地関谷政吉方ニ出行ノ願之件許可ス。九月十一日厚田分署長氏名印」と記してあります。
これを読むと、まるで罪を犯した人が監視されているように思われます。

それは、小説家故子母澤寛、本名梅谷松太郎の父梅谷十次郎の経営していた貸座敷、明治卅一年本村にあった團(カクゴン)という今でいう料理屋、そこで働いていた娼妓の名前も記してありました。このようなところで働いていた女は毎週一回医師の診断を受ける義務があったのです。毎月四、五回一カ年分の欄には一つ一つ検査済の印が捺してありました。拡大鏡でよく見るとその印には「無毒」或は「月経」と記されてありました。
同じく、厚田本村の品田清一氏より寄贈になった襖八枚の下張りには二百数十枚の和紙がありましたが、これは明治十四、五年の政



北海道開拓記念館招待見学記

9月14日

招待者三十名を乗せたマイクروبスは厚田村沿岸街道を南に走る。途中、虹色に輝く高い鉄塔の石狩河口橋、こゝで、広漠たる石狩野の昔を偲び、厳冬に足重い徒歩でとった思い出の石狩街道の省線を慕進。やがて都心に向う。苗穂の東橋を過ぎて白石街道に出ると、遠く野幌の丘の上に聳える高さ百メートルの記念塔を望む。

幾組もの修学旅行の団体見学者と共に我等、厚田社会大学の学生たちも入館、資料を提供して下さった人たちの団体のので入場無料の恩典にあずかる。役場からは招待、記念館からは無料、両方の煩を無でられたような晴やかな心地。ナウマン象の骨組みから、何万年以前の土器・石器をはじめ、室内の輝くばかりの装飾の壮大さに心をうばわれ、開拓以前からの交通の主役の千石船から開拓使庁というお役所の苦勞、沿岸の漁業、内陸の開墾・農耕の様子、炭鉱・林業・間縄など、更に、往時の庶民生活の台所・居間・水がめ・ランプ。大人の遊び用具の花札・百人一首、子供の遊び道具の凧・お手玉・パッチ・こま・絵紙いちいち書き上げることが出来ないが懐しいものばかり。
「わたし、これを見せてもらって若返ったよ」と満心の笑みを現わして元気づいている人。
「これなら、まだ、家にも出すものあるよ」と更に意欲を燃やす人。

「よくまあ集めたものだ。調べたものだ」と感心する人。各人の口から突いて出るものは驚嘆の声ばかり。
「ゆっくり眺めるんであったら三日もかかるね」となかなか去ろうとしない。
帰りは正面玄関で記念撮影としゃれたが、さて、果してうまく写っているかどうか。素人写真の自信の無さ。失敗だらうとごめんあそばせ。

お昼は役場から出してもらった折詰・ファンタ。芝生に腰を下していただくかの小学生のように、我等大学生も青空のもとで、自由に、とも考えたが衆議一決、バス中での会食、また楽しからずや。少し紅葉がかった来た秋の野面を渡る風も調味料として甘く、顔見知り同士の厚田衆、何の遠慮もなく大きな口を開けて食べるおひるは特別に美味だった。
有料駐車場だったので予定を少し切り上げて、札幌の大通りに着いたのは午後一時、こゝで一時間の自由時間。孫へのおみやげなど買う。

午後二時、札幌を後にしてなつかしの厚田に向う。途中、聚富・望来・嶺泊・古潭・青島などこまごまと停車しながら役場前着は三時半だった。
たった一日、数時間の大学生だった同志たちは別れに当たって世話になりました。有難うございました。みなさん、さよならとさすがにエチケットは申し分なく立派。
故もなく、さわやかな秋日和に恵まれて、有意義な一日で

(鈴木藤吉記)

聚富川口遺跡について

藤村久和

1 はじめに

聚富川口遺跡は昭和38年7月7日、当時、厚田村立聚富中学校の三年生であった、阿部正君の通報によって調査されたことに始まる。遺跡は、石狩町境に接する聚富川右岸に位置している。聚富川は現在、石狩川に流入する。聚富川となつてはいるが、ほぼ明治20〜30年代までは、今の川口から、直角に北上して、石狩湾へそいでいた。即ち、遺物は、旧国道と旧聚富川にはさまれた帯状の部分のみ、確認することができるといふ。このため遺物の小群落に便宜上A・B・Cをつけた。(図2)

Aは旧国道より直角に三角点、標高61.7の砂山の南麓を通過して、鮭密猟監視場へぬける私道より南に位置する範囲を示す。調査当初は、すでに多かたの遺物包含層が、客土用の土砂として取り去られ、表面に露出していたと思われる遺物が、海よりブルトーザーで押し寄せられていた程度である。その後、これは輸出用の百合チューリップの球根を栽培し続けている。純粋な遺物包含層は、現聚富川口の一部に残されている。なお、かつて遺物を多量に含んでいたことは、ここより運ばれた砂を客土用に使った田畑から、かなりの遺物が見られることによつて、推察することが可能である。

Bは三角点の砂山附近をいう。この附近は客土用として砂の一部を取り去られているため、風雨によつて遺物が、かなり露出しているが、包含層は、攪乱されていなかった。昭和44年より始まった白津狩(川地図では知津狩)の切り替え工事によつて、完全に壊滅し

てしまった。Bは主に漁猟の建築物の群集であるが、風溜によつてDサンの埋葬も見られた。

Cは、白津狩の地点より旧国道が少し右に折れる地点より北の部分を示す。ここはBにくらべて民衆の生活の場であつたらしく、台所用品、獣骨魚骨、貝類が豊富に見られる。

この遺跡は文化層が二層あつて表土より2.3m下に第1層、それより1.5m程下に第2層がある。遺物は各層に見られるが、時期的には幕末明治中期に位置づけられる。

2 遺跡に関する資料

江戸期における最も古い記録は文化3年(一八〇六、弁財船Ⅱ2参照)に見られる。

「シユップ(聚富川口遺跡)、シリアツカリ(白津狩)、モウライ(望来)、此所三ヶ所、鮭の漁小屋並蝦夷家も相見申候。」(註1)

「シユップ、インカリ(石狩町の意味)、ヲシヨロコツ(厚田村の旧名)境なり。番屋、夷家、秋味場也。」(文化4年一八〇七、註2)

「シユップ、砂浜、番屋あり。この番屋は小田文右エ門の出転(店?)なるか。」(弘化3年一八四六、註3)

「シユップ(聚富川遺跡)人家67軒。(明治3年一八七〇、註4)

明治4年頃の制作によると思われる「厚田村漁場図」には、遺跡A地点附近に「伊達英橋」とあつて、後、当別町に入植した伊達邦直の領有地があり、それより伊達川口にかけては、樺太より対雁に移住した後、鮭漁を行った、土人共濟組合の名が記されている。また、石狩町の田中ら氏によれば、

安政2年(一八五五)、天野某が、遺跡のどこかで店を構えて商つたというところである。また、遺跡発見当時、この遺跡に関する聴取を行ったところ、明治期の終りから大正期にかけて、大きな鮭漁の漁場があつて、古い持主は全(ヤマオウ)井尻静蔵(鹿児島県出身、武士)といひ、二代目静蔵になつてから、その配下にあつた鈴木某に与えて、小樽市へ移り、そこで以後倉庫業を営んだ、漁場を所有して頃は石狩町に本宅を構えていたといふ。その後、鈴木某の代になつてまもなく全焼して、誰かが細々と鮭網を建てていたといふことであつた。この間、来札に移住した樺太アイヌが労働者として雇われていた。石狩町八幡町住の鎌田老人が幼ない頃、父に手をひかれて、樺太アイヌの熊送りを見たことがある(話しからC地点と思われ)などの話を得た。

この遺跡は、古く文化3年、おそらくは、それ以前から、大正期にいたる100年以上も、鮭漁をただ一つの本業とする漁場の跡であつた。

3 出土遺物について

遺物と勺(貧乏徳利)、三平皿五郎ハ、大皿、銘々皿、湯のみ、箸立、弁鉢、片口、素焼物(すり鉢、ゆき平、みそがめ、水がめ、きりぎりす)、ガラス製品(焼酎びん、葉びん)、ガラス玉、金属製品(船釘、和釘、かすがい、鋏、鋸、炉せん、煙管、古銭、毛抜き、マキリ)、骨製品(サツマ、きせるの緒)、植物製品(炭化した木材、こぎ)などである。これらの多くは、聞きとりを裏すけ物には焼けたものが多く、事実日常生活必需品が主体を占めているので、おそらくは、命からがら逃げまどう程の大火であつたことが予想される。

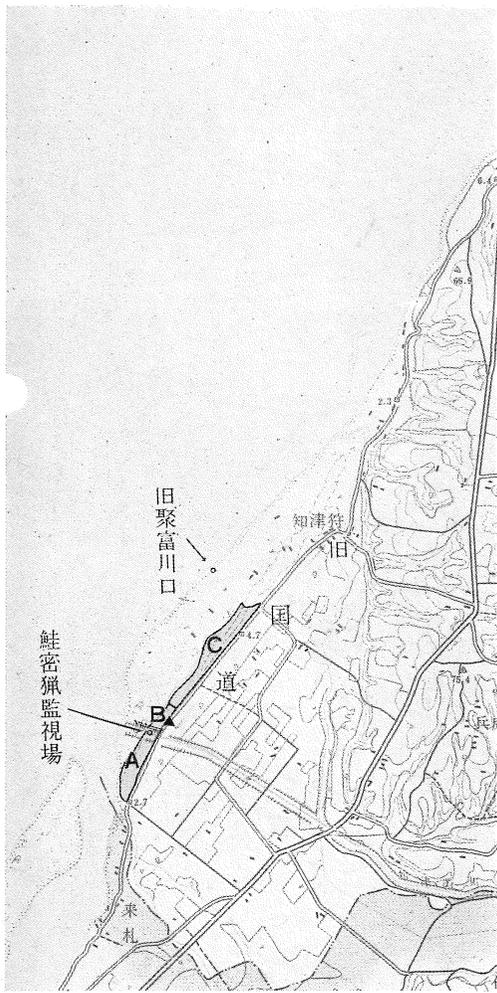
4 おわりに

ほぼ同時期の遺跡としては、石狩町の八幡神社附近、苔生町・厚田・古潭の山崎宅附近の奥に広がる畑をあげることができる。これら明治期における遺跡は、ほぼ全道的に分布するものと思われるが、その多くは港の機能をもつた

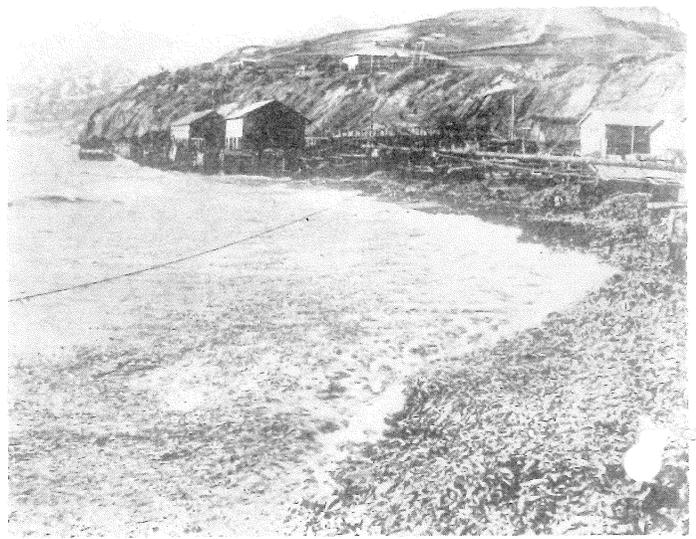
故に、現在では、全て壊滅状態、もしくは住宅下にもれたままになつてはいる。幸か不幸か、聚富川口遺跡は鮭の減少によって残された数少ない民衆の遺跡である。願わくば、残り少ない包含地域を調査されることを祈つてやまない。

3年前、厚田村古潭の竜沢寺本堂の奥の下張りより、シユップにおけるアイヌの漁場、出漁をチェックする横長の和紙を発見することができた。当遺跡を解明する一助とした。

- 注1 遠山村垣西蝦夷日記、遠山左エ門尉(弁財船Ⅱ2)
- 2 西蝦夷日記、田草川伝次郎(弁財船Ⅱ4)
- 3 再航蝦夷日記、松浦竹四郎(弁財船Ⅱ17)
- 4 北行日記、宮島幕(弁財船Ⅱ5)



(二) 大漁のかげの悲劇 鈴木藤吉



厚田前浜の寄り鰾風景、大正15年4月、鈴木健次郎(厚田)撮影

ぼかっととびこんで来て、私のいる長椅子に並んで腰掛けた阿部勇作じいさんは私の顔を見て開口一番、

「あんた以前『厚田村は鰾漁で開けた村でありながら鰾場の写真が一枚も集っていない』となげいでいた。この写真もって来た。これは厚田村の前浜の写真で、大正十五年の寄り鰾の風景だ。これは金の鰾番屋で、ボンビラ(アイヌ語で小さな崖の意)の浜には鰾納屋(にしんなや)がいくつも並んでおり、せろ(丸太材を海中に打ち込んで、熊の柵のようなものをいくつも並べて作り、その中にごろた石を沢山詰め込んだ私設の防波堤または荷揚げ場)も沢山並

んでいる。張り縄も写っているし、四軒番屋というのはこれだ」と一つ一つ教えてくれた。
「ほんとは、前浜の写真だ。これはいい写真だ。この写真どこにあった？」
「札幌の弟の家から借りて来た。厚田になくて、札幌で見付けるなんて、一寸変だね」と笑いながら説明する。写真は少し赤味がかってしたが、はがき二倍位の大きさで、台紙も付いている。素人写真ではない。
「張り縄とは何するものさ？」
「船といものは浜に着く時はとも(船尾のこ)の方から陸に揚げられる。この方が荷物の積みおろしに便利なんだ。船が沖から

浜に近付いた、時この張り縄に船の先の方を縛り付けると、百八十度回転して、船尾が浜に着くようにしてあるんだ」
「四軒番屋というのは？」
「四軒番屋とはね。当時、鰾場時期になると石狩の漁家も厚田まで当稼に来たもんだ。この家に石狩衆が四軒(四家族)住んでいた。厚田の人達はこれを四軒番屋と呼んでいたのさ」
「誰々が来ていたか、その人達の名前おぼえているかい？」
「吉岡に、忠海に、……に、の四軒だ」
「なごさ、波打ちぎわ、これがみんな寄り鰾かね」
「この年は鰾が群来た年で、大漁だったが、大時化(しけ)のため折角わく網に入れた鰾を海に投げ出さねばならなかった。その時の寄り鰾だ。村人はみんな集ってこの寄り鰾を拾った。農家の人達は馬車で運んだ。何日もかかったよ」話はおもつづく。

当時の作業衣(こしみの)

廊(内屋)がからんで(いつばいになる意味)アツボウを組むほどの大漁

吉野貢一氏(望来)所蔵



俺が撮つ、写真だよ」という話、そうぞう、鰾のとれているさいちゆうに素人が写真機をぶら下げ、浜を散歩でもしようものなら、どこからともなく棍棒が石ころが飛んで来て、足の骨が折られるかも知れない。当時、鰾が群来たとなると、村中総出で浜に手伝いに行った。寺の坊さんであろうが、学校の先生であろうが、役場の吏員であろうが、老いも若きも、大人も子供も、男も女も文字通り村中総出。何しろ、火事場のように忙しく立ち働く浜に来てぶらぶらしていたらみんなからどやされた(大声で威嚇すること)であらうことは想像にかたくない。昭和八年にもこのような寄り鰾があった。この写真は日本海の荒海の爪跡であり、また、先人の行績を偲ぶよい資料であり、厚田村として貴重なものの一つである。

厚田	小山	和名	雑棚雛形書
厚田	鈴木	八重	アイロン
厚田	品田	清一	襖
別府	国松	太郎	マキリザヤ
厚田	相沢	芳太郎	耐がめ
厚田	斎藤	慶太郎	石臼
厚田	鈴木	靖雄	ポスター
厚田	鈴木	日出男	修身掛図
厚田	伊藤	コヨ	瀬戸釜
厚田	米田	三太郎	写真
厚田	深野	ヤス	かもし
厚田	永井	千代	神棚
厚田	平井	欣次	教科書
厚田	小倉	政志	蚊いぶし
厚田	中井	藤助	米びつ
厚田	阿部	勇作	写真
厚田	中村	与市郎	くろこべり
厚田	濃屋	金子	芳郎
厚田	妹尾	孝	通信箋
厚田	国松	栄	化石
厚田	鈴木	藤吉	つづみ太鼓
厚田	塚本	ミサ	ろうそく立
厚田	坂内	厚司	布繩
厚田	坂内	厚司	刀剣
厚田	坂内	厚司	他

資料寄贈者御芳名 (敬称略)

邂逅の時

子母澤寛と戸田弉皇

齋木ひろし

子母澤寛と戸田弉皇の出会いはいつ、どこで、どのように始まったか定かでない。

人と人との出会いには理屈や認識をこえた、ある種の神秘がともなう。路傍の人と、ひょっとした人情の機微、切っ掛けで結ばれないとしても、偶然といえはかない邂逅で、そこに互いに同種同様の、あるいは共通する背景を待つとしたなら、この出会いは一層神秘化されよう。

二人が歩んだわたちの人生の軌跡が、いつのまにか、相連れ添って終点までつづいている。

子母澤、明治25年出生、本名梅谷松太郎、明治40年代には祖父梅谷十次郎と共に厚田を去って札幌に出る。函館、樽小と転々し、そして上京、明治大学を卒業後、新聞記者の世界に入る。大正3年32歳で結婚(大川ママ)。まもなく帰道。大正5年長女誕生(てるよ)。大正7年再び上京するまで、道内の地方新聞社をはじめさまざまな職をかえる。読売新聞、東京

日日(現毎日新聞)、サンデー毎日を経る。このころから、維新関係の史料収集にあたり創作執筆が始まる。

このころは子母澤の異父弟、三岸好太郎が画壇にさっそうと登場した時期でもある。三岸(十一歳下)、明治36年、母イシ、義父岩松、厚田を出奔、札幌で出生。厚田を出た子母澤も一時同居する。大正10年札幌一中卒業後上京、大正12年20歳で、第一回春陽展入選、よく年再び入選、早くも画壇の地位を不動にした。この年入選した作品「兄及び彼の長女」モデルは、兄子母澤(32歳)と長女てるよ(8歳)であろうことは想像に難くない。

この年子母澤も又、読売新聞社会部記者として宿念の第一線ジャーナリストとして活躍していた。そして昭和6年、処女作といわれる「紋三郎の秀」をかざり、あふれるばかりの創作がつづく。近暮幕末から明治にかけての波乱の世間を生きた人々を描がく、い

わゆる大衆文学、時代小説の数々である。「弥太郎笠」「国定忠治」に代表される仁侠物、一連の新選組物、「父子鷹」の勝海舟、しかし、そこで描かれる動乱の世相に生きる人情のひだ、こうした作品の底流には、剛毅、俠気の祖父十次郎の姿を追う子母澤の筆向といえないだろうか。

特に、十次郎を彷彿させる晩年の作品「厚田日記」は、子母沢のこうした作品群を支えてきた根源の集大成といえるだろう。昭和15年戸田弉皇が経営する大道書房からの出版が始まる。子母澤(48歳)戸田(42歳)の出会いである。これまで掲載物が多かった子母澤の作品に、この年を界に単行本の点数がふえる。

戸田、明治33年、石川県に生れる。本名甚一、一家は城聖3歳のとき厚田へ移り住む。厚田では家業の漁業回漕業を手つた。15歳のころ出札。このころの日記に「……秀吉の壮図を思う……になんでも成功成功」とつづる城聖にとって、ひたむきな向学心に燃える焦燥の毎日であったらしい。誰もが経験するだろう、人生のある一時期を襲う回り道の日々である。

「……なのお功ならずんば厚田に帰らず……」

毛の全般を通じて読みとれる城聖のあくなき独立独歩の心である。城聖に特ちょう的なことは、改名である。戸田桜心、桜桃、晴通、雅徳、博方。迷いの時期にきまつて改名し、心気一転、運命の開拓を志す。

城聖に真空の時期がある。夕張での代用教員時代である。そして大正9年上京。城外と改名、当時牧口常三郎が校長の訓導になる。大正11年結婚(23歳)まもなく教員をやめ、私塾を開く。これが成功する。実業家としての出発である。以来、「カザサ」(商事会社)学芸社、昭森社、聖紀書房、奥川書房、大道書房、日本小学館、秀英社等、数社の出版社を経営又は実権を握っていた。昭和5年、創価学会をつくり理事長となる。昭和18年7月6日、不敬罪で入獄、戦時中の思想統制である。城聖は獄中から前記の会社を指揮し、いささかも、晴れの出所を疑わない。昭和20年7月出所、城聖と改名。日記によればこの名は、獄中で考えたされたものだといふ。

獄中から子母澤に宛てた手紙がある。

私の留守中お世話ただただ感謝致しております。勝安房守の第五巻出版の事、心配していますが、私が帰るまで一切の交渉事、不自由も腹立ちもありましようが待ちくたさせ、留守中、大消極策で仕事をして、ここで一切を指し図しているのですから、メクラの下手な基打ちの様なものです。しかし本業の大体のことは承知していますから安心して下さい。

煩惱も真如の月も宿らせて
独房のふーど夢の円らか
(昭和18年9月) 推定

このわずかな文行からも戸田の自信、力強さが、そして、子母澤との親交の深さが読みとれよう。石山寺に、戸田城聖と、子母澤寛の墓碑が並んで立っているといふ。

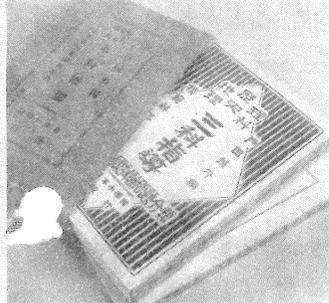
参考書
子母澤寛全集 中央公論社
年譜 尾崎秀樹編
三岸好太郎 匠 秀夫著
北海道立美術館
若き日の日記 戸田城聖著
(獄中記) 加清 蘭発行
青娥書房



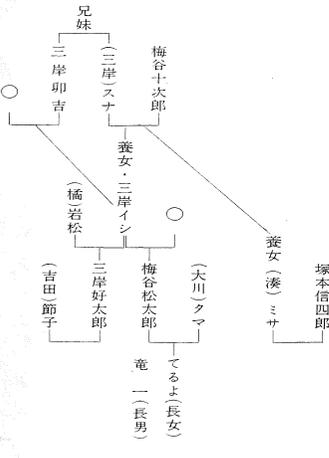
子母澤を描いた三岸の作品



三岸との思出を語る塚本ミサさん (道新47.7.1)



戸田の会社から出版された受験雑誌



NO.28
昭和49年
3月20日

弁財船

発行 厚田村
編集 企画室
印刷 中西印刷



『進め漁民魂』

厚田前浜、あるいは古潭浜であるような、背景は定かでないが、人物群にそれとわかる特徴を備えた人々が描かれている。

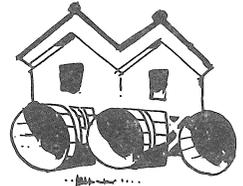
後方の^{マキド}巻胴、もっこ^{ショイ}背負、そして前画の^{コビル}小昼じたく、など鯨場の賑わいを彷彿させる画面である。

嬰井豊松氏の手になる油絵で、裏面に跋文のほか、昭和

18年6月3日の奥書がある。(大きさ75cm×93cm)

開村百年(昭和43年)を期に中川ミツ氏より寄贈されたもの。

その後の運上屋



たという話は村の老人の数人から聞いた。

この金(かね)というのは穴あき天保銭のことで、弁財船が入港した際、村人はみんな浜辺に出て喜んで迎えた。それに応えて船からは景気よく銭(ぜに)がばらまかれた。子供たちにはお土産として煎餅・あめ玉などが与えられた。現今、住宅を新築した際「もつまき」という風習がある。上棟式当日、主人の年齢の数だけ五円(硬貨)に紅白の緒をつけ、更に紅白のもちをビニールで包んで屋上から、そこに集った村人や子供たちにまいて振るまう習慣と似ている。

その時、海に落ちた天保銭が岩の低目や杭の跡穴に留っていたものであろう。

厚田村唯一の天然の良港であったオノコト湾は明治以前から千石弁財船の出入で賑わった。

この湾は南北にはしる汀三百米ほどで、海に向って左方(南側)に浅瀬が沖に伸びており、これを通称弁天ぞりと呼んでいた。運上屋の弁天社の正面に位していたためにこの名が附いたのであろう。

右方(北側)には二つ岩があつて干潮時には岩の頭をあらわしていた。この二つ岩の近くは少し浅瀬になっており、通称中瀬と呼んでいた。したがって弁財船の碇泊は弁天ぞりの方に寄らなければならなかった。今でも弁天ぞりに沿っていくつかの船をつないだ枕の跡がある。その穴の直径は約30センチで、この穴から金(かね)が出

て、古くは京都へ公物を運び上納すること、江戸時代になっては、商・工・漁などに課された税金を取り立てる役所のことである。新しく建築された役宅(役人の住宅)に明治三年二月赴任して来た開拓使の役人は築瀬・横山の両権少主典であつた。役所は開拓使厚田郡出張所と名付けられ、運上屋の職務を引き継いだ。第一には人別帳(戸籍簿)それから持ち船・網数・神社・仏閣など、すべて調査された。それが厚田郡諸調という簿冊となって道庁の倉庫に保管

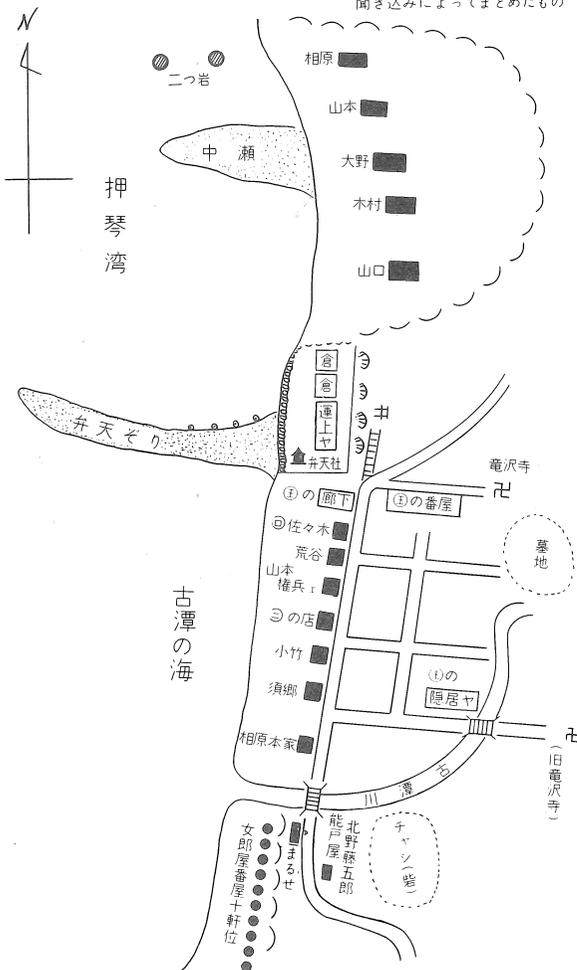
されている。

厚田郡出張所は明治七年まで存続したが機構改革のため廃止され役宅は竜沢寺に払下げられた。

現在、竜沢寺には弁天堂もある。本堂正面の門柱の横木に飾られている竜の彫りものは寸足らずである。多分、運上屋の弁天社のものをそのまま、使用したためではなからうか。そうだとすれば、百年以前どころかもっと古いことになる。また、御影石の手洗鉢や狗犬などは古潭八幡神社に分配されたのであろう。いずれも弘化四年(一八四七年)嘉永三年(一八五一年)の銘が彫つてある。厚田村の文化的存在である。

〔明治の古潭の部落図〕

聞き込みによってまとめたもの



運上屋の弁天社は古潭八幡神社と古潭の滝沢寺に配分されたが、番屋や倉庫はどうなったのだろう。

「私の家は運上屋を解体して持つて来て、建て直して、宿屋を営んでいたが、その後、南北に長かった家を東西に長くして向き方を替えた。」(米沢重三と語ってくれた。なお、押琴には南からカクサン山口・木村・大野・山本そして一番北の方に相原の廊下(生練を一時入れておく物置)があつた。古潭八幡神社の西の崖の下には十ヶ所位練船を焚く大きな番が並んでおり、その浜への下り口には山本兵吉の廊下があり、竜沢寺つづきのヤマオウ全井尻静蔵の土地には20

間もある大きな番屋があり、古潭の川辺に近い所に山本の隠居所が建っていた。榎茸(えんき)屋根が珍しかったので通称マサヤという呼び名が生まれた。

古潭の部落は隣りの望来や厚田などと比べると割合に昔のまの姿で今日に及んでいるが時代の動きにもなつて百年の面影はそのまま、残っていない。時代の動きは年々早くなつていくようである。

(文責・鈴木藤吉)
右は昭和47・10聞き込みを行ったもの
渡辺与之吉(明治19生)
米沢 重三(明治26生)

昔の古潭など

古潭川沿いの沢、東部落で12人の兄弟姉妹の中に育った伊藤喜一さんは厚田の町のお菓子職人に弟子入りし、縁あってヤマミヤ宮に入りむこととなり宮崎喜一となった。趣味は、魚釣りや将棋をさすことであつた。釣りでは厚田川でのアユ、これはベテラン中のベテラン、一晚の収穫、数百匹の腕前。将棋の相棒は電気工夫の秋山惣次郎初代電業所長さん、トーフ屋の安田春杉さん、写真屋の鈴木健次郎さん、いずれも田舎初段の腕前、口の悪いもお互いに初段階。将棋をさしながらのロケンカが囲りの見物人をお笑わせる。これが町中の評判になつたほど有名なものであつた。今では、さしもの好敵手たちも寄る年波には勝てず、一人減り二人欠けて、名勝負の話は聞かれなくなつた。

語りべぐいさん へ宮のほていさん

したのであらう。「いや、いや、ほていさんはへ丸さんのこと」こんなもんでなかつたよ。四人揃きの担架を作らせ、それで運ばれていた。体重は48貫もあつた。わたしなんか問題でないよ。」

三島栄作 伊藤勇作(別家) 伊藤安藏(別家) 伊藤平作(別家) 明治31年杣夫として入殖 齋藤 山口金九郎 この家も入殖は古い。 谷口音次郎 山本直作 笠島三郎 この三軒、望来に通じ金子才次 今山道に。 吉田松之助 押琴の鶴松の親。 伊藤清助 今の山の神社の所 小林 神崎錦四郎 この家を中の家。 右三軒は秋田から入殖。

深井(別家) この本家をたよつて別家・堀・土岐の順に入殖した。 鈴木(本家) 屋号カメダ・子供 深井(本家) 屋号カメダ・子供 木下 子供原五も一緒に通学。 匹田勝太郎 この三軒は川向い。 佐藤富太郎 佐藤富藏 佐々木宗太郎 入殖明治30年、最古。 木島 天神ひげを生やして、たので、木島の天神と呼んでた。 鈴木(別家) カメダの熊さんと呼んでた。 木村 三浦 この三軒は川向い。

平田平右エ門 背丈は高かった。 穴のあいた桐の木で刀を作ってもらつて遊んだ。 東市松 あずまの沢に四軒もあつた。 中島 宮下 越中 浜道 佐々木宗太郎 佐々木宗之助 中島弥助 須郷森一郎 この家川向い。 佐々木 石井 今正衛の親。 やき場の沢、西野のおっか(コト子)の親かご造りしてた。 大島 二ごしよの沢(御用所

の沢)の奥に小さなお堂があつた。熊に出会つた婆さんの。 右の42軒、この他にもいろいろの話を聞かせてくれた。

◎観音講というのがあつて、死者の家に集る時には、米五合・薪二本・お金二十銭持ち寄つて通夜した。 ◎私は通夜の時みんながとなえる地藏和讃を一晚でおぼえた。 ◎常食は麦飯・ごしよいも・ハタハタのぬか塩・ささぎの三平。 ◎大豆が一俵三円。 ◎伊藤の本家・別家では望来に通じつすみやき沢に炭焼窯を一つづつ持つていた。木炭は主にイタヤ。8キロもはなれてはいる古潭の町まで背負つて行つて一俵50銭。冬の吹雪の日など山小屋にとじこもつて一週間も家に帰れないこともあつた。その時の食べ物はずら豆だけ。 ◎ヤマゴ山子(杣夫)の唄に。三斗六升・四升抜かれたもんだ。一俵から四升抜かれたもんだ。 ◎春先早く漁済に雇われて鱈場に使う木粘を切出しに行つた。五間も六間もある長材を出す時などは一台の櫓を十三人で引つぱつた。掘り飯は一升めしだけ。 ◎腹が減ると力も出ない。 ◎プラオを畑を起す機械と云つてわざわざ見物に行つた。 ◎といった調子で、次々と語つてくれた。厚田の語りべいさんと云うところだらう。今回は昔の古潭の沢のことを主に話をしてもらつたが、厚田漁業組合長を二期も勤めたほどの海千山千の苦勞人である。今のうちにいろいろ昔のことを聞いておきたいと思つた。

熊の話

語り手 米沢重三 (M26生)

むかし、コタンの部落に八木嘉太郎というおやじさんがいた。春のニシン場が過ぎると家のまわりの畑を開墾したり、山仕事をしたりして暮らしてました。 ある年の春、浜から2*もはなれていない御用所の沢で八木さんは大きな熊にひよつこり出会つてしまつた。あまり突然の出会いにびっくり驚天、そしてカカシのように棒立ちになつてしまつた。からだは動かぬが心の中は「どうか神様、私をお助け下さい。お願いします。」と一心こめて祈願してました。気が付いてみると熊は何事もなかつたかのように山奥の方に立ち去つて行きました。熊の後姿が見えなくなるまでじつと立ちつづけて「あー、私は助かつたのだ」と心から喜びました。これはきつと私の願いを神様がお聞きとどけ下さつたに違いないと深く深く神に感謝しました。 その後、数日して八木のおやじさんはそこに小さな祠を建て、山の神をお祭りしました。毎年の春のその日には八木さん一家はこの祠のお祭りをつづけています。昭和三十年頃、八木さんは古潭部落を去つたので、今はその祠だけが残つています。(文責・鈴木)



文献に現われた厚田村

IX

藤村久和 解説

北海道の開発を進めるにあたって、基礎的資料を残してくれた松浦竹四郎は、江戸時代末期に半年から一年にわたる長期の調査を六回も行っている。そのうち、厚田村を調査したのは三回である。第一回弘化三年（一八四六年）第二回安政三年（一八五六年）第三回安政五年（一八五八年）

第一回目の記録については、すでに紹介したので（弁財船No.27号参照）今回は第三回目の記録を掲載することにした。安政五年（一九五八年）は武四郎にとって、最後の蝦夷地探検であり、期間も二百五十日という長い旅であった。この探検の目的は実用的な地図の作成にあつた。これは、時の箱館奉行村垣淡路守範正から前年の安政四年十二月依頼を受けていたのであつた。

調査に出発したのは翌年正月二日であつた。噴火湾を北上し、洞爺・尻利川・喜茂別川を越えて石狩川に達し、川上へと遡上して十勝に出て、川筋を下って大津から海岸沿いに釧路へと足を運んだ。休む間もなく、阿寒川を登り、網走・斜里から帰路には釧路川を下り、釧路から太平洋岸・オホーツク海岸・日本海岸を廻り、石狩から苫小牧にぬけ、太平洋を東進して、十勝の大津に着き、そこから八月二十一日、箱館へと引き返したのであつた。

この調査記録は、『戊午蝦夷山川取調日記』と題する六一巻にまとめられ、二十八枚に拡大された『東西蝦夷山川地理取調図』が完成された。それは、安政六年、武

四郎が四十二歳の時であつた。六回にわたる武四郎の蝦夷地調査の記録は百十四冊にのぼり、安政六年から編成されて、二十二冊にまとめられた。

厚田村に関する部分は、元治元年（一八六四年）の十一月に脱稿した『西蝦夷日記』の第五編、アツタ領にまとめられている。その調査目的は、アツタの地理の他に安政四年（一八五七年）に開削されたゴキビル山道の良悪を確かめることであつた。それは第五編の凡例の第一項に「小樽内（小樽）なる錢箱より初寒（発寒）、札幌（札幌）を越て千歳に到り、勇払（苫小牧）に到る新道を、去る丁巳（安政四年）の秋、飯田某と謀て開きしを今（安政五年）再度実験し言々」とあることによつて知ることが出来る。

さきに、述べたように、再編成された日誌であるため、内容も三回の探検分をまとめていようであるが大半は安政五年の調査記録を中心に編まれている。

なお、松浦武四郎は超人的体力で全道をくまなく調査したのではあつたが、アイヌ語に通じていないうえ、海岸を除く奥地の地理については、浜の住人から聞き取っているため、アイヌ語の訳や地形については、あまりに疑問点が多すぎる。それで、ここに掲載した原文についてはそのままとしておいて、改めて、『弁財船』8・9・10・26・27号の『厚田村の地名調べ』で説明したやり方で、今回の原文のあやまりを訂正していききたいと考えている。

原文

石狩領 シュヒヨ（聚富）・ヲタルナイ 境より四里八丁一間。鮭漁屋あり。此所を以て境とす。

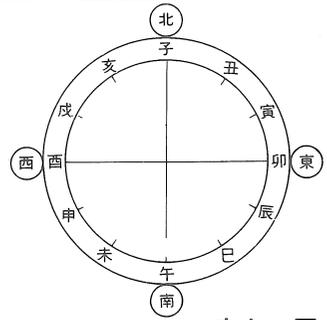
アツタ領

アツタ（厚田）訳して、楡皮取という儀にて、此川楡皮多きが故になすけしなり。今、其川の名をアル川に当て彼をアツタベツとするは誤りなり。アル川は彼川にして、其名儀、次に記す如し。昔しこの運上屋、アツタに有りしが故場所の惣名となせども、今の運上屋の地は本名ヲシヨロコツ（押琴）と言ところなり。其訳、懐の地と言。この湾の好きよりなすけしと言。また一説、義経公この地に來り。鯨が流れしを逢の串に刺、焼給ひしが、其串折れて落しや、公驚きて尻を突き給ひしよりなすけしとも言。

境目シュツプ（聚富）を入る。鮭番屋・茅葺・板葺・弁天（社あり）。この名儀は川上に箱の如き山ある依てなすけると。素浜通り中浜（聚富中浜）番屋一、芽くら二（あり）。是シュツプ（聚富）とシリアツカリ（白津狩）の間の浜故ならず。九町四十五間。シリアツカリ本名シラントカリ。川あり。巾十余間、遅流にて水わろし。名儀石のなきところといふ儀。是より岩崩下を行く。モイ（通称ワン・湾のこと）名儀箕の如き儀。フラトマリ崖、此辺昆布・海藻等

の腐爛したるが臭き故に此名あるよし。ここより種々の貝化石を出す。蛤・蜆・マテ（貝）また大なるは二升入徳利の物あり。実にあいらしきもの也。浜形亥子に向う。同じ崖下十七町四十間（で）ムライ（望来）鮭・鮮番屋あり。川巾十余間、橋あり。モウライ名儀風によつて閉た開き等する儀也。兩岸出稼多し。沢目上の上よく開け、上は雑木林なり。是より雪中石狩の土人はアソイワ（阿曾岩）岳の東を越て、トウベツ（当別）の点上に下り、樺戸山の麓を過、ツク（徳富）に出るに至て近きよし。もし新道を開かばこの海岸を切らず便利なるべし。

是より家つづき十四町五十五間（で）ヲネトマリ（嶺泊）本名ヲネトマフ、番屋有。名儀浪有時は寄木又海藻類にて川口を留る故ならず。その辺沖に暗礁多く船々其内に入る故宣し。ホロナイ（通称滝の沢）小浜なり。十三町五間（で）ウエンシレット（キマキの沢の岬）昔死骸が流れ来りし故ならず。また沖の暗礁にて時々船を過つ故ならず。人家つづき、ビイ、平磯、名儀、沖の岩上に立て秋味の来るをみて銚を突て捕る故ならずともビイは突事なり。十町七間（で）コタンベツ（古潭川）、小川、巾五・六間。昔しより夷家この所に有し故ならず。この辺、茶や、酒屋等できたり。川筋少し上り、二股。右をホンコタンベツ。左をチフタウシナイという。其上をシマンコタンベツと言よし。源アソイワ岳より来る。魚類・アメマス・チライ（イトウ）・ウグイ多し。



四方角の図

岩の下まで人家つづき、近年までは道もなかりしが今はよくできたり。石狩運上屋より二里二町二十間。

ヲシヨロクチ(押琴)運上屋一棟、板倉十二棟・勤番所・弁天社屋小屋・大工蔵・酒屋。

弁天社には稲荷を合殿に祭る。

地形西成向にして、後ろ平山、前は崖ち棚を結て其下暗礁多し。前船潤にして大船を容る。併てユウフツ・石狩出稼屋立並び、頗る繁華な地也。土人多し。文政壬午(一八二二年)改十九軒七十二人、安政乙卯(一八五五年)改九軒四十一人。年々和人の入込高一万人余もあるべし。土産、鮭・蛙、煎海

海鯨・其余推茸・ヒラメ・カスベ・雑魚沢山、別て当所、鮭の多き事、他場所の出稼といへるものは皆百石目に十石、生鮭ならば百石目に二十石と定り有しが当所は十二石を運上屋に納む。是漁事のよろしきしなり。一町四十五間(で)アラシユマ、崖下、昔シ

ラシユマと言土人住せしが故にな

ずく。併てへロカリス、平磯、鮭取の儀。この辺断崖を切り、そこそこに家居して漁す。又崖につづらおりの道をつけ等それより遙の上に背負上ば乾(場)もあり。江戸日本橋なる魚河岸は土一升到に金一升の地なるがこもそれ等の譬に比するところなるかな。四町三十間(で)シレエト、岩岬、併て七町三十二間(で)ニヨトマリ、崖下人家多し。昔し寄り木多ければならず。八町五十五間(で)ホンコンナイ、併てコタンナイ(小谷)、番屋・茅蔵。昔し土人どもこの沢に多く住せし故ならず。併てヤーマシラリ(通称、山下の沢)沖に岩有、昔しこの岩の上にて網を卸し鱈を取し故ならず。追々人家多く市町の如し。

みちねむる あつたの磯も夕風に

岩がぬゆるぎ 浪のよる見ゆ

十二町三十間でベツトカリ(別狩)、番屋・茅蔵、本名ベツタンバケと言。川の手前と言儀。是全く運上屋より言ことなり。三町五十間(で)アツタ(厚田)。川巾十四・五間、舟わたし。前に言如く、この川はアルにして。アツタ(厚田)は場所の惣名なり。アル訳してシヤク至て宜しと言儀。この草シユウキナとも言。所々にて名異なるなり。アツタの地は少し先なるところにて、昔しはアツツルシナイといふなり。この沢五・六町にして両岸広し。フクシヤタウシ(右股)、チライヲツ(同)フトシヤリウシナイ(同)。この

川口芦荻多しと依てなす。イヒシヨマアアラ(同)、キムンクシアアラ(同)。是より石狩のトウフツ(当別川)の源へ越ると、其本川シノマンアアラ(厚田川の本流)の源はトウフツ(当別川)の源のアアラマホントウベツと言に互合す。其名儀は此アアラへ越るトウフツ(当別)の言儀なりと。源惣て青木山にして、川筋サケ・アメマス・チライ(イトウ)・ウグイ多し。乙名シリカト申口。人家つづきまで併てシユマガタ併てポンピラ、小石浜、上にピラ(崖)あり。十四町二十五間(で)ポロナイ(幌内川)併てポンチャラセ(滝)ツルユサン(小沢)名儀山より下る道といふ儀。併てアツツルシナイ、小沢上に沼あり。土人等昔しよりニレ皮をひたし置故になす。土人の言に、アツタの名このところにあると。

九町五十五間(で)トモンベツ小川、訳して、風が平へ打当て、それが帰るといふ事の由なり。この沢より虎斑竹を出す。その分アヤモヨウ)シヤコタン竹には及ばざれども、あいらしきものなり。人家(あって)、リイピラ高平の儀、四町十四間(で)ヤソスケ(安瀬)、本名ヨシヨシケ小沢、名儀、昔し小き網をここに懸しと言儀なり。運上屋より二里十八町、番屋・茅蔵あり。是迄は陸路よろし。このところより海岸道なし。さて、今般新道の命あり。去辰(安政三年一八五六年)の冬より、此頃(安政四年一八五七年)六月二日迄に切開きに成りし由にて、鎮将(利熙、箱館奉行)君、通

行し給ふに附従て出立しけるや、掌を立つ如き九折に道切附、いまだ土のすべり落ちるを(五・六町)山の腹通り行。沢に入。木立原しばにして(七・八町)チカフチヤラツナイ、谷川、この未流滝に成おつる。こまで沢に入る。両山奇岩怪石簇々として変るべき景地有るや、其川中まで涉り上る。七・八町(で)二股、右股本川、左ルベシベ。是より左股に入。笹生繁りて雑樹陰森たり。五・六町(で)ますます山峻しく成たり。又、左りの空沢を上りて四・五町(で)峠、のぼり来て

まづ風待と 誰もみな 柏の下の枝 えだ扇にして、このところ眺望よろし。後ろは惣て山に隠るれども向はコガネ山(浜益村の黄金山)よりシヨカンベツ岳増毛町の暑寒別岳)まで一目に見え、風景よろしき事なり。是より五・六町、笹原を下り、楓等の木立山の後の嶮たるところ、木の根に足距かけ二十余町、暫時にコキビル(濃昼)川の南に出たる。実に其嶮なかな筆の及ぶところにあらず。この切方にては幾年を過るとも馬足覚束なく覚ゆ。

さて、海岸を行ば、人家つづき、十町五十間(で)バセベケ、小沢、其名儀はこの沢が始りと言事のよしなり。是より船にて行ば、上は崖なり。三町四十二間(で)チカフセトシナイ、小滝、この川山道にて過る川なり。名儀は鷺の巣が有といふ儀。岬を廻り六町二十間チヤラセナイ、小滝、この下少の

砂浜、上は崖なり。崖樹枝を重てあたかも倪家赤壁の図の如し。其様実に妙なり。過てルユサン(通称ルーラー)崩岸、往昔此岳より援に神が下りし路の跡があるといふ義なり。八町四十八間(で)フトシユマナイ(太島内)、大穴岩名義大なる穴有岩、依てなす。通りて崖伝ひ。二十四町五十間(で)ゴキビル(濃昼)。出稼有、川有、巾五・六間、小舟渡し。名義。水渦巻といへる事なり。シリカト申口。また、ホキンビリにて、即ち、陰のまた陰といふ儀なりと。この辺岬の陰なる故になすけるか、此所、この岬とアツタ嶺の岬の間にて水の渦巻が故になすくとかや。この川を以て境目とす。石狩境目より六里十五町二十五間。また、ヤソツケ(安瀬)切口より海上は一里二町。陸路は二里二十四町になると、シリカト申口。昔は境目をビシャンベツ(浜益村昆沙別)にて取りしがアツタ(厚田村)は土人が少き故コキビル迄の所を浜益へ呉遣したりと言。ゴキビル川筋少し上り、ヲクリキヤマナイ(右川)上にて二股になり、シヨウシゴキビル(右股)是滝に成て落、左り、ホロコキビルといへるよし。其源、コキビル岳より来ると。鱈・アメマス・ウグイ等多し。

ハマシケ嶺 赤岩岬、大岩(で)フレシユマエンルンといふ。この岬、コキビル岬と対して湾をなす。このところ新道切口あり。(中略) コキビルの山道は切方甚だ粗なれどもこの方の山道は頗るよく切始めたり。

美潭神社

一山の神さん一

古潭の東部落、古潭川上流約3キロの地点に美潭神社がある。いつの頃に建てられたものか、部落の人は「山の神さん」と呼んでいる。初めは古潭川の右岸の山の中腹に建てられていたが、その参道が余り急勾配で、上り下りに危険を感じる程なので、昭和43年、麓に社殿を下して改築した。

古潭東部落の戸数は明治30年代が最も多く、42戸（宮崎）。明治40年代は36戸（齊藤）。昭和の初年代は18戸と次第に減少し、昭和40年代は8戸となり、水田中心の農家となった。それ以前は畑作中心で炭焼き・杣夫・養蚕など兼業副業いろいろであった。

その頃、現在の「山の神社」

の川向いに大人4人かかえ位の楡など兼業大樹があった。この樹は根元が大きな空洞になっていて、その皮の厚さは5・6センチ位しかなく、その内側にちようど女人の乳房の形をした2つのコブが出ていた。そこで誰いともなく「乳房観音」と称し、靈驗あらたかだ。というので、お産後母乳の出ない婦人が願がけにお参りに来た。持参して来たお米をお供いし、それをまた、その湧き清水と共にいただいたり帰り、お粥（かゆ）にして食べると母乳が出たという。これが評判になって、オシヨロ・タカシマあたりからも信者が来た。今でもオートリネツプの信者が寄進して幟旗がある。盛りの頃は信者の寄進した幟旗が数百枚もあって、年に一度の秋のお祭りにも幟りて全部たてることができなく、そのまま社殿の片隅に積み重ねておいたり、終戦の前後、物資不足でみんながこまっつ頃、古い幟を持ち出して田んぼの家山子に着せたこともあった位だ。

むかし（明治36年、日照りがつづいて凶作が集配されたので村人たちはここに集って雨乞いをした。中の一人が酒の上の仕草とはい

え、乳房観音の御神体としていた石を、すぐそばを流れていた川の中に投げ込んでしまっていた。翌日から雨が降り出して20日間もつづいた。さきに日照りに悩まされた部落民は、今度は反対に雨に悩まされた。そこでまた川の中から石を拾い上げて元のところに戻した。不思議なことに雨は止んだ。そしてその後神石を山の上にある「山の神」神社に移すともなく、長く降りつづいた雨のために洪水となり、乳房観音の神木は山の神社の方に向って倒れた。山の神社の御神体はその石である。

また麓に移された新石は社殿の側には樹齡八十年を経たかと思われる直経三十七センチ程の黒松の大樹が二本、夫婦のように並んで繁っている。

これはその昔、井尻静藏という鯉場の親方が南部（岩手県）から黒松の種子を持って来て、苗木に育て、ここに移植植えたものだ。道内でもちよつと珍らしい立派な松である。

佐々木富太郎（明十八生）
宮崎喜一（明三九生）
齊藤慶司（文責・鈴木藤吉）

にしん漁メモ日記帳

（大正七年より）

厚田・藤枝甚三郎

氏は明治27年生まれ、今年八十八歳である。漁業一本の人生を歩いて来られた方である。

氏は兵隊の任期を無事終えてから漁業に従事し、その時からこの日記帳を書き初めた。これがその第一冊目である。小学生用のザラ紙綴りの薄いノートに鉛筆で手まめに書いてある。大正7年から大漁が15年間もつづいたがこのノ

トは13年分まで終っている。

これによると、当時の鯉場の親方の名前や建網の場所や、漁獲高も具体的にわかる。

第二冊目は現在どれほどさがしても見当たらないと云っておられるが惜しいことである。

第三冊目は昭和35年からで、現在もつづけておられる。

氏はなかなか手まめで、器用な

方で、浜辺に打ち寄せた木の根などを磨いて置き物を作ったり、色や形のよい石を磨いたり、庭先に大きな池を作って自然の鯉をはなしたりして生活を楽しんでおられる。

今度、厚田村に郷土館ができたから、にしん建網の模型をこしらいた小さな漁船もあしらって……。そこに寄贈したいと意気込んでおられる。

この他、トーフ・お菓子の製造過程とか、農家や杣夫などの記録もほしいものである。

（文責・鈴木藤吉）

— 広原政治郎氏招かる —

去る十一月十四日、それは秋晴れのよいお天気の日であった。道開拓記念館から差向けられた自動車に乗って厚田を出て、石狩・当別・江別を通過して開拓記念館に着いたのは正午であった。事務室に通されて挨拶した後、食堂に案内されて洋食をご馳走になった。

そこでのお話の中に「今日、ご案内申し上げたのは道内で三人、しかんのある方を選衡したので。古平の八反田さん、小樽祝津のにしん御殿の中村さん、厚田の広原さんです。不幸にも祝津の中村さんは三日前に突然亡くなりました。誠に残念ですが致し方ありません。誠に二人さんだけです。どうぞよろしくお願いします」ということ

北海道開拓記念館

特設「古老にきく漁労と生活」

にしん漁労展示会

どんな質問でもにしんのことだから、そこは昔とつた杵柄で、その解答はてきぱきと自分の掌を指すように適格だ。自信があるんだなあと感じた。広原さんの場合「古平は上場所（カミバシヨ）だからそうかも知れませんが、私の方の厚田では……でした」と誰はばかるところもなくピシッと自分のいいたいことを云うあたり、さすがと快心の笑みが湧いて来た。私は老齢の広原さんの世話役として側の椅子に居て、マイクの調整をしたり、質問の要旨がつかみにくかった場合、私がいち一度質問し直してやりたりしていた。

「広原さん、今日は大学の先生になっていてもいいんだよ」と心の持ち方を指示したり励ました甲斐があった。

した。選ばれた三人は厚田の広原さんの80歳が年長者で、いずれもお年寄りなので突然こんなこともあるのだろうかと考えながら、食事が済んでから会場に足を運んだ。会場には演壇の前に机が二つ並べてあり、マイクも用意されていた。一般会員は全道から集ったにしん漁業の研究者約五十名。

最初、開会の挨拶のあと、ムードづくりのため白黒映画のにしん漁業の往時の様子が三十分ほど上映された。

それが終って明るい電気のもとで開拓記念館の専門研究員山田さんと、矢島さんからいろいろと質問の矢が向けられた。

第一部・往時のにしん漁労法について（約一時間）

第二部・往時の漁民の生活について（約一時間）

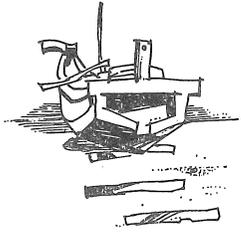
そのシンポジウムも二時間ほどで終り、実物が展示されている会場に案内された。そこでも古老を中心に「これは何だ。」「あれは何に使われたものか。」「それにいろいろの質問がなされたが、それに對しても、手まね足まね、実演で解答する姿は実に若々しく、生き生きとしていて、はなれてこれを見ていた私はひとり、えんていた次第です。

最後に、館長室でお茶をご馳走になった。時に午後四時半過ぎでした。「今日のシンポジウムの様子が今晩の五時十分のSTVのニュースに出る」ということでしたが、記念館さし廻しの自動車が出来ましたので時間の関係でニュースは見るのができませんでした。

（文責・鈴木藤吉）

厚田村 人物譚

鈴木藤吉



物件寄贈者御芳名

厚田	金子芳雨	古文書	他
厚田	八島サダ	指袋	他
厚田	相原ツマ	指袋	他
厚田	松江光雄	船旗	他
厚田	蘭ブ	ホヤ	他

はじめに
それまで、松前藩主に一任して
いた北海道の開拓を、明治になっ
てから開拓使を設けて国が本格的
に力を入れるようになった。

その頃の札幌は、開拓が始まっ
たばかりで人口も少く、乾いた広
い野原だった。同じその頃の厚田
の浜は明治以前からの鯨・鮭の千
石場所津軽・南部・秋田の若者た
ちや、白老のアイヌたちを雇い入
れ、その景気よきこと、活気が
溢れていたことなどが近隣町村に
ひびき渡り、自分も厚田の浜に行
って一儲けしようとして来た。
仲買業者・石屋・大工・糶子屋・
まんじゅう屋・豆腐屋・雜貨屋・
酒屋、はては賭博師・女郎まで数
知れず、その中で肩で風を切って
町中を歩いていたのは漁師の親方
連中だった。そこには色々な人間
模様織りなされた。

可愛いピリカ（アイヌの娘の
称）が仲買人にだまされて気がお
かしくなり、毎日公衆井戸の側で
かなしい歌を唄っていた。また、
がの字（女郎のこと）を受け出し
て妻にした親方も多かった。
何しろ、春の鯨漁時期は火事場
のように夜も昼もなく立ち働くが
鯨漁が一応片付いて、六月十日の
村のお祭りが盛大に行われると、
その後は生活ががらりと変わると、
トバク・花札・ホー引きがはやり、
草競馬や興行ものが開かれればい
つも大入満員、豊漁の年など大阪
相撲を呼んで、朝から御馳走を入

れた重箱、または鍋ごと持参して
一日中楽しんだ。

村人は春の漁期以外は余暇的生
活を送っていた。手はかえし余暇を
毎日針を動かかし、女はかえし足
袋を自作したり、チャンチャンコや
さしこをこしらえたりしていた。

また、講談本が次々と家から家
に借りられて廻り、面白い本が読
まれた。青年たちは朝から道路で
もキヤッチボールをやったり、応
援団をくり出して隣村の浜益や石
狩に野球（硬球）の対抗試合に行
ったり、青年芝居の練習をつづけ
たり、寺に集って俳句、和歌の会
を開いたり、この小さな村に色々
の華が咲いていた。

◎中居米吉

氏は慶応元年八月津軽に生まれ
た。父喜代吉は早くから本道に渡
って厚田で鯨漁業に従事していた。
米吉は五歳の時初めて厚田に迎え
られ順調に成人して、明治二十三
年父の死亡によって①の家業を継
いだ。氏は数十万の大資を掌にし
て能くこれを治め、更には漁業の
外に商業部を創め、両々相俟って
益々家産を増すようになった。

氏の資性は極めて濃厚で、石狩
厚田・浜益三郡の与望は氏の一身
に集り、明治三十七年八月の道議
会第二期の選挙には競争相手方が辞
退したため、する／＼と当選した
ほどの君子であった。その他、村
総代人・村会議員、漁業組合頭取・
水産組合長・学務委員、日本帝國
水産救済会地方委員、大日本赤十
字終身社員、日本体育徳会北海道
尚武会々員、日本体育徳会会員など
数多くの公職をもつて活躍した。

◎佐藤松太郎

彼の愛称はホテイさん、八九のホ
テイさんといえは誰知らぬ者はな
かった。七福神の布袋和尚のよう
にでっぷりと肥っていたからであ
ろう。四十五貫の巨体で用便にも

ひとりでは用が足りず、手が届か
ないので必ず尻拭きの人を必要と
した。余り重かしたので乗った人
力車がつぶれてしまったとか、戸
外に出る時は常に四人担ぎの担架
で移動していた。

彼が漁業家としての最初の出発
は、函館から来た和田の老人（寛
五郎の父）と佐藤長左エ門（松太
郎の父）の共同で、安瀬に鯨漁場
を建てたが、その年も不漁であつ
た。打ち続く不漁に和田は手を引
いた。その翌年、当時船頭であつ
た若い松太郎がひとりで鯨漁場を
建てた。ところが松太郎は不漁の
糸口であつた。それから連年大漁
がつづいた。

和田の屋号が疍（カネマル）であ
つたが、その和田の漁場から「カ
ネ」を起してへ（ヤマ）にし、八九
（ヤママル）とした。以後佐藤松
太郎となったが、村人は今まで
呼び馴れていた「和田屋の松太郎」
即ち「ワタヤの松太郎」とも呼ん
でいた。

彼は文字の書けない人であつた。
したがって読めない人であつた。
その反面、記憶力の非常に達者な
人で、或る時、賄部から「飯米が
足りなくなつたので購入してはほ
し」との申出に対し「倉庫の左の
隅にまだ〇俵ある筈だ」とか、船
頭がロープの不足を訴えたと「何
番の倉庫を探せ」と係りの帳場さ
んより先に指示を与え、しかもみ
んな正確だった。また、雇われた若
者は到着すると親方のところに挨拶
に行く。夕方た一度の挨拶に
伺った若者が労働がつらくて或る
日逃亡した。その若者を三年後に
石狩の町で見つけて連れ戻した。
平日の彼は囲炉ばたで新聞をき
きながら鼻いびきを立てて居眠り
をしていた。あまりよく眠ってい

るので読むのを止めると「お、
それから……」と続けて読むよう
に促した。また、商店に関係のあ
るような数字のところに「き」とい
びきで止んで「お、そこ行くとい
度」と、本当に眠っているのかど
うか家人にもわからなかった。

ところが漁期ともなると、担架
で運ばれて浜に出、サシコ姿で荒
むしろの上にあらながらかき、寒い
ので鼻水をたらしながらの陣頭指
揮、連日の徹宵にも少しも疲れを
見せなかった。

にしんがとれたとなると浜は火
事場のようになり人の動きはげしく
なる。握り飯を噛み噛み沖に出た
り、わずかの休み時間も与えられ
ない。当時の盆踊りの歌に次のよ
うなのがある。

「鬼のマルゲイ

間情（エンマ）のワタヤ
労働のきびしさが若者たちの心
にしみこんでいたのであろう。閻魔
様のワタヤの前ではどんな若者で
も嘘もかくしも出来なかつた。
このようにして彼はその業に励
んだので一度も不漁にあわず、他
が薄漁をばやいていても倉の漁場
は連年豊漁を博し、その資産は彼
の肥満の巨体と共に増大していっ
た。村人はワタヤを漁の神様だと
言うようになった。

明治三十七年日露戦争当時彼は
満四十一歳、彼の持ち船、七・八
万円で購入した英國製の中古船を十
年間も使つてから、旅順港閉鎖に
使用するため二百万円で購入した
第一厚田丸・第二厚田丸・正吉
丸と彼の持ち船は十一艘にも及ん
だ。彼の勢力は漁業・海運とも益
々増大し、石狩川口からゴキビル
まで漁場の数は九十九カ統にも及
んだが、その大部分は彼のもので
あつた。

彼は毎年十二月二十五日には石狩の鮭漁場を切り揚げて厚田に帰宅した。その日がどんなに烈しい吹雪の日でも、馬も通らぬ深雪道でも毛布にくるまって橇に乗り、十数人の漁夫に引かせて必ず帰って来た。石狩から厚田にかけて他人の土を踏まなくともよかつたほど厚田沿岸は殆んど允のものとなっていた。隣村の浜益にも允の漁場があり、更には樺太にも漁場を求めて落札し、名実共に大漁業家となり、道内はもろろん、全国屈指の高額納税者の列に加つた。彼はまた、壮大華麗とも云える母堂の隠居屋を新築したり、厚田尋常高等小学校を改築するに当つても、電燈を厚田の地に引くに当つても氏の力によるところ甚大である。

大正七年、流行性感冒にかかり東京から呼び寄せた名医の手当も空しく、小樽の別邸で、病床について二週間目十一月二十五日、一言もこの世に残すことなく他界した。時まさに五十六歳。
「松樹院殿大雲良栄大居士」

◎浅見仙作

彼は明治元年越後の北蒲原郡安田村に生まれ、八歳にして寺小屋式の学校に通学した。十二歳の時村医師兼先生を助けて五十名の児童を教えた。そして自分は夜分生宅に行つて、論語、や、中庸を教わつた。

二十四歳の時、青雲を抱いて北海道に渡り、札幌の或る家にわらじを脱いで、そこで奉公すること二年余、二十六歳の春、茨戸に五万坪の地を得て開墾に従事した。五カ年後の三十歳の年には一躍五十町歩余の墾成地の所有者となり篠路村惣代・学務委員・北海道農会篠路支会長・茨戸太郎便局長等

の公職に就き、同郷人を多数誘致して、順風航路であつた。たまたま不運にも、明治三十一年九月、石狩川の大氾濫に会い、丸裸となり、自殺もし兼ねない状態となつた。
彼は色々模索し、明治三十六年四月キリスト教国視察のため渡米した。明治四十年米國より帰国し内村鑑三に師事した。

同信の市川春松は数頭の牛を購入し、春別(シュンベツ)に百万坪の地を得て牧場とする計画があつた。彼は帰國後身軽であつたのでそこに移つて開墾にとりか、つた。

同志たちも次々と集つて、聖會を持つ家は十四戸となり、各戸輪番制として週に一回の会合に集る者三十名ほどとなり、また、三十四、五名の日曜学校の生徒もあつて阿曾岩山麓に讃美歌の音が高らかにひびいた。彼はこゝをシオンの丘と呼んでいた。
大正六年、石狩の帝國製菓会社の設立にたづさわり、工場主任として七年間在職、その後、会社を退き、除虫菊の作付奨励に奔走した際、たままた夜道をして大怪我をし右脛を骨折した。全快した後も丘地の農業に耐えず、心ならずも大正十四年札幌に転居して浴場を経営した。

このように業種は転々と変わつても、内村先生の「聖書の研究」の読者会とか福音の伝道は倦むことなく続けられた。なお、昭和六年より「喜のおとづれ」を毎月発刊した。ところが時勢は軍国主義に傾き満州事変より日支事変に移りひいては大東亜戦争へと発展した。昭和十八年、思想犯として監禁七ヶ月間、昭和十九年、札幌地方裁判所にて、治安維持法違反で三年の懲役を言渡さる。昭和二十年六月十二日、大審院に上告の結果

無罪の判決。以後、昭和二十七年、琴似町にて八十四歳で召天するまで、札幌刑務所大通拘留支所に於て死刑囚に伝道をつづけていた。
彼は無教会主義者であつたので春別には彼の足跡は残っていないが、彼等の住居跡あたり一帯を、法学校の沢」と今でも呼んでいる。

◎戸田城聖

今を時めく創価学会の第二代会長戸田城聖は本名を甚一と云い、幼にして渡道し、厚田尋常高等小学校に学び、卒業後札幌に出、戸田城外と号し、印刷出版社を経営し上京して牧口常三郎に共鳴した。戦時中二人とも投獄されて、牧口会長は亡くなり、彼は獄中にて日蓮正宗の悟りを開く。現在は第三代会長戸田大作の時代に入り、国内外にも多数の信者を擁し、燎原の火の如くその発展振りは実に世界的である。

◎子母沢寛

時代小説家として、大御所的存在であつた子母沢寛は幼名を梅谷松太郎と云い、明治維新の函館五稜郭戦争の落武者梅谷十次郎の長男として厚田村役場の戸籍簿には記されてあるが必ずしもその通りではない。厚田の豊(カクテツ)という道立座敷を営む家に生まれた彼は、眞正美術館に自分の納を全部寄贈した洋画家三岸好太郎の異父兄弟である。
彼は小学校を厚田で学び、中学校は函館・小樽・札幌と転じた。夏休みには帰省中たまたま学校火災に会いそのまゝ、転校北の海が二度も重つた。札幌の北海中学校を卒業後釧路新聞社に入社した。晩年は神奈川の藤沢で執筆をつづけ昭和四十三年夏七十七歳で亡くなつた。

彼の作品には「厚田日記」とか「南に向いた丘」とか「ある人物の物語」とかを舞台とした厚田もの、祖父十次郎を主人公にしたと思われしものなどが数々ある。「新撰組始末記」とか「親子鷹」とか「勝海舟」とか時代ものが多し。中でも長編小説「勝海舟」は本年正月よりNHKのドラマとして一ヶ年間連載される。

◎河合裸石

河合裸石は本名を河合七郎と云つた。明治三十八年三月から八年間厚田尋常高等小学校の教員として勤務したが、山野を跋涉することが好きで暇を見ては道内各地を廻り歩いた。それが彼の文才と相俟つて、「ルーラン」、「熊の嘯き」、「蝦夷地は歌う」の単行本となつて発行された。
大正初年頃、北海道新聞社の前身北正タイムスに入社した。その後、社会部長となり、スキーの裸石としても有名であつた。

◎池田潤之輔

彼は安瀬村の(カネマンシメ)という漁場の親方の家に生まれ、厚田小学校安瀬分校に学び、小学校六年の時、本校に転校し、高等科へと進んだ。
はじめ帯広の製糖工場に働き、そこから紹介されて上京し、相撲界に入り、北糖山と呼んだ。その後、盲腸手術の吉葉博士の名をとつて吉葉山と改命。戦時中召集されて北支に在ること六年。帰國後再び四股を踏むべきかどうかと迷つたが高峰親方の勧めによつて再び土俵の人となり、遂に第四十三代横綱となつた。
隠退してからは検査役をつとめ現在は相撲協会の理事となり、また宮城野親方として後進の育成に精進中である。

彼の作品には「厚田日記」とか「南に向いた丘」とか「ある人物の物語」とかを舞台とした厚田もの、祖父十次郎を主人公にしたと思われしものなどが数々ある。「新撰組始末記」とか「親子鷹」とか「勝海舟」とか時代ものが多し。中でも長編小説「勝海舟」は本年正月よりNHKのドラマとして一ヶ年間連載される。

あとがき

例えは、樺戸監獄を脱獄し、山越えて逃げて来た五人の囚人を厚田神社裏で無血自首させ、その後、村人の要請によつて剣道指南道場の主となつた牧田重勝。
長い間、古潭小学校校長を勤めた漢学者の風貌をした白鬚三千丈の日高観先生。
士族から養子に来て、厚田村の初代村長に就任し、長い間、本村の発展に尽力した福徳円満な内山良時。

発足の山奥に住み、熊とりの名人と云われ、ある時は身に二十カ所も傷を受けながら熊と格闘した桂井栄助。
正利冠に住みながら、琴似の農事試験場と連絡をとりながら、試験田や研究室をもち、稲作の研究に余念のなかつた西木仁作。
山林の経営にその一生を傾けた発足の渡舟場の小笠原竜市。
安政年間から明治初年にかけて厚田の開拓に尽力し、駅通の呼称が今でも通用している片眼の佐藤弁藏。
古潭三面山電沢寺を開基し、寺小屋を開き、郷社八幡神社社掌となり、厚田外六ヶ村社々司を兼ねた藤原恭能。
明治二十四年創設された厚田病院に明治三十五年院長となつて赴任し、仁徳をもつて、さながら、村の顧問役然として、大正十五年厚田乗合自動車会社を創設、昭和二年厚田託児所開設、三吉山麓に牧場を経営したり竹本和太郎。まだまだ数多くの人々をあげることが出来る。
今後このような資料を集めたい。ご協力をお願いしたい。

船 賤 舟

NO.29
昭和51年
3月10日

＝ 発行 ＝ 北海道厚田村

箱館戦争の敗残者

牧田重勝と『直心館』

明治の半ば頃、厚田に剣道の道場が開かれていたということについて村史の中で大部分ふれているが、その後新しいことがらが入手できたので再び整理しながらまとめてみる。

この剣道場は『直心館』、主は牧田重勝。そもそも牧田重勝という人物を知ったのは古老の話からであり、再三、その古老を訪れさせることになったのは、故子母沢寛氏の短編『或る人の物語』が月刊誌に発表されて、それを読んでからである。

私達が、今から十年前、村史編さんの下調べのため函館図書館をたずねたおり、岡田館長(当時)が、「子母沢さんも、しょっちゅう函館においでになりましたよ」と話して下さいました。

子母沢文学は、足で書かれた。ご自分もそう言っておられた。

子母沢文学のオリジナルな面として、その聞き書形式があげられている。この函館参りも古老や遺蹟探訪のスケジュールだったにちがいない。

子母沢氏が何故『或る人の物語』を書きかけをつかんだかは明らかでないが、子母沢氏の祖父梅谷十次郎も、牧田重勝とは同時代、同様の運命をたどって厚田にいたこと、子母沢氏もこの道場に通っていた(義妹塚本ミサ談)ということなどから祖父のあぐらの中で聞いた、老人たちの江戸のおもいでや、さまざまな話が、まさによみがえったものといえる。

この作品中の主人公、三宅太郎次とそのモデル牧田重勝についてのつながりの決定は、牧田重勝の長女サク(当別町青山、佐藤サク)さんの話と厚田神社前にあった道場『直心館』前で写した家族写真であった。

牧田重勝は、望来の大熊出現の際も出勤しているし、明治三十年には厚田消防組の組頭として活躍した記録もある。

また、子母沢寛文学碑建立のおりにもなにかと尽力いただいた栗加大介氏(札幌市、作家)がたびたび厚田を訪れ、氏が連載中の「三宅太郎次」(月刊北海道)についての資料収集をしておられているうちに一枚の写真を入手されそれをみせていただいた。

大正二年五月札幌で撮ったものということで、中央に永倉新八、そしてその隣りに牧田重勝他合計六人の人物が写っている。

永倉新八 いえば、松前藩士の永倉家に生れ、真刀無念流の達人で、新選組の二番隊長として京の都にその名をとどろかせた人である。維新後彼は明治十五年から十八年まで、樺戸監守らに剣道指南をしてゐる。牧田重勝も当時監守であり、この後交友を温める意味で集まりがもたれ、一枚の写真となったと考えられる。次に子母沢氏の「或る物語」を要約しながら牧田重勝の人物についてまとめてみる。



「或る人の物語」三宅太郎次のモデル、牧田重勝

太郎次は越後高田藩の江戸上屋敷で藩公の小姓役として奉公していた。十五万石榊原式部大輔の一字をもじって結成された神木隊に参加するため、上野の山に馳せ参じた太郎次は十五才であった。父も叔父も家系のために太郎次一人ぐらい残しておきたかったが、本人の意志によって無理に同志に加わったのである。

戦いは幕軍に利あらず遂に敗走の憂き目を見たのである。そして回天・蟠竜・高雄の三艦に分乗して箱館に向った。南部の宮古湾で官艦八隻を接船奇襲攻撃で奪取しようとして失敗、降伏。常安寺が仮牢に当てら

れ手厚い待遇を受けたが、ここから逃亡。ただ一人旅姿や商人姿で伯楽(ばくろう)の船で箱館に着いた時は五稜郭戦争も終って、総裁榎本武揚ら一行は江戸へ護送中であった。

十二・三才の頃から江戸の一流剣師村越三造についてみっちり習った腕前も買われたのであろう彼は明治十四年開設の樺戸集治監の監守として赴任した。同僚の監守間にも信頼があったし、囚徒たちも彼の剣道の腕前が抜群であることを認めていたためであらう、彼の前では至極おとなしく従順で

あった。しかし、彼は只一点気にくわぬことがあった。それは樺戸

集治監が大正八年廃監になるまで三十九年間に五度もその名称が変更されたことでもわかるように、内務省・道庁・拓務省・司法省と所管が変ることに集治監・監獄署・懲治監・監獄とかえられた。それは止むを得ないこととは言い乍ら集めて治めるといふ人間的取扱いから、囚徒は悪人である、悪いことをしたからその分だけ懲らしめてやる、と食糧も充分に与えず、朝早くから夜寝るまで地獄の責め苦にも似た重労働。牛馬のような扱いをする明治新政府官僚に対し、「云い知れない反感をいだいていた。明治十七年夏、三宅太郎次は三十一才。その頃はもう監守ではなかった。

厚田村安瀬の④(マルト)漁場のカンピさんになっていた。カン



「直心館」の看板がみえる家族写真

ビとはアイヌ語で、漁場の浜帳場という役職の名である。監獄署から五人組の脱監囚が一人の監守を斬殺して逃亡したという知らせが、厚田の警察署に入った。厚田の村中は大騒ぎとなった。消防団・青年団などが総動員された。五年前にも三人組の脱監囚騒動があった。樺戸と厚田は山が峰つづきになっているので逃げ易いのである。一人は厚田川流の川辺で餓死していた。残る二人は漁場に押し入ったが、村人に包囲されて、さんざんぶちのめされた。監守が月形から引き取りに来た時は一人はもう虫の息だったという。今はもう村人には忘れられているが、厚田小学校の東北の隅より少しはなれた所に小さな沢がある。この沢を銭分沢(ゼニワケザウ)と呼んだ。それは囚人たちがそこで、奪った金銭を分け合ったことから、付けられた名前である。

しかし、今度は五人組だ。揃って五人共村の中に潜入した。そして、浜岸の「大(カネダイ)漁場に押し込んで来たのである。漁期の終わった「大」漁場には使用人中最も信用のある釜石(カマイシ)と呼ばれる者と主人夫婦の三人し、ふかった。主人は、さんざんぶちのめされたあげく、金鎚で頭を叩き割られた。おかみさんは次々と強姦されて失神してしまった。倉庫の中の金銭はこっそりさらわれた。台所で充分に腹ごしらいをし、山のような脱糞までしてあった。文字通り糞度胸の座った連中である。わずかな隙をみて、天窓から抜け出した使用人の知らせによって、厚田から三キロほどはなれている安瀬④漁場のカンピさんに伝えられた。風邪を引いていた彼はその風邪をおして仕込杖を手に厚田に向った。自分は一言も自分の前身について他言していないのどうして村人たちが知っているのであるうと不思議に思い乍ら浜道を急いだ。厚田に着いてみれば厚田神社の高台の広場に、村人に囲まれた二人の囚人が居た。他の三人はすでに逃亡していた。村人を押し分けて前に出、その囚人共をならみつけてこう云った。

「お前たちは生き地獄を抜け出して、もっと悪い地獄に落ちやがった。もとを質せば貴様ら、箱館のドサクサ戦争の時、薩長の芋の手下で戦ったという二本差しの間だ。してみりゃ、腐っても侍のはしくれだ。どうだ。この俺の前でスパッと腹を切るか、それとも温和しく自首するか、どっちだ。」

囚人たちはつくづく彼の顔を

見つめていたが、急に力が抜けたように静かになり、遂には彼の縛につき、警察分署へ自首ということになった。

このことがあって以来、あの胸のすくような唖呵とその水際だったやりっぷりが村中の評判になった。そして村人の要請によって、厚田神社前の一軒屋を借り受け、剣道の道場とした。そしてその玄関には直心館(ジキンカン)の看板が掲げられた。村の青少年はもちろん、遠く石狩からも入門者があった。

母子沢寛氏の作品は、古き厚田の人々をひきあわせてくれる。この作品がなかったなら『直心館』という私達の古き遺産を失っていたかもしれない。

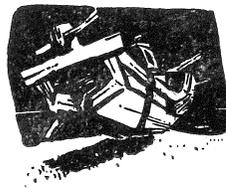
『直心館』あとは、家屋そのものは朽ち果てようと、私達の心の遺産として、確固として立っている。少なくとも、その心の証として木碑でも『牧田重勝、直心館 剣道場跡』と記したいと考えている。

▼厚田村に文学碑が一つ出来ればそれでいいのだろうかと考えた時、たびたび弁財船で厚田人物譚としてとりあげたごとく様々な人々のさまざまな活動の軌跡をふりかえり、歴史的な厚田生活史に欠かすことができない人物の顔が浮んでくる。

▼郷土の歴史にとりくむものとして、そうした人物を掘りおこし、公平で不変的な光りを与えたい。つたえることが使命だと考えている。歴史が単に過ぎ去った者の話でなく、現代によみがえり、私達村民の心にそれをふまえた心意気を期待するものである。

▼碑建立に際し、梅谷竜一氏始め御遺族からいただいた図書は現在教育委員会が管理されている図書(三千冊)のなかで母子沢寛文庫(一千二百冊)として貸出されたい。ちなみに貸出回転数は月平均六百冊で相当有効に利用されていると云えよう。

(鈴木藤吉)



資料解説

— 序文 —

現今、厚田に俳句をひねる人が何人いるだろう。また、詩とか、創作の活動グループが動いているだろうか。

ここに明治・大正期の、こうした活動の一端を示す資料がある。今から七・八十年前の明治三・四十年頃である。その頃は、なかなか盛んであったことが想像される。

これらは、当時、厚田がニシンにわたった、つまり多勢の若衆（ヤンシュウ）大漁祈願の祈禱師、神主や僧侶、それに行商の一隊または、旅行者気分の書家や絵師等、さまざまな人達が入りこんだ、にぎわいの生活のなから生れたグループ活動の証といえよう。

次に資料一、二、三として解説する。

◎資料一は、奉納額（奉納者厚田正風社、奉納先（及び所蔵）常照寺、正眼寺）二枚。どちらも明治四十一年四月のもの。

◎資料二は俳句集（鈴木健次郎氏蔵）明治四十年代から大正初期のものと考えられる。

◎資料三は、小学生文集「滄」（妹尾孝氏蔵）大正四年八月号。

資料一 奉納額

それは正眼寺と常照寺の本堂に掲げられている横額である。どちらも縦45センチ、横3メートルの大ききで、正眼寺の方は麻入り和紙で出来ており、常照寺の方は桂材の一枚板である。前者は蓮の花の墨絵のカット、後者は桜の大木と散る花びらが色彩豊かに画かれている。そしてどちらも明治四十年四月である。正眼寺の方は室谷照女追善の為、常照寺の方は武内大介追善の為となっており、追善の俳句が五十三句ずつ、墨痕あざやかに書きこまれてある。奉納

者（月瀬紀行・聴秋）

露城・正風社

通称瀬川正夫・露城とも俳禪窟と号した。明治四十年四月、加賀国粟津の無名庵に入り、十五世主となる。粟津正風社を興し芭蕉廟を修築した。昭和三年五月歿。年七十八才。

（俳句人名辞典・高木蒼梧著）

厚田正風社は厚田の俳句クラブの名前であるが、その内容においては全国的なつながりがあった。明治三十五年八月、石狩尚古社の亡会員十二名の追悼会が能量寺で行われた際、全国から集った俳句が約三千五百余、厚田の龍洞舎大道もその選者の一人になっている。この人の通称は未だ不明である。

尚ついでながらも一名説明させていただこう。
厚田神社の境内に明治二十四年建立の豊漁記念碑がある。その発起人は上野正。この人は北海道開拓使・記録局・勤業課・八等属・鹿兒島県士族。

樺太アイヌを対雁に引卒し、のちに石狩川口のライサツや厚田三場所（別狩番屋・中番屋・崎番屋）に定住させるなど、アイヌのために活躍した人である。

明治三十五年の尚古社寄附帖にも西史と号し、尚古社員となっている。

（石狩町俳句小史・前川道寛著）

わかり易 を一・二選んでみる

○友ひとりへりて淋しき 可保流
○在りし世のむかし語りや 魂（タマ）祭 器水

○新しき卒塔婆に降る 花の雨 紅石
喪主の句として 鐘も無常の 抱月

○桐一葉 声すなり 寄世
○夢の世や児の魂祭る 老夫婦 常照寺

○梅のみうめの主も 散しとは 弄山
○法の声添えてや鳴かん ほととぎす 石芝

○彼岸会やへちまの種のおろし時 露城

資料二 俳句帖

この、B5版の横綴じ帖は、鈴木健太郎さんが勝荘庵錦風先生からいただいた俳句帖だという。（弟にあたる健次郎氏談）

中には秀逸十五句・再考五句・感喟三・最後に選者の一句合計二十四句おさめられている。

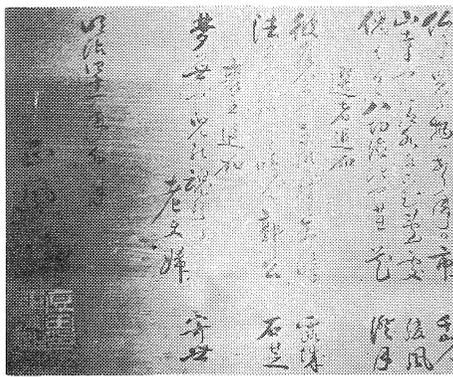
人員は十三名、名前ははっきりわかった者の中に石狩の人も数人おられる。坂牛町長（飄斎）、鈴木病院長（弦月）、桜湯の主人佐々木（遊水）。

宗匠の来石を期に、或は、宗匠をわざわざ招いて句会を開いた時の作品で、感喟之部の三名が優秀賞として宗匠の直筆になるこの句帖をいただいた由。

普段に厚田で行われていた句会は十名前後の同士が一堂に集り、主題を設定し、しばらく思考をめぐらした後、紙片に自作の俳句を書き出したためそれを張りならべ一人で二点ずつを互選し、その点数を集計して優良可に分ける。

○勝荘庵錦風 旧幕、お材木蔵同心平田喜政の三男、慶応二年（一八六六年）江戸本所に生まれる。幼名は金三助・金造・金治と改む。

明治十九年、勝峰仁保の



常照寺本堂にかかげられている横額（一部分）

名跡をつぐ。明治二十五年、岩内に移住す。明治三十四年、北海道俳句三大家勝峰錦風と北海道毎日新聞は報ず。大正五年、小樽色内町に転居。錦風は石狩尚古社の遷者である。

○紅露 (石狩町俳句小史・前川道寛著)

厚田村鈴木健太郎の雅号、明治三十四年生まれ。彼は大正年間から昭和の初期にわたって厚田青年団の中心の人物として活躍した人。冬期間には厚田処女会と協力して、手弁当持ち寄りで毎日練習

を重ね、村人の慰安に青年芝居を公開し、春先の雪どけ頃は神社通り商店街を始め、主要道路の除雪奉仕作業を毎年励行し、夏には、当時としては珍らしい硬球の野球チームを編成し、他町村に遠征したり、秋には句会を開くなど文化活動を精力的に押し進めた人。そして、数年間かかって、厚田青年会館の開設に努力した。惜しいことに、昭和四年十一月八日、樺太の東海岸の漁場で、海の事故で亡くなった。

●海荒れのつづきて船の 来ぬ頃の 帰らん心……断ちぬこれが辞世の歌となったのである。

資料三 「論」

なみ 八月号

これは大正四年の八月号である。厚田の妹尾孝さんが自宅の古い物の中から見出されたもので、手作りの文集、といったものである。

半紙を二つに折った大きさ(B5版)で、表紙は厚紙に画用紙を張りつけた丈夫なもの。水面の輪に、朝顔の花が水彩絵具で画かれており、八月号の三文字は一字一字ゴム版か芋版のようである。そして、右側の二ヶ所がリボンのような布で綴じてある。

中味は、図画・綴方・書方の三種類で、図画は二十六枚、水彩画・ペン画・鉛筆画・綴方は十六名、毛筆が多く、中にはペン書のものもある。論評もの——日章旗・朋友紀行文——小樽紀行・秋の雨その他——茶目公物語・一口話書方は四十一枚、楷書、行書、大字、細字など多種多様。

最初の頁には序文に相当するものと編集後記とが列記してある。編集後記には、

図画—毎号精巧となってきた。名前と学年を明記して下さい。

綴方—文も文字も上手です。

作文はむずかしいとみえて投書者が少ない。奮発を願います。

書方—中々上手になりました。今少し墨をこくすって書いて下さい。

など、ほゞ、えましい批評がのっている。そして、最後に、
支那先生は御病気で出札されています。我々はこの山里にて専一に早く御全快御帰厚あらんことを祈り上げませう。

編集員 横浜 健二 佐藤 昇 河合規矩二

と結んでいる。

作品はすべて尋常五年六年・高等一年二年で、この春卒業したのも二人ほど加わっている。しかし編輯員の三名はいずれも高等二年生である。そして回覧の日割であらう。一日(十二日)まで、一日分には三名の名前がならべてある。序文には夏休みも最早過ぎ、新しい二学期が来た。と記してあるので回覧の日は九月一日のことであろう。そして、さらに、
我愛する諸兄よ、此時大いに勉め励み給へ。天高く馬肥えるこの時、燈下に露深き草村に鳴く虫の音を聞きつゝ、書に親しむも又可なり……
来る九月号の論へ大いに投書し給へ
と大人顔 の、意気天を衝くの

気構えがうかがえて、ほのかに嬉しい感じが湧く。そして、どの漢字にも仮名が付けられていて、下級生への優しい思いやりが察しられる。

このように子供たちに慕われた支那貞助先生は河合禎石先生の後任として厚田小学校に赴任された方で、大正二十年十月から大正八年四月まで勤務されている。

支那先生の雅号は沈黙。子供たちまでが雅号を使っている。

八島茂雄—秋月 横浜健二—芳雪 佐藤 昇—緑泉

河合規矩二—緑陰 池垣一郎—湖舟

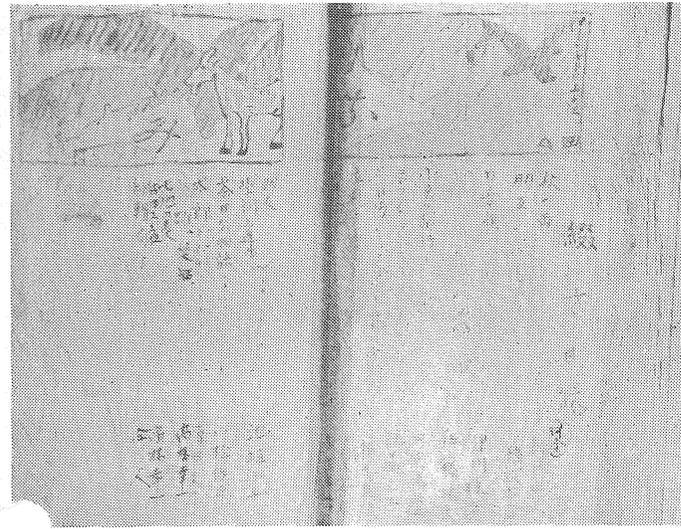
津川禎男—韶水 徳光徳蔵—紫水

山口要作—泉竹 篠田小次郎—走真

題名の論はなみと読み、さざなみの意である。今は小さな波でも子供たちが大きくなったら、何時までもさざなみでいる筈はない。その時には大波となって欲しい。という先生の願いが込められているように思われる。

先生が札幌の病院に入院されて厚田に居られなくとも、生徒自身の手でこのような活動がつづけられていたということは賞讃に値する。支那先生の子供たちに注がれた情熱と卓越した偉大な指導力を偲ぶと共に厚田の子供たちの真けんな姿をうかがうことのできる貴重な資料である。

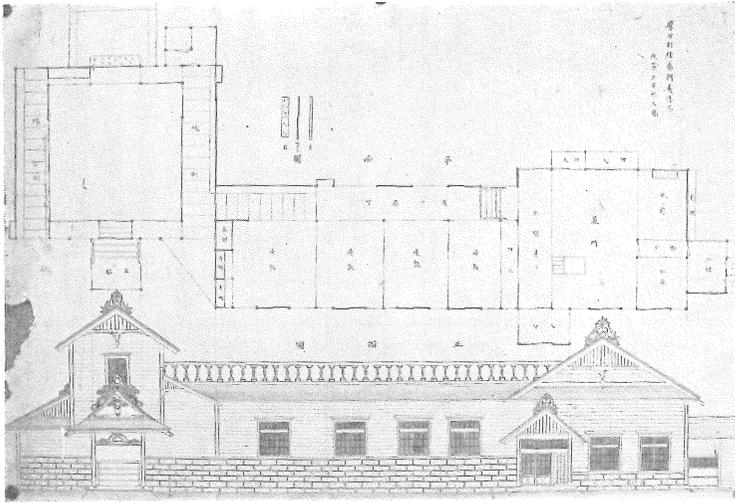
「論」の綴方の項の目次



船 賤 弁

No. 30
昭和52年
5月1日

発行 厚田村
編集 総務課



佐藤弁蔵隠宅「開茫有楽館」図面

『佐藤弁蔵君伝』について

駒通さんの古い家からたまたま「佐藤弁蔵君伝」を見付け、喜び勇んで、それを一気に読み通そうとしたが仲々堅くて歯が立たなかった。それは全部漢文で綴られており、その上漢語特有の美辞麗句や難解の熟語が多く、普通の日用辞典ではもの用に立たず、止むなく大漢和辞典全冊を使い分け、幾日もかかって、ひとつひとつ解明していった。

操 者

「○○君伝」だから自分で書いたものではなく、誰かが書いたものだということは想像できた。その巻末に、二人並べて書いてあった。

操觚者 志府河尚三郎
発企人 畠山清太郎

そこで早速、辞典のお世話になった。「操觚者」(そうこしや・文筆を業とする者)更に、この頃は発起人を「発企人」と書いたことなども珍らしいことだった。

なお「辞令蒐聚録」の方には「明治二十八年四月畠山清太郎氏の嘱に応じて蒐輯す。志府河尚三郎」とあったので、石狩水産組合長畠山清太郎に頼まれて、プロの書き役志府河尚三が書いた、ということがわかった。

出 達

先ず、開巻。本文はじめの方に「家系は赤穂藩士佐藤播磨守に出ず。」のところで目が止った。四十七士の赤穂と蝦夷地の厚田を結んで考えたからである。

「君は津軽温湯村の人、播磨守九葉の孫、与左衛門、弘前藩佐藤権太左衛門の長女を娶り、天保元年七月十四日君を生む、君すなわちその長男たり。」

これで、出生国や生年月日がわかった。更に、

「始め与五郎と称し、後ち弁蔵と改め尚光と号す。天資敏捷(りこうすばしい) 傀備(人にへつらわれない) 卓犖(才気に秀れてゐる)、長するに及んで壮志おさえる能わず、弱年二十有五にして、蝦夷箱館に航し、居ること二年にして後ち厚田に転住す。実に安政四年二月某の日也。」

名前・性格・転住して来た経過とその年月がわかった。安政四年頃は世の中が騒然としていて、安政の大獄事件や箱館開港の二年前国防のため蝦夷地を幕府の直轄とし、積丹以北に女人渡航の禁を解いたりした。当時の厚田村は蝦夷家9軒、えぞ人35人、和人初めて一戸を構えて越年。厚田場所請負人浜屋平田与三右エ門自費で濃屋山道を開削。この頃、厚田に転住したといっても淋しいものであったろう。幼少の頃、怪我のため片眼失明とのことで、厚田に来てからは、沖で魚をとるのではなく、読み書きが出来たから運上屋の帳場、いわゆるおおかはたらぎの方だったろう。「伝」には「此の時に当って、四隣閑寂、一眸暗々互寒膚を劈き、玄氷髪を結び、天低く、郷遠く、月黯く、海高く」と描写している。

斗いの毎日

それに対して「藜藿を食し、蓬茨を構え、毳褐を衣」粗食・粗住

粗衣で堪え忍び、天災人禍にも挫けずに頑張り通した。明治の維新になると漁場独占止の令が出され場所請負人に代って、開拓使の役人が厚田出張所に赴任して来た。そして戦後の農地開放で小作人がみんな地主になったように、漁場の開放を行った。それでみんな漁場持ちになった。

天保元年生まれは明治6年で数えて44歳「一村を代表して駅通及び通行取扱の囑托」を受け明治8年には正式に「七等郵便取扱」を命じられている。

寺 小 屋

「徠往漸開、雞犬相聞」と、ようやくややく部落らしくなってきたころ、先ず第一に手をつけたのは寺小屋であった。

「自聘教師」、使下近隣之子弟二就下学、而不下菅不ニ微月謝一耳上、剩付与ニ学習必要之器具一、一意如地奨励ニ其進歩一者云

何時の時代でも聡明な先覚者は子弟の教育に力を注ぐ。これは国家百年の大計であり、村の盛衰にかかわる重要な事柄である。自分で先生を呼んで来て、近所の子供たちを集め、月謝をとらないばかりか学用品を与えて学問を奨励した。

「北海道教育史」によれば、明治五年の学制発布以前に、厚田・古潭に一所ずつ寺子屋式の教育

所を設けていたという。すなわち佐藤弁蔵が自分の家を貸し、東京より佐藤健次郎、諏訪杞脩を招き厚田・古潭の寺子屋師匠として、一年交代に読み書きを教えたのが始まりだという。なお「開拓使事業報告」に「明治九年四月佐藤弁蔵自費ヲ以テ教員ヲ雇ヒ駅通所ニ於テ児童ヲ教授セシム。生徒増加ニ随ヒ民有家屋ヲ僦シ（銭を出してかりること）教育所ト称ス。」と。

明治十年以降の児童・教員数の変遷をあげるとの表のようである。

この美しい行いに対して、宮から賞状をいただいた。それは今、厚田小学校の校長室に掲げられている。

児童変遷				学 数				教 員			
年次	男	女	計	年次	男	女	計	年次	男	女	計
明治10	21	9	30	明治10	1	21	9	30	1	21	9
11	0	0	0	11	2	40	9	49	2	40	9
12	1	13	12	12	1	18	5	23	1	1	3
13	1	8	9	13	1	20	3	23	1	1	3
14	1	17	9	14	1	27	4	31	1	1	4
15	1	17	9	15	1	27	4	31	1	1	4

児童変遷				学 数				教 員			
年次	男	女	計	年次	男	女	計	年次	男	女	計
明治10	21	9	30	明治10	1	21	9	30	1	21	9
11	0	0	0	11	2	40	9	49	2	40	9
12	1	13	12	12	1	18	5	23	1	1	3
13	1	8	9	13	1	20	3	23	1	1	3
14	1	17	9	14	1	27	4	31	1	1	4
15	1	17	9	15	1	27	4	31	1	1	4

(注) 明治11年の○は厚田学校通学

社 会 奉 仕

この外、産業の振興にも尽力し年々街の姿もとのい公共の建物も次々と建てられていった。

「干三座座、干三役場、干三病院、干三神祠一、干三提提一、投下少者数十金、多者三百金上、至三卒先以呈三目下之現象一矣。」

学校に、役場に、病院に、神社に、寺院に、少くも数十金、多い時には「三、二百金」というから現今のお金と比較してどれ位になるだろう。それで宮からは公職に任命され、宗教関係の要職に推され戴いた木盃や慰労金や賞状など「殆垂三百回之多……」。実際の言葉通り、先般の厚田村百年祭の時「これでも随分少くなったんですよ。みんな近所のお子さんのままごと遊びに借したり、くれてやったりしたもんですから……。」と云い乍ら大行李の中からは出して下さった大小数十個の赤い木盃を展示したことがある。

なお珍らしいものとしては、「明治十四年五月金拾五円を厚田学校新築費に補助す。その賞として木盃壹個並に麻苧壹把を賜う、開拓使。」木盃と共に麻を一把いただいた等はすがすがしい気分がしてほほえましい。

その他、金銭でなく現物を寄附している。

「明治十九年窮民を救助し玄米

三斗を寄贈す。」

「明治二十五年札毛間電線架設に際し、電柱五本、人夫拾五人を寄附す。」

「明治28年、馬老頭を献す。」

更に道外にも愛の手をのぼし、「当県下震災被害者を救助し……。」と、愛知県知事・山形県知事からも賞状を受けている。

隠 宅 開 茫 有 楽 館

明治21年の春

「トニ乾燥之地 築三宏廈一以為ニ高踏養心之幽齋一名日ニ開茫有楽館」と、別荘の隠宅を建てて「開茫有楽館」と名付けた。現在の天理教会の建物がその一部である。

浜益軟石か札幌軟石かは不明だが、半地下室の物置、その上に建てられた住宅、座敷におりながら街が見下せる。なかなか実利的な秀れた建物である。

このように絶高頂の頃、明治24年2月に開かれた大撃剣会を見物し、主任が牧田重勝であることを知った。もともと、厚田に妻子を残して武者修業に出かけた人であるから話も仕易かったことだろう。これを厚田に呼びもどして剣道場を開かせた。と見るべきであろう。寺小屋を開いたことを考え合わせると剣道場を開かせることなど容易なことだったろう。

● として 終りに

一 隠 居 届 一

「僅々三十余年間にして、家屋を累するもの数千、園団(はたけ)を拓くもの数々、莫大の名譽を佩び、衆庶の重望を担い、一郷の開闢を以て称せらる……傑士のしわざに非ずして、何ぞや。」と結んでいる。

役場の戸籍簿を見ると、明治34年9月(72歳) 隠居届が出されており、当時の風習が偲ばれた。明治36年2月に死亡。行年74歳であった。

氏の一生は徳川末期の動揺期・明治維新の変革期の荒波を乗り越えて来た人で、先見の明、決断力などの優れた人でなければ、とうのむかしに世の荒波に吞まれていたであろう。何の事故もなく、しかも成功して、天寿を全うすることができたということは幸福なことであり、傑物だったと云うべきであろう。

役場の事務分掌の変更により、これまで企画課で行っていた『弁財船』の編集は、総務課が担当することになりました。これまでも同様よろしくお願いいたします。

子母澤寛の資料追録

札幌在住の作家栗賀大介氏は兼ねてから子母澤寛先生に私淑され「子母澤寛」などと呼び捨てにしようなものなら、すぐ顔色を変えて立腹されるほどの熱の入れようでご自分は必ず「子母澤先生」或は「子母澤寛先生」とお呼びしている。そして「小説は手で書くものではない。足で書くものだ。」という先生の教えを忠実に実行されておられ、この厚田村にも数多く足を運ばれている。先年、子母澤寛文学碑建立の記念誌にもその稿を寄せておられ、今後、数年がかり

○仕立屋 三年乙組 梅谷生

夏の日の
燃え切った日光が
焼きつける程に
塵だらけな
仕立屋のにはへ
投げられている
ま昼中だ。
居並んだ
若い女や老姥が
其光に酔った様に
黙って針を運んでいる
どの女も青白い
どの人も疲れた色だ。
老姥は
ま白い棺衣を
若い女は

で『評伝子母澤寛』をものしよう
と目下執筆中と聞く。
氏は大正七年生まれ白髪長身、
鶴のような瘦軀でありながら、そ
の行動力は壯者をしのぐものがある。
先般「あつた／＼あつた／＼梅谷
松太郎の北中時代の作品が／＼」と
まるで宝物を把り当てたような喜
びようで話しておられた。そして
「北海中学校協学会誌」の写真と
北中三年生時代の作品とを提供し
て下さった。氏のご厚志に甘えて
その一部を紹介する。

真紅な産衣を
肩息し乍ら
縫っている
白銀の細針が
不思議な運命……を
語る様に
見えかくれに
きら／＼と
あやなして
進んで行く……。
北海中学三年生の頃と云えば、
祖母を亡くした祖父十次郎が養女
ミサを馬の背に乗せ、札幌に移住
した頃。自分は学校え、義妹は裁
縫所えと通っていた頃。
薄暗い仕立屋の部屋の中「白銀

の細針が不思議な運命を……」と
自分の運命を感じていたのであろ
うか。

○丸太

青白な弦の月夜
茂った森の樹々の
梢の先は針の様に
淡青い空を刺して
延々してゐる――。

この偉 よ木も
情知らず風に捕れて
素膚にされた女の様に
哀れな――淋しい――
丸太になって終ふのだ。
噫「自然の哀江だ夕」
権威 ちから 威圧 ご
其勢力が何処にある――
樵夫が斧の揮に
千年の古木も



北海中学校協学会誌

脆く斃れて伏すではないか
私はい――
泣かずに居られなかった。
山から伏り出された丸太は厚田
でも札幌でも、通る人の目に付く
ところに置かれてあつた。開拓途
上の土地柄としてはあたり前のこ
とである。この「素膚にされた丸
太」に、夜逃げして来た祖父の姿
を見たのではなからうか。

○怒りの秋夜

中三学年乙組 梅谷生

荒い秋の夜である。小さい星は、
いづれも死美人の冷く結んだ唇の
如く愛に枯れた青白い凄い光を途
切／＼に放つてゐる。一団の黒雲
が非常な勢で馳る。一塊、又、一
団、大不平が一時に破れた様に空
恨面が怒り狂ふてゐる。強い／＼
荒い／＼怒りの風は不平怒一の恐
ろしい響をあげて耳朶を裂く程に
叫ぶ浪の音を送ってくる。……こ
んな夜に……野心と希望とに満さ
れた美しい若い船長が……この風
……の浪に……揖も海図もうば
はれて……最愛の妻の写真を抱い
た儘、怒りの世から避けた……か
の妻は待ち読んだ胸に刺される様
に死の報を聞江て涙含む老姑の膝
に倒れ……姑は聖書を捧げて涙乍
らに……祈禱する……。
夜廻りの翁が風にも恐れずカン
カンと番木を打ながら近くの小路

からヒョッコリ現れて何やら小唄を鼻声で唄ひつつ矢張それでも打ち続けながら僕の面を通って行く……風が一瞬ちほけた提灯が消江相になる。翁は何にも知らぬのだ。

噫、恐ろしい怒りの世にもこんな楽しい翁も在るのである。

(郷里厚田にありて物せ日記の中より)

詩の子

郷里厚田の海の荒い浜で、幾多耳にしたであろう海での事故やヤンシユ達の多かつた、村の自衛的



明治24年2月牧田重勝の開催した国家之骨髓大撃剣会の番付工

直心館(じしんかん)について

な夜廻りと、その情景は容易に想像できる。

以上はいずれも興味深い資料である。なお「梅谷迷花」などと雅号を用いている作品もある。中学

「厚田村に直心館があるんですか、どこにあるんですか。」

「いや、あったんです。明治の中頃この厚田本村に直心館があったんです。」

生が雅号を使っているなんて、一寸料な感じもするが、自分を取り巻く環境からその行く先に迷いや不安を感じていたであろうことが推察できる。

こんな問答がある夏の日、突然交わされた。こんな過疎の村にあの有名な直心館があったなんて信じられないといった表情でその壮年は更に話をつづけた。

「直心館といえば直心影流でしょう、直心流といえば伝統の古い剣法で十六代目が牧田重勝という人だったとは知らなかった。」と

「……って明治二十四年に開催された大撃剣会の番付けの中央主任の欄の鹿島神伝十六代剣士牧田重勝とその紙面右端の依頼後見の欄の鹿島神伝十五代松平康年の文字をじいっと見入っていた。」

「あなたも剣道なさるんですか。」

と問うてみた。

「大学生時代、やったんです。現在は十八代目だと記憶しています。勝海舟も直心影流だった筈です。」と教えてくれた。

「道場といっても、すぐ近くの厚田神社の前の平屋の家ですが牧田重勝の年譜によれば門人は百人を越えています。どのようにして竹刀を回していたんでしょうね天井が低くて……。」

「いや、直心影流は竹刀ではな

いんです。樞の棒です。天秤の竿やスコップの柄に使われている樞材で反りのない木刀で本当の刀と同じ重さです。それを振って型を重点に教えていたものです。」

それじゃ、居合道・気合いですか。竹刀でないとなれば防具もないんでしょう。」

「いや、瓦を割ったり足で蹴るようなものも違うんです。法定(ほうじ)の基本型は一年へ

牧田重勝の年譜

- 氏名 桓武平氏三浦党、牧田平兵衛多々良重勝、堯孫道士と号し初名此吉と称す。
- 生国 遠江洲(静岡県浜松)
- 安政元年七月二十三日生れ。
- 本籍 福島県東白川郡伊下村(棚倉町古町六十一番地)
- 明治元年 部屋住みにて藩公正静様御提
- 明治二年 兄重孝儀昨年五月朔日白川戴争の砌、討死仕り候。苗跡を重勝に相続なし仕る旨、下しおかれ候。
- 明治三年 棚倉藩准五等散官。
- 明治七年 東京警視庁四等巡查。
- 明治八年 磐前県無禄士族(家禄奉還)東京表に移住。
- 明治十年 練兵場天覧に付き御警衛掛として出務。二等巡查。
- 明治十一年 西南事件により巡查29名を連れ鹿兒島へ出張。内務省詰める。
- 明治十三年 一等巡查。
- 明治十四年 特務巡查。
- 北海道樺戸集治監看守として勤務。
- 明治十七年 樺戸囚徒脱獄事件。
- 明治二十二年 厚田村に転住。
- 明治二十三年 わが国武道の源流、念流・影

の四季になぞらえて、計てのもが芽をふき出すような春の型・炎暑もふき飛ばすほど勢いのはげしい夏の型・静かな淋しい中になお生きづく秋の型・きびしい雪の中で長らこてゆく冬の型。とその練習はきわめて厳しいものです。そして、その根本は赤子の心にもどること、あかごくではなく、せきしの心と言います。いわゆる別な言葉で言えば無心ですね。慾望や邪念を払うことなのです。今でも年に一回鹿島神社に集って鍊成をしています。十五世山田次郎吉先生の著書をお貸ししましょうか。

ここまで話を聞いてや々と納得がいった。この人も剣の道では相当の修業を積んだ方だと思った。牧田重勝長女サク（現青山中央

郵便局長佐藤継男 亡母）提供のアルバムの中の家族の記念写真によれば、重勝は小柄な人だった。そして玄関の柱に直心館の看板も掲げてあった。

「道場は上間（どま）ではなかったが床は低くなっていました。そののち何回も改修されましたからね」という村人（永井千代・明治28年生まれ）の話もうなづける。厚田村に直心館が開設されたのは、明治24年に開催された大撃剣会の翌25年、佐藤弁蔵さんが先頭になって村の有志らと協議して牧田重勝を招聘した。そして門人は村内外から集まり百二十三人、明治17年生まれの長女サクさんも石狩あたりからも門人にして下さいと言ってきたよと話し下さったことを思い出す。

春先には厚田の浜まで下りて来て、鯨漁場で働き、冬は発足の山で造材・薪伐り、その間に開墾作業が進められていた。四歳の時（明治34年）厚田山間の道路が開削され、馬車の通れる広い道路だと村人は喜び合った。明治36年には簡易教育所が建てられた。それまでの数年間、父愛吉が寺小屋を開いていた。故人となられた小笠原竜一さんと藤田照太郎さんを教えたと聞いている。人家がふえて部落らしくになると神社が建てられた。ここにみんなが集って、厄病退去・豊作祈願を

入殖当時の発足村

小松美登（79歳）

父愛吉は長野県の神主の四男坊として生まれ、大望を抱いて北海道に渡り、発足の地に入殖して、明治31年に私が生まれた。

その頃の発足村は人の通る細い道で、熊笹と雑木林の中に開拓小屋が点在していた。開拓小屋というのは掘立小屋のことで、笹葺きの屋根、中は荒筵を敷いた粗末なもの、食べるものは雑穀と薯が主食で、白いご飯はお盆とお正月だけあった。

資料

- 牧田重勝の年譜 七枚
- 大撃剣会の番付 一枚
- 牧田重勝家系図 (平本敬正提供) 一枚

剣士 牧田重勝

（鈴木有男調査）
この資料は、牧田重勝の孫に当る青山の中央郵便局長佐藤継男氏のお力で、在京の方々と連絡して、ようやく入手できたものです。

・御料（帝室林野局）・神社・寺院・病院・郵便局等公共の施設が次々と設置された。更に駅通さんと呼ばれていた佐藤弁蔵がその別荘として有楽館を新築し近郷の人々の注目の的であった。
その佐藤弁蔵が発起人となって郡中の有志と協議し明治二十五年一月に牧田重勝を招聘し、厚田村に直心館を設立して武道を奨励した。

それより以前、牧田重勝は剣道の武者修業のため全道を歴遊し、明治二十四年に大撃剣会を興行した。その場所は明らかでないが、札幌の撃剣家として有名になった勝見角毛（勝武館主）、騎西源次郎（講武所主）・栗田鉄馬等が揃って剣士として出場している。多分その会場は札幌だったのだろう。その人を厚田に連れて来たのだから村人の引力は強力なものだったに違いない。そして直心館の門人は村内外から集ってその数は百人を越えたという。

明治の晩年四十三年に札幌の苗穂村に転住し、そこでも直心館を開設した。大正二年に新選組生き残りの永倉新八らと記念写真を撮り、札幌から東京に移って行った。翌三年病院で他界した。

流・一刀流の三大剣法のうち鹿島流の嫡伝たる十五代直心影劍士松平康年師よりの伝の印可を許され、宗家行司所直心館々主たる衣鉢を受く。北海道巡査部長を辞し、剣道修業のため全道を歴遊。
明治十四年
直心影流大撃剣会を興行す。出場剣士七十数名。
明治二十五年
昨年三月来、発起人佐藤弁蔵氏・世話人田川信行氏・遠藤豊吉氏等は郡中の諸君達と計り、その協議を得、牧田重勝を招聘して厚田郡に直心館を設立す。
佐々木保綱・田川岩蔵・阿部周齊・山本米太郎・鈴木繁次郎・木村米吉等祝詞を奏す。
門人山崎利次・萩原留蔵・福森栄太郎・市平吉之加・新谷与次郎・深野亀太郎・奈良岡甫外百二十三名。
明治二十九年
大日本武徳会々員。

明治三十三年
大日本武徳会計裁より北海道庁地方委員を嘱託さる。
明治三十四年
厚田消防組々頭、組衆55名。
明治四十一年
厚田在郷軍人団射的会副会長。
明治四十三年
札幌・苗穂村に移住、直心館を開場。
大正二年
札幌・五十嵐写真館で記念写真を撮る。東京牛込に転住。
大正三年
叡河台病院にて逝去（60歳）。

贈 寄 物 名 訪 ご

一、水がめ 厚田・寺崎光春
高さ60センチ、直径45センチ、

編 集 後 記

○新しい資料が手に入ったので再度、牧田重勝に焦点を合わせて書いた。そして、牧田重勝に関係のある佐藤弁蔵伝もここに載せた。

○一本の糸をたぐり寄せてみると様々に入りくんだ玉があり、それを行きつもとどりつほぐしていくと思ひもかけないあやに突き当ることがある。厚田村の歴史も丁度そんなふうで、ちよつとした発想で取り上げたことが意外な発展をみせることがある。小間切れの「弁財船」の記事がある時は遠く、またある時はそれ以前に事実として真に触れあい、肉声を交わしたとみられる節がある。

○チャンバラが好きで義妹やその友達にも玩具の刀を持たせて遊んだ梅谷松太郎(こと子母沢寛)も直心館に通ったという義妹の

「母キイ(明治36生まれ)今から約五十年前この家に嫁に来た。その頃すでに使用されていたものです。この水がめに水が少くなると気にかかっていた。飲み水は近くの井戸から桶でかっいで来る事が自分の役だったからです。板蓋をして大事に使っていました。洗濯は主として近くの小川でし、その他の使いの水は家の中のポンプの水でした。」

言が本当であるなら、同じ年代にしかも小さなこの資料に住んでいた梅谷十次郎と牧田重勝とが関係がなかったとは言い切れ

○発起人佐藤弁蔵らの招聘にかつて厚田に直心館を開いた牧田、樺戸集治監時代、新選組生き残りの永倉新八の剣道指南を受けた。大正二年の記念写真には永倉と牧田が並んで写っている。

○このように、糸の織りなす綾に思ひもよらぬ発見をすることがある。これらは近々の史実ではあるが厚田村にとって掛け甲斐のない歴史の一頁ではある。

○現代に立って一歩一武過去を探究し、その情景を偲び、現在のよって来た原因を究明し、明日に向つての判断の資料とする。これが歴史家の辿る道であるとするならば、小間切れの資料といえども粗略には出来ない。○おおよそ、事現 象を書きと

家号の「丸吉」の文字が白エナメルで書かれている。
一、石臼 厚田・寺崎光春
「この石臼は終戦後、札幌まで買いに行つて来たものです。弟と二人で、上下一個ずつ持つて来ました。」
未だ新しい、シャんとした摺白である。
一、徳利 厚田・佐藤 要
高さ25センチ、周囲42センチ、

どめることには限界があるとしても、有形の歴史はもとより、無形のものまで文章にして残せるものは少しでも、出来る限り止めておきたいと念ずるこの頃である。

○文化財は今開発の波から保護を待っている。
文化財は、国民全体の貴重な共有財産として強い保護が望まれています。都市から周辺の地域へと開発の波が次第に広がつて来ています。厚田村内でも、まだ保護保存の指定を受けていない建物や埋蔵物など、多くの文化財が破壊の危険にさらされています。みんなの力でこれらの文化財を守っていきたいものです。

○文化財とは、文化的な遺産をはじめ、学術上の価値の高い動植物や自然環境を総称し、次のように、分類されています。
有形文化財

ぶつぶつのある灰白色。
「八幡沢」(厚田神社西側の沢)の水道配管工事中、70〜80センチの深さの所から掘り出されたものです。」
この中には一升(1.8リットル)入らないからびんぼうとっくりと呼ばれています。一升を一生ともじて「一生涯かかって、お金がふところに入らない貧乏な入れ物」という意味。

建造物・書画・彫刻・工芸品
図書・古文書
無形文化財
演劇・音楽・工芸技術
民族文化財
衣食住・生業・信仰・年中行事の風俗習慣
記念物

史跡(貝塚・古墳・城跡)
名勝(庭園・海山の景勝地)
天然記念物(動物の生息地・植物の自生地・地質鉱物の分布地)
本道には、先住民族の住居跡・アイヌ文化・屯田兵資料・明治の建築物・開拓の資料・自然の名勝地・貴重な動植物などが豊富にある——などの特色が評価されています。

○厚田村内で調査や保護を待っているもの。
村内で、まだ指定されていない文化財が、緊急に調査や保護を必要としているものがある。

近年、硝水製一升瓶の空瓶は、回収に手間がかかるとか、運賃の方が高くつくとかで、引き取り手がいい顔しないそうですが、三十年程前には、これで米を搗いた記憶があります。今から五十年前以前には硝子製品は宝物だった筈です。主として地酒、特に焼酎の入れものとして使われた。その他酢・醤油・油などにも使った。

望来一耕鮒
桂沢一高師小僧
古潭一チャシ・内田山家
厚田一旧金の隠居家
発足一左股の滝
安瀬一ブトシマナイの巖洞

○住民の理解と協力が解決のかぎこれらの文化財の調査や維持管理には多額の費用がかかるので持ち主が個人である場合は市町村が道や国の補助を受けて、その負担を肩代わりする例もあります。

指定文化財は広に一般に公開し、国民文化の向上に役立てることになっています。しかし、問題はこれに止まりません。持ち主の財産権と保護の要望との調整、資料の保管と公開の場所の問題もあります。これらの課題の解決を早めるためにも、住民のみならずの理解と協力が望まれます。(鈴木藤吉)



弁財船

No. 31

発行 厚田村

厚田村の医療沿革

「私儀先般厚田江仰付被成候処
 当所ハ元来病院並ニ薬剤調合場所
 モ無之候ニ付キ移民民並ニ漁人等
 追々相嵩リ反的差支エ相成候間、
 更ニ凶面之通り表口八間三尺裏行
 間之病室、至急御取建相成度奉存
 候……壬申十月（昭和五十年北
 海道医報より）。

これは長岡習時医師が厚田詰に
 なつてから間もなく札幌病院に送
 った願書である。このことから明
 治五年十月には、すでに開拓使か
 ら医師として長岡習時が派遣され
 ていたことがわかる。しかし送られ
 た凶面通りの病院は建たなかつた
 ようである。この頃の開拓使の財
 政は非常に悪化しており、黒田次
 官と岩村判官が対決した札幌会議
 が開かれたのもこの頃であった。
 その後、約三十年間は資料不足



竹本和太郎医師

で詳でない。

竹本和太郎医師の卒業証書には
 池田和太郎となつてゐる。明治二
 十四年四月十一日石川県の第四高
 等中学校医学部を卒業して、増毛
 に勤務（月俸二十円）、鬼鹿に転
 勤、そして、公立厚田病院長とし
 て赴任されたのが明治三十五年七
 月であつた。

鬼鹿から随行して来た丁女の話
 によれば「鬼鹿の頃は池田の姓を
 名乗つておられた。厚田では竹本
 先生と呼んでゐた。改姓の理由は
 わからぬ。厚田村役場の辞令簿
 には確かに竹本和太郎と明記され
 ている。

話は未だつづく「当時の副院長
 は齊藤という人で、そのほかにも
 う一人くらい医師がいた。そして
 病院の南側に住宅があつた」と。

竹本先生の前任者は軍医だつた
 というのである。

竹本先生は昭和十五年十一月老
 衰のため床につかれるまで満三十
 八年間、厚田の医療のため、その
 一生を捧げられた。村民は齊しく
 慈父のように慕つてゐた。

竹本和太郎医師は珍らしく慾の
 ない人で、自分は平常貧に耐えな
 がらも患者に対しては仁術を施し
 時には当時として貴重な白米を袋
 につめて病人の住診をしたなど、
 今でも村人の語り草の一つになつ
 ている。

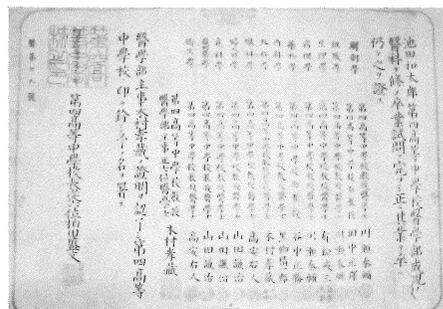
昭和七年六月厚田村長からいた
 だいた感謝状に「……明治三十七年
 特設電話ノ架設ニ尽セラレタル
 ヲ初メトシ、電灯ノ架設ニ、交通
 機関ノ設備、産業ノ振興ニ貢献セ
 ラレタル功績、枚挙ニ遑アラズ……」
 とある。

竹本先生は、「明治四年に東京で
 はじめられた電話が、その翌年に
 はもうこの厚田村の漁場を利用さ
 れ各漁場間の連絡に実際に利用さ
 れていた」と語つておられた。そ
 の私設電話が特設電話として取扱
 われるようになったのにも、色々
 と苦労があつたようだ。

大正十年、厚田村にとつた電
 灯についても、竹本さんは電工夫
 たちにまじつて働いた。

大正十五年、初めて乗合自動車
 株式会社を組織した。そして車は
 フォード車・スター車・レオ車と

竹本和太郎医師の 卒業証書



次第に大型乗用車から、バス級の
 車種に変えられていった。車庫は今
 の滋野さん・妹尾さん・病院の敷
 地内と転々としたのもそのため
 だつた。昭和十五年に石狩太美の
 宮本さんにその権利をゆづつた。
 また、乳牛の導入を行つて牧畜
 業を盛んにし、病院の裏手で、パ
 ターの製造を始めた酪農の先駆者
 でもあつた。厚田本村の東はずれ
 の竹本牧場の名を戦前の村人た
 ちは忘れてはいない。

その他、学務委員・厚田神社氏
 子総代・厚田青年訓練所後援会長
 厚田託児所長・厚田青年会館建設
 期成会長など数多くの公職を持つ
 て多忙な日々を送つておられた。
 竹本和太郎先生は昭和十六年正
 月、静かに天寿を全うされた。

(厚田診療所)

医 師 名	期 間	院 名
長岡習時	明治5. ~ 明治.	厚田病院
(この間不詳)		
竹本和太郎	明治35. 7 ~ 昭和15. 11	同上
(出張診療)		石狩町田中医院
清水勝美	昭和16. 11 ~ 昭和20. 3	厚田医院
栗岩陸三	昭和18. 9 ~ 昭和19. 1	同上
(出張診療)		札幌市北大病院
西村島子	昭和19. 4 ~ 昭和35. 12	厚田医院
衣川義文	昭和28. 4 ~ 昭和30. 9	共立診療所
奥茂信行	昭和35. 12 ~ 昭和45. 12	厚田国民健康保険診療所
中野日出男	昭和45. 10 ~ 現在	同上

(望来診療所)

室野 昉 三	昭和21. 4 ~	望来診療所
村田 武 俊	昭和29. 6 ~	同上
関根 道 雄	昭和33. 6 ~ 昭和34. 7	同上
黒田 雪	昭和36. 4 ~ 昭和37. 5	同上
大宮 新右エ門	昭和37. 7 ~ 昭和41. 8	同上

竹本医師の後、清水医師赴任までの一カ年間は石狩の田中医師が出張診療。西村女医の赴任以前数カ月間は北大病院から出張診療を実施して来た。
望来診療所については、昭和二十年の秋、軍医少佐の肩書のある室野昉三が最初である。

大宮医師解職後は厚田診療所の

医師が週二回の出張診療を行って、現在に至っている。
歯科については、石狩町の尾崎歯科医が厚田の民家で診療を行ったことがある。その民家は近江宅金沢宅であったが、その年代がはっきりしない。
札幌の佐々木政太郎歯科医が戦後、昭和二十二年頃から、民家で

夏期間だけ出張診療をした。
(歴代歯科医師)
尾崎 ○○昭和12. ~ 昭和不詳
佐々木政太郎 同22. ~ 同
古谷 一生 同43. 5. 1 ~ 同47. 3. 31
小池 正方 同47. 6. 15 ~ 同53. 3. 31
大堀 顕紀 同53. 6. 1 ~ 同53. 10. 31
楊 萬富 同54. 3. 1 ~ 現在に至る
保健婦については、八年間も欠員のこともあったがその後、次第に充実してきている。

(歴代保健婦)

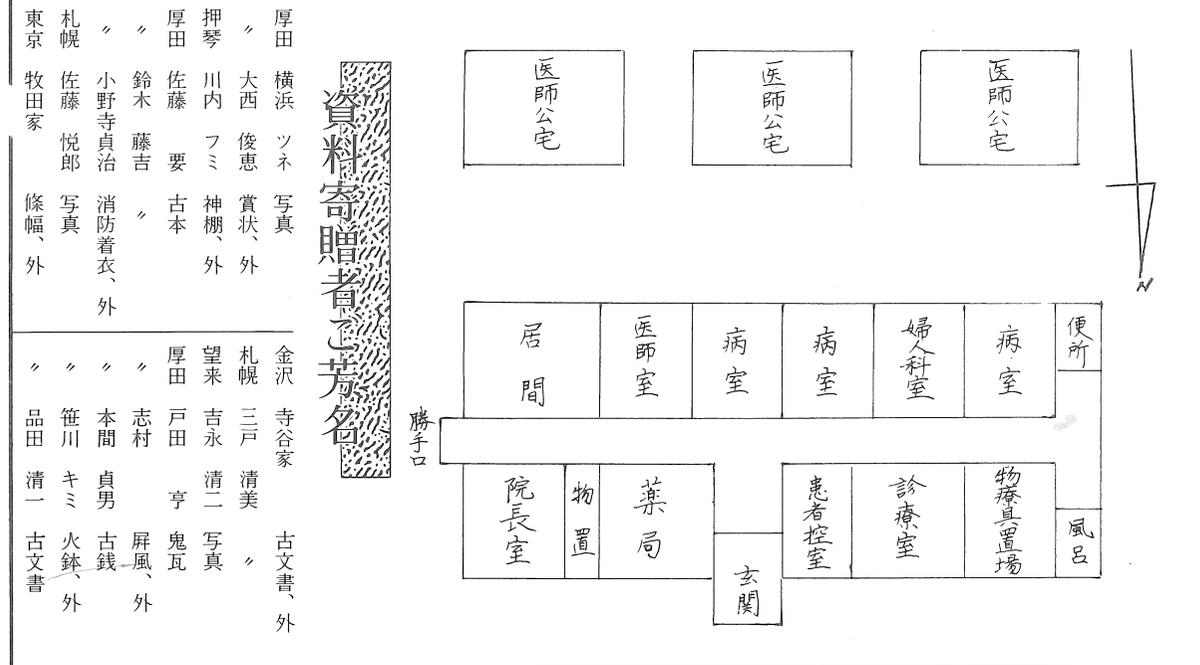
佐藤 千代昭和18. 6. 19 ~ 昭和19. 12.
水橋 とめ 同23. 6. 30 ~ 同不詳
七尾みつえ 同25. 12. 31 ~ 同36. 4. 5
鳥谷ツグヨ 同44. 7. 5 ~ 同47. 3. 20
玉置扶美代 同47. 4. 1 ~ 同48. 3. 20
佐藤夕美子 同49. 4. 1 ~ 同51. 3. 31
高橋 洋子 同49. 4. 1 ~ 現在に至る
池垣 和子 同51. 4. 1 ~

助産婦については、昔からお産婆さんとか取り上げ婆さんとか呼ばれ、地域の人々から親しまれ、尊敬されてきた人は、小さな部落でも一人くらいは居たものだ。

厚田本村では長谷川のばばちゃん、数十年間、数多くの赤ちゃんがお世話になったことであろう。長谷川ちよの後継ぎとしては免許を持った金米子が開業した。古潭部落では昭和三十五年頃まで鍋谷きよが、望来地区では篠塚コノがその任に当たっていた。

(厚田国保診療所事務長 国松栄)

厚田病院見取図 (明治の後半頃)



資料寄贈者(芳名)

- 厚田 横濱 ツネ 写真
- 厚田 大西 俊恵 賞状、外
- 押琴 川内 フミ 神棚、外
- 厚田 佐藤 要 古本
- 鈴木 藤吉
- 小野寺貞治 消防着衣、外
- 札幌 佐藤 悦郎 写真
- 東京 牧田家 條幅、外
- 金沢 寺合家 古文書、外
- 札幌 三戸 清美
- 望来 吉永 清二 写真
- 厚田 戸田 亨 鬼瓦
- 志村 本間 貞男 屏風、外
- 笹川 キミ 火鉢、外
- 品田 清一 古文書

あつたへのみち

厚田探景

札幌の都心から北にのびる国道三二号線をたどること二十数キロにして、石狩川口に至る。

シップ(聚富)

石狩河口橋を渡ると、厚田の山々が遠く正面に広がり、手近にシップの丘が迎えてくる。石狩と厚田の郡界である、シップ川を過ぎると、開拓之碑が建っている。

明治四年、本道開拓の先駆者として、この地にはじめて畝を下した仙台藩伊達の殿様はじめ百六十余人が、不毛の地としてシップの砂地を後に当別に移住された。現在チュウリップ・長いもの特産品を生み出している。

明治から昭和の終戦後まで、石油採掘の橋がシラツカリの海岸に立っていた。今はこの櫓の代りにごみ処理場の煙突が高く建っている。この辺一帯は鮭・ぼらの獲れるところで、むかし、その網に、脚部の欠けた仏像がかかっていた。その仏像は修理されて、コタンの童沢寺に今でも安置されている。

道花に選定されたハマナスの原生花園もこ

の辺にあり、貴重な存在である。浜は海水浴場として、年々、その賑わいを増している。

更に、シップの丘の上に立つて南面すれば、手稲・恵庭の連峯を背景に、広々と展開された石狩平野を一望におさめ、紅白の石狩灯台は路傍の花のように近い。それにつづく小樽・積丹の山なみは、遠く紫に霞み、さざ波は岸に沿って白線を引き、沖のうねりはその果てを遠く沿海州にまで運んでいる。雲を焼き、海を煮立て、沈み真紅の落陽は秒秒刻々に変化し、一日の漁を終えて帰る漁船までも、その温い色に包み、己の姿を海の彼方に没してまでも、陽光は波間のブリズムとなって長く尾を引き汀にとどく。

同じこの場所での、冬の光景はまた格別で、海面から横に吹きつける強い吹雪にはオーバーの襟を深々と立て、凍てついた朝の濃霧は巾広い石狩の川面に立ちこめて、さすがに広い石狩平野をすっぽり包み、下界の汚塵を拭き消してしまふ。

さらに、頭を東方にめぐらせば、百万石の

米どころを誇る当別・岩見沢と黄金の波がつづき、郡界の阿蘇岩山頂には、北辺の守りも堅く、猫の耳のようなレーダー基地が、呼べば応えんばかりの近きにある。シップの高台はしばらく続く。右手に太平洋ゴルフ場の白い建物も見えて来る。

モウライ(望来)

望来の下り坂にさしかかると、正面に青い海があらわれ、汀に打ちよする白い波が一線となつてたわわれている。その手前に展開する街の屋根並みは色とりどり、まるで楽庭のように整った一幅の風景である。

右手につらなるマサリカップの沢にはアイヌの所有した土地があつて、アイヌの代表が数人で小作料を受取りに来たという話や明治の後期から大正にかけて入殖した当時は沢に道路はなく高台を歩いて通っていた。その高台のガンビ平に野火があり、四十日間もつづいた。という話、この部落の人たちは勤勉な人が多い。

更に、奥にシュンベツ(春別)の部落がある。こゝには終戦以前まで浅見仙作というキリスト教信者が住んでいた。戦時中、獄に送られたが己の節を曲げず、終戦前に獄から出ることを許され、終戦後、札幌の苗穂刑務所の伝道師を勤められた。今では、法学校の沢という名称だけが残っている。

ながめをもとにもとめてみよう。望来市街地の中央を通る巾広舗装道路は望来本沢を縦走り、桂沢部落の入口、望来大橋からミネトマリ(嶺泊)の浜に通する切割り道路にさしかかる。むかし望来に入殖した人たちはこの切割りの高台を歩いて嶺泊の浜まで、漁業の手間取り(季節労働者・アルバイト)に通つたという。望来村一番地も、墓地

も、この望来大橋附近にある。

ミネトマリ(嶺泊)

むかし、オンネドマリと呼んでいた。こゝには大きな漁家があつたが、今は数軒の漁家があるだけである。

南側に通称、二丁の坂という、北側の坂道よりもつと句配の強い坂道がある。今はこゝは旧道となつているが、昭和十五年頃、木炭バスが走つたことがある。その木炭バスがこの坂にさしかかると、乗客が全部おろされた。乗客は、みんなそのバスを後から押しつけた。乗客は、同じこの急な坂を下るのであるが、客は車の中のとこかにしっかかりつかまつて、息が止まる位緊張していた。

コタン(古渾)

高さ二・三十メートルの丘を海岸に沿つて北進すると古渾村に至る。

コタンはその昔運上屋のあつたところで、明治になつてから開拓使厚田出張所と代つた。浜にはオシコトと云う天然の船入洞があつて、千石船の停泊地として賑わつた。今は海岸も浸蝕されて、その跡もないが、明治初年頃に描かれた、厚田全部漁場絵図には本陣・蔵倉・弁天社などが美しく描かれている。また、こゝにはチャジが残っている。チャシとはとりで(砦)のことで、一口で云うならばお城のようなもの。部落を守るためにこの高台に集つたり、遠くの同族に合図するためのろし(烽火)を焚いたりしたところ。今は国道工事で削られたが、それでも未だ半分は残っている。

オシコト(押琴)

むかしはラショロコツと云っていた。地形がお尻のような形をしている。そして、次の

ような伝説が残っている。

「ひとりのアイヌがよもぎの串に鯨の肉をさして囲炉で焼いていた。いつの間にか居眠りをしてしまった。パチンという火のはねる音にびびりして目を覚まし、のけぞつて尻もちをついた。それで、この地形がお尻の形になつた。焼けて折れた串は海に投げた。その投げた串が岩となつた。今でもこの二つ岩はこの洞に入つて来る目印となつている。どんなしけ(時化)の日でも、この洞だけは波がなく、二・三千ばいの千石船が停泊したという。古渾神社のおみこしは、こゝで助かつた千石船の船主がお禮の印に贈つたものだという。

コタン部落の南の高台にも、北のコタン(小谷)村にも畜舎が目につく。昔は馬の産地であつた。この辺は海岸が近いので、牧草にも塩分が含まれており、空気が新鮮で、病原菌もない。それで、畜産には最適な地というのである。

コタン二村につづいて、アヲシユマ(青島)の隣りに、ヤーマシラリ(山下の沢)、昔こゝは、狐狸の住むところで、僧侶や医者や村人を迷わせた話のある山下橋を山手に見る。アイヌ語のヤーマシラリは潮の干満によつて見え隠れする岩の意で、これが山下と転化したのであろう。

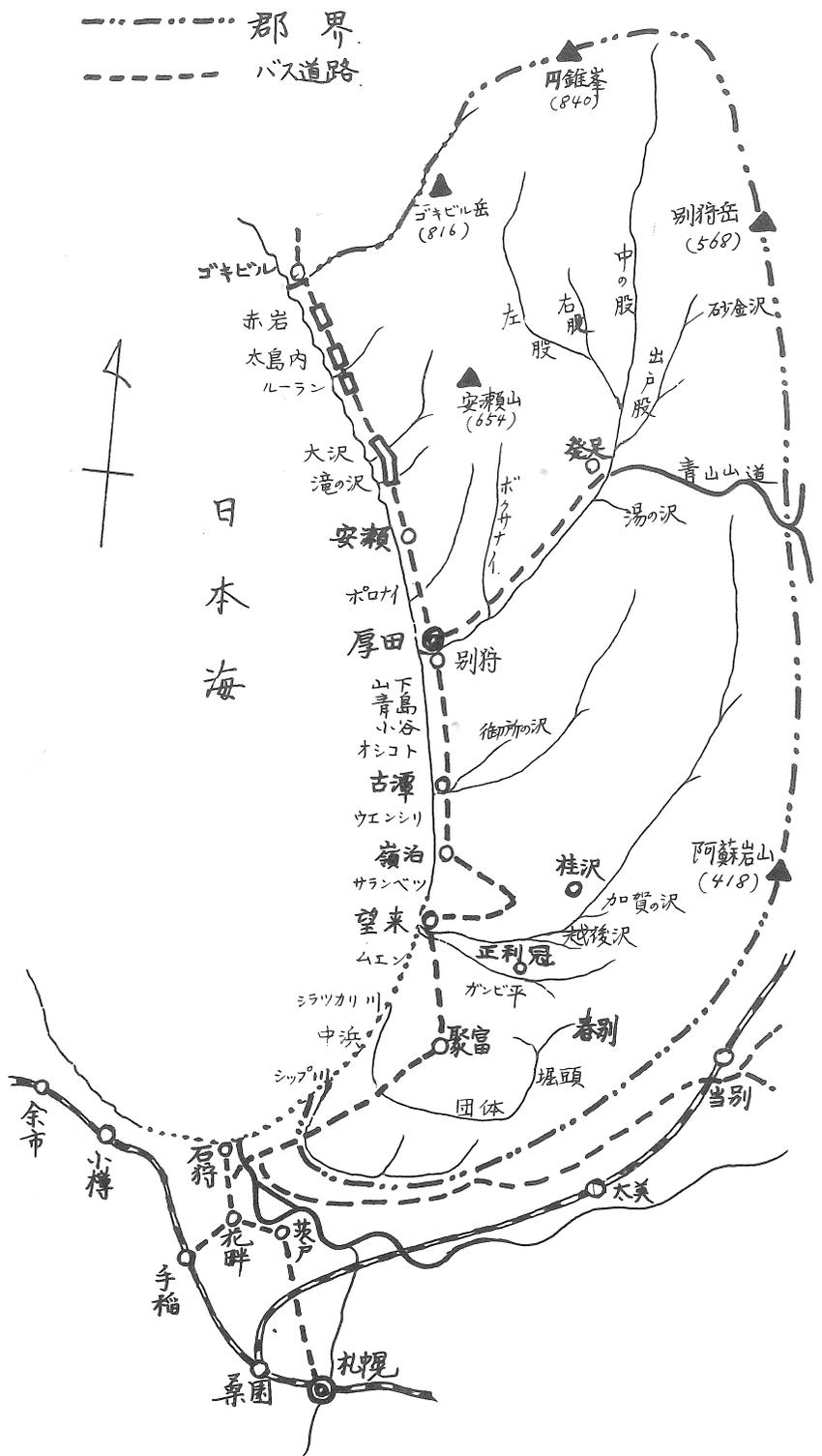
ベツカリ(別狩)

厚田川の手前で、こゝには、戸長役場があり、登記所があつたと古文書には見えているが、その地点はまだ不明である。川を、だてて広がる厚田市街地とは二本の橋で連なっている。

アツタ(厚田)

地図の上では、厚田郡南北四十キロのほゞ

厚田地名図



中央に位している。厚田以北の約半分は山岳地帯である。

ハツタリ (発足)

厚田川上流十キロ地点に発足部落が点在している。近年は資源愛護の立場から、川魚の禁漁を行って来た。その効果が現われはじめ、厚田川の上流には魚が黒く見えるほど集まっている。鱒でも鮭でも、発足の田圃に入つて

来る。

更に、上流には滝も多く、仲々の眺めである。熊と格闘して体に二十数ヶ所の傷を受ける。熊にもか、らず、メンソレータムで回復するのに数週間も要したとか、その他狩猟に関する逸話も豊富である。

北の山地は第三世紀層の岩のため、地形は峻しく、標高六・七百米メートルの田舎峯・濃

岳・安瀨山等肩を並べているが、二千メートル級の山に匹敵することである。その危険度においても、天候の変化においても、鳥獣や動植物の生育状態においても……山の天へんにある桜の木が根元は、かかえもあるが丈は二メートルもない。その枝が全部

下に向つて伸びていて十畳余の広さもある。珍らしい存在だ。

もう一度、厚田市街にもどつてみよう。明治四十一年に、一万円余を投じて、漁家の親方久丸(ヤママル)佐藤松太郎がひとり

寄贈したという厚田小学校……その校地の片隅に記念碑が残っている。第四十三代横綱吉葉山潤之輔の寄贈した土俵場も、四本柱の朽ちると共に、屋根もろとも姿を消したが、吉葉山のまわしが神社に奉納

されている。

厚田神社の境内に剣道直心影流第十六代牧田重勝の碑がある。作家子母沢寛の文学碑は、厚田公園、即ち南向の丘に建っている。

創価学会第二代会長戸田城聖の生家もこの公園に保存されている。ポロナイ(幌内)

弁財船

厚田市街地から、三二号線をたどって北進する。厚田中学校を過ぎるとゴロナイ(大きな沢の意)がある。この沢の上流には人家はなく、天然の良水が豊富で、現在は、厚田簡易水道の水源地になっている。昔にしん場の親方たちは、こゝから水を運んで行って、お茶水専用にしていた。

ヤソスケ(安瀬)

安瀬の部落に入ると、第四十三代横綱吉葉山潤之輔の家がある。リビラ(高い崖の意)の手に十軒余の人家が並んでいる。鯉のどれていた頃、気楽町の異名があった。年中鯉場の親方連中のトバク場であつたらしい。今は、国道となつてその異名も消えた。

ルーラン海岸

安瀬部落を過ぎると、こゝからゴキビルまでの約十キロの岩礁海岸をルーラン海岸と呼んでいる。こゝは、断崖絶壁、風光明媚な仙人境で、あまり峻しいので海岸は歩けない。トンネルが四つ並んでいる。

第一は、滝の沢トンネル(二百四十二メートル)今は、滝の上を滝が流れている。このトンネル中央附近に左右に一つづつ小さな窓がある。この窓から外を覗くと大沢の谷川がある。

こゝは、魚のたくさんいる所で、にしんの千石場所。海に突き出た歩み岩には三十二コもの穴があいている。この穴に丸太を差し込み、歩み板を渡し、モッコを背負つた若者を歩かせた。

アイヌ語でチカフセシシユナイ(鳥の巢の多くある沢の意、鳥の多いところ、魚も多いあまり云いにくいので大沢という和名にした)であらう。

このトンネルの出口には仁王があつて、海に向つて口を大きくあけている。ペセバケ(その崖がそのまゝ、頭形をしているの意)その他が岩・車岩・チャチナイ(小さい滝、さながら、奇岩怪石の巖敷会のような)である。

第二は、ルーラントンネル。(神の下る急な坂道の意)アイヌのいう神とは熊のことである。この急な坂を通つて海岸に下りて魚をとつたのであらう。

ルーランという発音のひびきが何となく夢のような甘さを持つていたので、昔から親まゝ来て来た名前である。子母沢寛の義弟にあたる洋画家で有名な三岸好太郎は、自分の年譜に「ルーラン十六番地に生まれる」と書いている。この名前のひびきが気に入つていた。

ルーラントンネルを出ると、海につき出した洞門が大きく口を開いて迎えてくれる。泳いでいる魚や海草・貝などもよく見える。夕日の沈む頃ともなれば、義経ならずとも、在りし日の静御前を思ふて涙するであらう。

今にも落ちそうな、義経の涙岩もこゝにある。こゝは昔からなじみ深いところで、厚田の人は夏になればこゝに来て観風会を開いた。この谷川をまたいで大きなにしん番屋が建てられていた。番家の中を川が流れているのだから水に不自由しない。

昔、こゝで昆布取りをしていた夫婦があつた。米・味噌・醤油その他日用品を舟で運んで来た人の話。

「あそこは、まむしの多い所で、石を動かすと幾組もからみ合つていた。海から見ると奥深い洞窟がいくつもあつた。おーい。いたか、持つて来たぞ」と声

をかけながら奥へ進む。目がなれないので何も見えない。頭につかぬものがあるから、それを両手で払いよけながら奥へ奥へと進む。やっと辿りついて、ふつと後をふり向けば、入口の穴だけが明るく見える。そして上から棒のようなものがぶら下がっている。

「おやじ、あれはなんだ」
「あれか、あれはまむしよ」
今、自分が入つて来た時、頭や顔にぶつかったのはあれだったのか、と薄気味悪くなる。蛇の皮をむいて陰干しすればばりくになる。」

また、この夫婦はこゝで赤ん坊を生んだ。産婆さんもないので自分で取り上げた。むしろの上に乗せ寝かせて昆布採りに精を出した夫婦は、その後厚田に移り住んで余生を送つている。だから、そんなに大昔の話ではない。

現在こゝには、駐軍場も水呑場もある。第三の太島内トンネルと第四の赤岩トンネルの間に虹の滝がある。こゝにも車岩の巨形が現われている。この車岩にかかる虹の滝は崖の上の方では確かに一条の水となつて落ちているのに、途中で雲霧蒸消して地面にまでとどいていない。これに西日を受けて小さな虹の現象が見られる。

このように変幻自在な美しい滝も、冬にはまったく正反対な男性的な姿に変わつてしまふ。鐘乳洞を逆にしたような、がっちりとした水の塊と化し、つらの剣が何本も上に伸びて、夏のそれが天女を冬のこれは剣が筆である。

赤岩トンネルの入口近くに立止ると、左手上方に鳥帽子を冠したスマートな大宮人の像がくつきりと海に向つて立っている。誰が安置したものか、自然の造形美にうっとりする。

また、舟で赤岩附近を通過する時、何百枚かの畳を斜に積み並べたような岩がある。舟の座礁を警戒して遠まわりしながらゴキビルの淵に入る。

ゴキビル(濃屋)

ゴキビルは、絶壁の陰の意。ゴキビル川が厚田と浜益の郡界である。昔この川の流れば海に近くなつたところで北に向い、部落を切断していた。今では東西に流れ、そのまゝ、海に注いでいる。川のこちらには人家が七八軒、川向うには学校ほか五〇戸があり、洋館風のめずらしい鯉番屋もある。

安瀬の崎からゴキビルに至る山道をゴキビル山道という。安政四年、厚田場所請負人浜屋与三右衛門が私費を投じて開削したと云われている。

最初の沢が滝の沢である。この沢の南側の細道を登つて行く。わずか五百メートルほどではあるが、こんどは北側の道を下らなければならぬ。この二本の道はそんなにはなれていない。目的地に向つては少しも進んでいない。誰も阿呆らしくなる。この沢のことをバカクサイ沢と呼ぶようになった。

これからの山道は特に、峻にして険、しかも軒余曲折。明治、大正の郵便配達夫は銅製の熊よけラッパを吹きながら、この山道を通つた。春先には笹笹を折つて束にし、尻に当て、堅雪の坂道を滑り降りた。これを笹滑りと云つた。

ゴキビル山道にはいろいろと逸話が残されている。凍死した坊さんの話。崖から落ちて海岸で死んでいた行商人の話。軍隊が強行軍して苦しんだ話。次の話もそんなに昔ではな

い。ゴキビルに行く嫁さんが厚田で髪を結つて、晴着のまゝ、迎えに来た人たちと一緒に山道を歩いて行つた。峠の上まで来るとあととは下るだけだ。着物の裾を端折つて下り初めた。立木から立木にすがりながら油断なく下りては来たが、途中で髪が脱げて、ころころがり、嫁さんより先にゴキビルに着いた。

また、厚田村役場の古手の職員は云う。「選挙のある度に投票箱をかついで山道を越えた。トンネルが開通してからは十キロ余、車で二十分、便利になつたもんだ。」と。

(鈴木清石)

編集雑感



●弁財船の編集割付け作業を終えて、いつも思うことは執筆者が少ないことである。その点、今回は厚田診療所事務長の国松栄氏が原稿をお寄せ下さつたので助かりました。だが不十分の箇所があります。どなたかわかつている人がおられましたらお知らせ下さい。お待ちしております。

ついでながら今後共、この種の研究者の輩出を期待しております。

(鈴木藤吉)

本州と厚田を結んでいた千石船は大正のはじめ頃までつづいた。その千石船を幾艘も持っていた加賀（金沢市）の寺谷家には、今もいくつかの倉庫があり、当時の古文書が残っているという。

昭和四十三年に厚田村史が刊行された頃、二棚もの資料をいただいた。昭和五十二年にひよつこり御主人の寺谷文二氏が来厚され、いろいろとその頃のお話など聞くことが出来た。まだ、厚田関係の資料はありますよ。一度お出で下さい。うちにお泊りになつて、ゆ



(寺谷家から寄贈なつた古文書)

寺谷家文書について

つくりと……」とご親切なお言葉をいただいた。まるで旧知にめぐりあつたような懐かしさをおぼえた。厚田の旅館に一泊していただいて翌日お帰りになつた。その後、寺谷さんから小包が届いた。金沢名菓のラクガンとか樽飴はみんなで賞味した。そのほかに古文書の資料も入つていた。みんな厚田関係

のものばかり、中には、補助線一本引いてないのに相撲の番付表のようにきちんと揃つていて何とも云えない美しい筆跡、みんな口をそろえて「すばらしい」の連発であつた。

北海道開拓記念館にお勤めの藤村先生の助力を得て整理中である。一メートル半もある長い手紙から

半紙四分の一ほどの受取書まで、一枚く／＼丁寧にしわを伸ばし、和紙で裏打ちをして取扱ひ易くした。そして、読み写すというか、書き写すというかして、丹念に分類した。面白いのに出会つたり、珍らしいのを見つけた時は、嬉しくなつて心がはずみ、小踊りしてしまふほどだつた。

「アツタは一等の地にて……スツツ・ビクニ・余市などでは平均百七十石……アツタは平均三百五十石の大々漁……」とか、

「出港の税金が積荷の百分ノ四……」とか、

「船形日本形・積高八百八十八石・船名久吉丸厚田郡産物、鯨ノ粕・白子・胸鯨
此税金百四十三円六十銭
右之通り出港税上納仕り候。以上
明治八年八月二日……」とか、

港々に無事に入入り出来る往来手形、関所手形、此度商売の為、諸国を廻船して来ました。宗貞宗教のこと。当時はキリスト教が禁じられていたので、それを改めたというのでしよう。万端相改め間違ひありません。それで津々浦々の御関所、お通し成し下さる可く候。安政七年二月 大阪近江屋清兵衛 津々浦々御関所」とか、

「官許、感応丸之主治
第一、きつつけ、目まい、立くらみはらのいたみ、むし、しゃく、食しよう、下りはら、づつう、疝氣のいたみによし。

乳のみ子などには口中にてよくかみくだきつばともに口よりすぐのませてよし。

生れ子、ほそのをおちたるあとえぬりて風ひかずして諸病おこらず、若し、いたむようならばさいくぬるべし。」

など、昔の人々の姿があり／＼と浮かんで来るようで、ほ、えみながら、いつまでも作業をつづけていた。寺谷文二氏に対し感謝の気持ちでいっぱいです。

寺谷家文書一覽

一、帳簿	九冊	七、相場表	三枚
二、買仕切	九枚	八、賀状	三枚
三、請取証(船の關係)	九枚	九、電報	二通
四、受取書(日用雜貨)	八枚	十、手紙	十四通
五、借用証	七枚	十一、その他	四枚
六、相統登記願	二通		

いづれ、これらを全部読解して一冊にまとめたかと考えている。虫に食われている部分はそのままに、手紙など、どうしても読めないところがあれば□でかこみ決してこじついたり、我流にながれないよう、無理をせずに、細心の注意を払いながら処理したいと考えている。

一、帳簿九冊の内訳

- 一、明治16・1 当座帳
 - 二、同 19・5 下り物売揚帳
 - 三、同 19・7 産物目録簿
 - 四、同 20 荷物売買仕切帳
 - 五、同 23 厚田郡貸金簿
 - 六、同 23・6 厚田郡当座帳
 - 七、同 23・7 北海道産物積載記 (幸徳丸)
 - 八、同 23・7 海産物買入簿 (幸徳丸和吉)
 - 九、同 40・2 船玉雜用帳 (長永丸岩田)
- (湊石記)